



アンテルナシオナ
ル・シチュアシオ
ニスト 第8号



シチュアシオニスト・イン
ターナショナル

目次

- 1、自然の支配、イデオロギーと階級 訳者解題
- 2、自然の支配、イデオロギーと階級
- 3、存在の前衛（アヴァンギャルド）
- 4、いくつかの国にみられる反シチュアシオニスト作戦
- 5、王さまのすべての家来（オール・ザ・キングズ・メン）
- 6、S Iは君たちにそれをはっきりと言っていた！
- 7、定義
- 8、当たり前の基礎事実3、4
- 9、世界転覆の技術 訳者解題
- 10、世界転覆の技術1、2
- 11、『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』誌の紹介
- 12、構築された状況における反復と新しさ
- 13、シチュアシオニスト・インターナショナル反一情宜局
- 14、噂の選集
- 15、シチュアシオニスト情報
- 16、付属資料 ポトラッチ3 訳者解題
 - 落書（エクリチュール）の役割について
 - パリ市の合理的美化計画
 - 一步後退
 - シチュアシオニストでいたいなら、さらなる努力を——解体のなかで、解体に抗するS I
 - 『ポトラッチ』のかつての役割と今の役割
- 17、解説 シチュアシオニストを斜めから見ること 上野俊哉)

1963年の冒頭を飾るこの論説は、60年代の「新しい資本主義」の出現のなかで、対抗勢力のどれもが有効な反撃を行えないでいる現状を厳しく批判し、シチュアシオニストの考える新しい「革命運動」の性格（その展望とその主体）を定義し、その運動におけるS Iの「新しい理論家」としての役割を明らかにするものである。

60年代のフランスは、50年代中頃から始まった経済の高度成長の結果、「際限なき物質力の増大」という社会状況を産み出したにもかかわらず、大衆の労働と技術力の高度化によって実現されたはずの「自然の支配」という物質的解放の成果は、自立した大衆が自らの解放のために利用するのではなく、権力を持った専門家によって篡奪され、古い社会の利害に従ってその使用方法を決定されてしまっている。そのため、「自然の支配」が人間の生を解放するのではなく、逆に、「人間による自然の占有」こそが社会的疎外をますます促進する結果となっている。古い形態の労働運動やフランス共産党などの既成政党とはちがって、こうした現代社会の疎外状況を多少なりとも認識し、それを批判する勢力も出現しはじめているが、しかし、そうした新しい異議申し立ての勢力も、展望のない行き当たりばったりの批判に終始するか（現代芸術の異議申し立て勢力）、第三世界の革命運動を無批判に称賛し、スペクタクルの社会の観客になってしまっている（〈アルギュマン〉派などの知識人）。S Iが唯一評価する〈社会主義か野蛮か〉も、労働の物象化と余暇の受動的消費を批判するそのやり方は、過去の「人間的な」関係の回復によって、労働を単に「人間化」することを求めているにすぎず、シチュアシオニストの言うような「新しいタイプの自由な活動」のために「労働」を破棄するという根元的な批判に達してはいない。「労働」の人間化という主張は、逆に、現代の産業がより高い生産性を求めて行う主張と重なりかねず、その意味で「労働」という幻想に囚われた改良主義と言わざるを得ない。

こうした幻想を却下して、シチュアシオニストは一挙に「労働」を破棄する進を選ぶ。先進資本主義国の物質力の増大のなかで、人々に「生 (vie) 」ではなく「余剰の生 (survie) 」を強制することで自らのけちくさい「生き延び (survie) 」を確保しようとする体制が、人為的に作りだした「労働」と「余暇」、「生産」と「消費」という偽りの二分法を、シチュアシオニストは拒否し、「環境と時間に対する（一時的で、流動的な）支配」としての「生の契機 の構築」、「あらゆるものに関するとてつもない創造性の水門〔を〕開くことを提案する。この「生の構築」と「創造性」の無限め開放を担いうる主体は、「知識人」でも「芸術的ボヘミアン」でもない。「生き延び」のための日々の「労働」からは一見もっとも自由であるように見える彼らは、実際は「スペクタクルの社会」のなかでそれぞれの役割の中に閉じ込められ、彼らなりの「商品」を生産させられ、あるいは他の労働者に先立ってこの世界の「スペクタクル的消費」の観客としての特権を担わされているにすぎないのに、そのことを意識さえしていない。シチュアシオニストが主体として想定する者たちとは、「新しい貧困」に曝された「新しいプロレタリアート」である。すなわち「（社会が許容する豊かさと消費の促進のさまざまな度合いで）社会から消費するよう割り当てられた社会的時空間を変更する可能性をまったく持たない人々」のなかで、その現状に異議を申し立て、「新しい貧困」を拒否する者たちである。彼らこそが、「知識人の党」

のようなスペクタクルの社会の観客による参加ではない、「モルモット専門家の参加とはまったく異なった形の参加」を可能にするのである。

シチュアシオニストは「イデオロギーの死」というイデオロギーが支配し、資本が国家の枠を越えて世界化して、世界が「スペクタクルの世界」として統一される現代という時代を、「階級闘争の消滅」の時代ではなく「階級闘争のカードの再配分」の時代であると規定し、そのなかで「国家の乗り越え」ではなく「超一 国家装置の中でのナショナリズムのニューディール〔=新規まき直し〕」が行われているにすぎないと、90年代の現在の状況を先取りするような鋭い見方を提出している。「イデオロギーの死」も「階級闘争の消滅」も、実際は「スペクタクルの社会」のなかでの、支配層による時空間の新たな組織化と、新たな統合の開始に他ならず、それは60年代から90年代にかけて本質的に変わってはいない。このプロセスのなかで、シチュアシオニストが定義する「新しいプロレタリアート」とは、「大衆的な拒否とサボタージュ」、そして「創造性」の無限の開放を伴った「新しいタイプの自由な活動」によって、この枠組みそのものを粉砕する者たちなのである。それゆえ、シチュアシオニストにとっての「革命運動」とは、「労働」と「余暇」、「労働」と「消費」といった社会生活の既存の組織化を前提条件としたなかでの改良ではなく、既存の社会生活と既存の時空間の「組織化」の仕方そのものを変革し、その後の「恒常的な再組織化」の仕方をも根底的に変革するという射程を待った運動となる。そうした根本的な変革の運動は、すでにさまざまな場所で開始されているが、そうした運動の実践的力に理論的力を伝えるべき「理論家」もまた、自らが分離された権力となることを厳しく拒絶しなければならない。S Iは自らをある意味で「理論家」として位置づけているが、それは古典的な意味での「知識人」や「職業的革命家」のそれではない。S Iの言う理論家とは、「自分たちの理論を探し求めている無数の新しい実践」に首尾一貫した批判理論を伝達する者たちの集団としての理論家であり、「異議申し立ての理論的組織化」を求めて「異議申し立ての運動の理論的力と物質的力を」「再び組織する」作業に従事する者たのこちである。

こうしたS Iの「革命理論」とも言うべき新しい理論は、1962年1月にアントワープで開催されたS I第6回大会で確立されたものである。S Iの設立当初から存在した「芸術作品派」とも言うべき潮流（西ドイツの〈シュプール〉派、スカンディナヴィアのナッシュ派）を除名した後はじめて開催されたこの第6回大会は、S I自らが「S Iの急進化」の諸問題を討議する大会だったと述べている（第8号「シチュアシオニスト情報」を参照）が、そこでは、シチュアシオニストとしての首尾一貫性、「外部の好意的な諸潮流や敵対的な諸潮流」との関係の正確な規定、「当面の非合法活動と実験」について話し合わせ、S Iの組織形態をそれまでの国別のセクションの連合体から「唯一の統一的中心機関（センター）」に変えて、S Iの理論的・実践的統一が実現された。「革命組織」—— といっても、まったく新しい性質の「革命」を追求する、既存の形態の組織ではない「組織」だが—— として「急進化」したこのS Iは、やがて60年代末のまったく新しい形の反乱を理論的に準備することになるのである。

人間による自然の占有は、まさにわれわれ自身がその中に巻き込まれている冒険である。それ自体を議論することはできず、ただそれを出発点として、それについて議論することができるだけだ。現代の思想と行動の中心で常に問題となっていることは、人間が支配した自然部門のどのような使用が可能かということである。まさにこの使用についての包括的仮説の命ずるところによって、プロセスのあらゆる瞬間が提示する選択彼のなかからどれを選択するかが決められる。同時にまた、各部門の生産の拡大の周期と期間もそれによって決められるのである。この包括的仮説の不在とは、実は理論化されていない唯一の仮説の独占状態にはかならないが、それは、現在の権力が盲目的に成長した結果、自動的に生じたものなのである。この不在は真空状態を産み出し、それがここ40年来の同時代の思想の運命となってきたのである。

生産の蓄積とますます高度化する技術力の蓄積は19世紀の共産主義が予測したよりもずっと速く進展した。だが、われわれはいまだ、過剰設備を有した先史段階にとどまっている。1世紀にわたる革命の試みも、人間の生活が合理的で情熱的なものとはならなかったという点で、失敗に帰した（階級なき社会のプロジェクトはいまだに実現されてはいない）。われわれは際限なき物質力の増大のなかに突入したが、その物資力は本質的に静的な利害に、それゆえ、とっくの昔に死に絶えたことが周知の事実であるような価値に、奉仕するよう留め置かれたままである。死者の霊が生者の技術の上に重くのしかかっている。いたるところで絶大な権力を振るっている経済の計画化も常軌を逸している。それは、毎年毎年規則的に発展するという教科書的な固定観念によるものというよりもむしろ、経済の計画化という観念の中をひとりで循環している過去の腐った血によるものだ。この腐った血が「非情な〔=心臓のない〕世界の心臓」の人工的な拍動に合わせて絶えず前に送り出されるのである。

物質的解放は人間の歴史の解放の前提条件であり、ただその点でのみできるものである。到達すべき発展の最低水準をどう考えるかは、何よりもまず、どのような解放のプロジェクトが選択されるかに、それゆえ、その選択を行うのは誰か——自立した大衆か、権力に就いた専門家か——にまさしく依存している。不可欠なものについて、特定のカテゴリーの組織者の考えに共鳴する者は、その組織者が生産することを選んだ事物に関してはあらゆる欠乏状態から解放されるかもしれない。だが間違いなく、その組織者そのものからは決して解放されることはないだろう。位階制（ヒエラルキー）の最も現代的でまったく予期せぬ形態も、常に、受動性と無力と隷属状態とが支配する古い世界を高い金をかけて作り直したもの（リメイク）にすぎないだろう。どれほど社会が物質力を抽象的に所有しようと、そのことに変わりはない。それは、人間が自分を取り巻く環境と自らの歴史に対して有する主権とは正反対のものなのである。

現在の社会における自然の支配は、たえず深刻化する疎外として、また、この社会的疎外を正当化する唯一のイデオロギー的裏付けとして姿を表すため、いくつかの前衛グループから一方的に批判されているが、その批判の仕方は弁証法的な批判でも十分な歴史理解をともなった批判でもない。そうしたグループは今、労働運動についての墮落した欺瞞的な古い理解——それを彼らは乗り越えた——と、来るべき形態の世界規模での異議申し立て——それはまだ、われわれの

前にある——との中間点にいる（たとえば『社会主義か野蛮か』誌*1のカルダン*2らの非常に意義深い理論を参照せよ）。これらのグループは、人間の労働がますます完全に物象化され、その現代的帰結として、支配階級の操作する余暇を受動的に消費するようになったことに、まったく正当にも反対している。しかし彼らはそこから、多かれ少なかれ無意識に、古い形態の下での労働と、昔の社会や産業社会のより未発達な段階においてさえも開花しえた真に「人間的な」関係へのノスタルジーを函養するようになった。おまけに、それは、現代の産業を性格付けている浪費と非人間性とを同時に廃棄することで、既存の生産のより高い生産性を獲得しようとする意図とうまく調和する（それに関しては『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第6号、『武装としての教育』を参照）。だが、こうした発想は、まさに通常の意味での労働の廃止（プロレタリアートの廃止と同時に）と古い労働を正当化する一切のものの廃止にほかならない革命的プロジェクトの核心を放棄したものである。「ブルジョワジーは歴史のなかで際だって革命的な役割を果たした」という『共産主義者宣言』の文章*3は、新しいタイプの自由な活動のために労働を消し去るという可能性——それは、自然の支配によって開始された——を無視するならば、理解することはできない。そして同時に、この文章はまた、「古い観念の解体にブルジョワジーが果たす役割を無視するならば、つまり「革命イデオロギー」の用語で肯定的に自己を定義する古典的労働運動の不幸な性向に従うならば、同じく理解することはできない。

ヴァネーゲムは「当たり前の基礎事実」のなかで、聖なる思考が解体し、その鎮静的、催眠的、鎮痛的機能がより劣ったかたちでイデオロギーによって置き換えられる運動を示している。イデオロギーは、ペニシリンに起きたのと同じように、広範かつ大量に用いられるにつれて、その効力が次第に低下してゆき、たえず服用量を増したり外観を変えたりせねばならなくなった。このことは、ナチズムと今日の消費のプロパガンダの様々な点での行き過ぎを考えるだけで十分理解できる。封建社会の消滅以降、支配階級にとって、彼ら自身のイデオロギー——硬直化した批判的思考としての——は、かつて権力奪取のための万能の武器として役立ったという意味では、ますます役に立たなくなっており、今や、彼ら独自の支配に矛盾するまでになっていると考えられる。かつてイデオロギーのなかで無意識の虚偽であったもの（部分的結論の上に停止したものは、イデオロギーが覆い隠していた利害のいくつかが権力を得て、警察によって保護されるようになると、体系的な虚偽となった。その最も現代的な例は、同時に最も驚くべきものである。すなわち、まさにイデオロギーを労働運動のなかに流用することで、官僚主義がロシアでその権力を打ち立てたのである。イデオロギーの現代化の試みはすべて——ファシズムのように常軌を逸したのものから、先進資本主義におけるスペクタクル的消費のイデオロギーのように論理的に一貫したものまで——、現在を保存する方向に進むが、その現在それ自体は過去によって支配されているのである。イデオロギーの改良主義は、既成の社会と逆の方向に向かつては、決して効力を持ちえないだろう。なぜなら、この社会は強制的な栄養摂取手段のおかげでいまだにイデオロギーの有効な利用を行っているが、そうした改良主義は、その手段を決して手に入れることができないからである。革命的な思想は、イデオロギーを容赦なく批判する側にいなければならない。もちろん、そのイデオロギーのなかには「イデオロギーの死」という特殊なイデオロギー（イデオロギーとはこれまで常に死んだ思想のものだったのだから、この言い方自体がすでに

ひとつの告白となっている)や、自分が妬んでいるライバルの失墜だけを喜んでいる問題の経験論的イデオロギーも含まれる。

自然の支配のなかには「何をするための」という問いも含まれているが、実践に関するこの問いは必然的に自然の支配の問題を圧倒し、それなしで済ますわけにはいかなくなる。この問いはただ、「以前と同じように、ただし生産物はより豊富に」というこの上なく粗雑な答えを投げ返してくるだけである。この答えは、資本主義経済がその起源から含み持っていた物象化による支配であるが、その支配自体が「自ら自分の墓堀人を作り出す。」こともありうる。ブルジョワの巨大なプロジェクトである自然の変形の積極性と位階秩序(ヒエラルキー)化された権力——それは、現在のその様々な変異体において、ブルジョワ的「文明」という唯一のモデルに従っているのだが——によるそのけちくさい回収とのあいだの矛盾を明らかにする必要がある。ブルジョワ的モデルは、大衆化された形態をとることで、雑多な寄せ集めである小ブルジョワが利用できるように「社会化」されてきた。これらの小ブルジョワは、古い貧困階層の持っていた痴呆化の能力の全てと、支配階級への所属を示す富の印(それ自体が大衆化されているが)のすべてとを、ともに貯め込むことになるだろう。東側の官僚主義者は必然的にこのモデルに与する。階級闘争の消滅という彼ら自身が思い描く図式を維持するのに警察に頼らずにすませるためには、生産力を増大させるだけで十分なのである。現代の資本主義も同じような目的を高く掲げている。だが、どちらも同じ虎に跨っている。急速に変化する世界で、彼らはそれぞれニュアンスが異なるだけの位階制権力を永続させるのに役立つ現状維持を求めているにすぎないのである。

現在に対する批判のネットワークは、その擁護のネットワークとまったく同様に、首尾一貫している。ただ擁護の一貫性は、より眼につきにくいだけだ。というのも、それは、他のモデルとは逆に、支配的モデルの多くの細部やニュアンスについて嘘をついたり恣意的な価値付けをしなければならないからだ。だが、この擁護のあらゆる変異体を本当に捨て去るならば、難なく批判に与することができる。その批判は、現在を支配する勢力のいずれとも利害を共にしていないので、あの個人的な良心の呵責を感じることはない。位階秩序化された官僚主義が革命権力でありえるなどということを認める者、さらには、スペクタクルの社会が全世界で組織しているような大衆的ツーリズムは善であり楽しみであると認める者、そのような者はサルトルの中国*4へでも旅行するがいい。彼の間違いにも、彼の愚行にも、彼の嘘にも、驚く者はいないだろう。自分の好みのものの性向には従わねばならない。他にも、より唾棄すべき、より実際的な全を支払われている旅行者たちがいる。チョンベ*5に仕えるためにカタンガ州*6に行く考たちだ。左翼知識人の証人たちは、招待される場所にかくも速やかに赴くが、彼らが第1に証言しているものは、思考の放棄である。この思考は、何10年も前に自らの自由を捨て去ってしまい、相争っているパトロンたちの間を揺れ動いているのである。西のものであれ東のものであれ、現在実現されているものを称賛する思想家は、スペクタクルのすべての罨にはまっているのだから、かつて何一つ思考したことはなかったのである。この確認事項は、彼らの書いたものを読んだことのある者にとっては何ら驚くべきことではない。彼らが鏡のように映し出している社会は、われわれにその称賛者を称賛することを命じていることは明らかである。それどころか、多くの場所で、彼らは意のままに自分たちの鏡のゲームを選び取る(これを、彼らは「参加(アンガジェ)する」と

呼んできた) ことさえできる。言い換えれば、彼らを突き動かしている既成社会の包装紙とラベルを——後悔しつつあるいは後悔せず——選ぶとすることができるのである。

疎外された人間は、毎日——人に教えられ、見せられて——自分に必要でない新たな成功〔＝ヒット商品〕を次から次へと手に入れる。これは何も、物質的発展のこれらの一段一段がくだらないとか悪いとかいうわけではない。それらの一段一段の発展も実際の生活のなかに再投資されるかもしれないが、その際には必ず残りのすべても一緒についてくる。現在の勝利はすべて、スター専門家によるものである。ガガーリンは、空間においてより先で、いっそう不利な条件の下で、生き延びられることを示した。しかしまた、医学的、生化学的努力の全体によって、時間においてより先まで生き延びることが可能になったとしても、統計上でのこの生き延びの拡大はいかなる点でも生の質的向上と結び付くことはない。より先で、より長く生き延びることはできるだろうが、より多く生きることは決してできないのだ。われわれはこの勝利を祝う(フェテ)べきではない。そうではなく、祭り(フェト)に勝利を収めさせなければならない。その祭りにおいては、人間の進歩そのものが、日常のなかに無限の可能性を解き放つのである。

問題は自然を「価値ある敵対者」として再発見することである。自然に対して仕掛けられたゲームは心を浮き立たせるものでなければならず、そうしたゲームは心を浮き立たせるものでなければならず、そうしたゲームにおいて獲得された得点(ポイント)はわれわれに直接関係しなければならぬ。われわれの環境と時間に対する(一時的で、流動的な)支配とは、例えば、生の契機を構築することである。宇宙への人類の拡張は、個人の生の(ポスト=芸術的な)構築とは正反対の極の上での企ての一例である。だがそれは、可能性のもう一方の極とも依然として強く結び付いている。そこに見られるのは、専門家たちの軍事的競争の昨今の卑小さと、プロジェクトの客観的壮大さとの衝突である。宇宙への冒険は広がるだろう。それゆえ、モルモット専門家の参加とはまったく異なった形の参加に対しても開かれるだろう。それは、この惑星上で専門家のけちくさい支配が崩壊すれば、あらゆるものに関する途轍もない創造性の水門が開かれることになるだけに*いっそう早く*、いっそう遠くまで開かれることになるだろう。この創造性は今のところまだ硬直化していて得体の知れないものだが、産業生産の恣意的な部門に特有の現在の蓄積的成長にとってかわって、人間のすべての問題に対して幾何級数的な進歩を引き起こすことができるだろう。確かに今はや、生産力と生産関係との矛盾という古い図式は、いつかは停滞し、発展し続けることができなくなる資本主義的生産に対する、短期的な観点からの機械的断罪の対象として理解されるべきではない。逆に、この矛盾は、こうした生産を自己制御するものが、現在の経済的下部構造によって支えられうる可能な巨大発展に比べれば、卑小であると同時に危険でもある発展を自らに確保していることを断罪するもの(必要になるであろう武器によって、その処刑を試みることは今後に残されているが)として読みとるべきである。

現在の社会で公けに出されている問いにはすべて、既にある種の解答が含まれている。そのような強制された回答とは異なる場所に導くようなといは決して出されることがない。現代の伝統とはまさに革新することであるという明白な事実気づく時にも、この革新がいたるところでなされているわけではないという、もう1つの明白な事実には目を閉じる。イデオロギーがまだその役割を大きくすることができた時代に、サン=ジュスト*7は次のように語っていた、「革新の

時代に、新しくないものすべては有害である」と。現代のスペクタクルの社会を組織している多くの神の後継者たちは、どの程度まで問うと問いすぎることになるのか、今ではよく弁えている。哲学と芸術の衰退もまたこの禁止が原因である。現代の思想と芸術は、その革命的な部分においては、いまだ存在していない実践——それは、彼らが力を発揮できる最低限の領域となるだろう——を程度の差こそあれ明確に要求してきた。それ以外の者たちは、公式の問いの周りで上品なお喋りを弄しているか、純理論的な問題について空虚な問いを発しているにすぎない（『アルギュマン』誌*8の専門だ）。

父の家〔=天国〕、すなわち古い社会には、たくさんのイデオロギーの部屋がある。そこでは、確固とした参照基準は失われたが、その掟は無傷のままである（神が存在しないにも関わらず、何一つ許されない）。その市民権を持つものは、現代的なものを打倒するのに役立つあらゆるモダニズムである。『プラネット』*9という信じがたい雑誌のはったり屋の一味は、多くの学校教師を感動させているが、彼らは荒唐無稽な大衆扇動を体現している。それは、まもなく半世紀にもなろうとする異議申し立てと革命的想像力の、少なくとも知的な面での表出という点での完全な不在（そして、それらが今日、再び現れると、いたるところで出会う無数の敵対的实践による障害）を利用しているのである。そして同時に、『プラネット』誌は、科学とテクノロジーはますます速いスピードで進歩するが、どこに向かって進んでいるのかは誰も知らないというあの明白な事実に賭けながら、愚直な人々に対して、今後はすべてを変えなければならないと知らせるために駄弁を弄している。それと同時に、われわれの時代が現実には生きている生活の99パーセントを不変の与件として認めるのである。そのようにして、縁日の新奇さがひきおこす眩暈を利用して、どれほど辺鄙な田舎にもひどい状態でしか保存されていなかった時代遅れのがらくたを平然と再び紹介するのである。イデオロギーの粗悪品は、その努力にも関わらずポーヴェルでさえ考えつかなかったような下劣さの極みにおいて、その歴史の幕を閉じるだろう。

専門化した指導者たちが、増大する生産と消費の全側面をいっそう強力に計画化せねばならなくなるにつれて、過去の堅固な神話体系に比べるとまだ流動的なイデオロギーの現在のさまざまな変種は、ますますその役割を大きくする。使用価値はそれでもなお不可欠のものであったが、市場ために生産する経済が優勢になって以来、単に暗黙のものになりつつある。その使用価値も、今や、現代の市場の計画家たちによって公然と操作され（人工的に作られ）ている。ジャック・エリユル*10はその著書『プロパガンダ』（A・コラン書店、1962年）のなかで操作のさまざまな形態の同質性を指摘しているが、その最大の功績は次のことを明らかにした点にある。つまり、ごのプロパガンダ広告は禁ずることのできる単なる病的な異常増殖ではなく、同時に、全面的に病に侵された社会に対する薬、病気を悪化させることによってその病気に耐えることを可能にする薬なのである。人々はかなりの程度まで、このプロパガンダの共犯者、支配的なスペクタクルの共犯者である。なぜなら、彼らは社会に対して全面的に異議を申し立てることによってしか、そうしたプロパガンダを拒否することはできないからだ。それゆえ、今日の思想にとって唯一の重要な作業は、異議申し立ての運動の理論的力と物質的力をいかにして再び組織するかという問題をめぐってなされなければならない。

二者択一は、真の生と、現代化された鎖しか失うべきもののない生き延び〔=余りの survie〕

とのあいだでの選択のなかにだけあるのではない。それはまた、生き延びそのものの側にも設けられている。そこにあるさまざまな問題はたえず深刻化してゆくにもかかわらず、生き延びることに関心のない支配者たちに、問題を解決することはできないだろう。核武装、地球の人口過剰、人類の大多数にとっての物質的貧困の増大、そうしたものの危険性は新聞までもが取り上げる公認の不安の種である。なかでも特にありふれた例は、中国に関するルポルタージュ

（『ル・モンド』紙、1962年9月）のなかでロベール・ギラン*11が皮肉ぬきで書いている人口過剰の問題である。彼はこう書いている、「中国の指導者はそれを再認識し、それに挑もうと欲しているようである。1956年に試みられたが1958年に断念された産児制限の政策は、再び実施される模様である。若年での結婚に反対し、新婚家庭での出産の間隔を開けることに賛成する全国的キャンペーンが開始された」。専門家たちは意見を変えるたびに、すぐに絶対的命令を下すが、そのことは、彼らが人民の解放に実際にはどのような関心を抱いているかを完全に暴露している。それはちょうど、16世紀の君主たちの良心の動揺と改宗（タジュス・レギオ・エジュス・レリギオ＝君主ノ宗教ヲ言エ、ソノ国ノ宗教ヲ言エ）が、キリスト教の神話の武器庫に対して彼らの抱いていた関心がどのような性格のものだったかを暴露しえたのと同様である。この同じジャーナリストは、何行か先でこう続けている、「ソ連が中国を支援しないのは、ソ連の流動資産は現在、驚くほど金のかかる宇宙征服に向けられているからだ」と。中国の農民が子供を生むかどうかを決めるのに何も言えないのと同様、ロシアの労働者は、彼らの労働が産み出した剰余利益であるその「流動資産」の用途を決定するのに、つまり中国よりもむしろ月にそれを充てることを決定するのに、何の発言もできなかったのである。完全に自分が引き受けるにいたった現実の生活と格闘する現代の指導者の英雄的行為は、ユビュ*12の作品群のなかにその最良の表現を見いだせる。実験的なわれわれの時代がまだ実験していない唯一の原材料、それは精神と行動様式の内面である。

イデオロギーや、スペクタクルや、計画化や、計画化を正当化するものが並ぶ広大なドラッグストアにおいて、専門化した知識人は自分の仕事（ジョブ）と、自分が管理すべき棚を持っている（ここで言う知識人とは、文化の生産そのものに一役買っている者たちのことで、ますます増大する「知的労働者」の群れと混同してはならない。後者の労働条件と生活条件は、現代の産業の原則に従って変化している労働者と給与生活者の労働にますます似たものになってきている）

そこには、あらゆる好みに対して、何かしらのものがある。例えば、ロベルト・グイドウッチ*13は、現に存在する遅れは「今日でもなお、死に絶えた制度の廃墟の中で生きる愚かさ」と、まだ実現の非常に困難なさまざまな提案だけを表現する能力との間に、われわれを置き去りにしている」と書くことによって（『アルギュマン』誌 第25-26号所収の「新しい政治の困難な探究」）、自分に理解があることをまず示す。彼はいったい何を提案しようというのか。すぐにわかることだが、これは実に簡単に実現できるのである。ヘーゲルとエンゲルスからジダーノフとスターリンまでを1つの文章の中にうまく取り込んだ後で、彼がわれわれに提案するのは、「青年マルクスのロマン主義的性急さや、グラムシ*14のもって回った注釈を再検討しようとする傾向もまた同様に時間の腐食を受けている」ということを認めることなのである。この男は、だ

から、そのようなものからはすっかり立ち直った様子で、自分にヘーゲルやグラムシを読む力が実際にあったなら、それぐらいすぐに解っただろうとは、一瞬たりとも思い至らない。われわれは、彼の過去と彼の論文から、そのことは難なく読みとることができた。彼が青春時代をジダーノフ*15とトリアッティ*16に対する尊敬のなかで過ごしたことは間違いない。ある日、『アルギュマン』誌の他の操り人形ども——その元の共産党がどうであれ——と同じように、彼もすべてを問い直したのだ。だが、誰もが手を汚したとは言えないとしても、精神は汚したのである。彼もまた、青年マルクスを「再検討する」ために数週間を費やしたはずだ。しかし、結局のところ、もし彼が、われわれの生きている時代を理解できるように、マルクスを理解することができたなら、その彼がすぐにジダーノフを理解しなかったと考えられるだろうか。要するに、大昔に彼や他の連中が革命的思想を再検討した時からずっと、その契機は彼には既に「時間の腐食を受けている」ように見えたのだ。しかし、10年前に、彼は何かを再検討したのだろうか。そんなことはありそうもない。それゆえ、この男は歴史よりも速く再検討を行う男だと言うことができる。なぜなら、彼は1度たりとも歴史とともにいることがないからだ。彼の模範的な無能さは、誰からもまったく再検討される必要はないだろう。

それと同時に、一部のインテリゲンチヤは新たな異議申し立てに着手し、われわれの時代の現実的批判について思考し始め、その結果としてさまざまな行動を採り始めた。彼らの工場であるスペクタクルのなかで、彼らは生産のテンポと生産の究極目的そのものと闘っている。彼らは自分たち自身の批判装置と破壊活動（サボタージュ）の実行者を作り上げてきた。

彼らは、現在の労働が獲得しうる富を拒否することを何にもまして表明している（消費の資本主義の）新たなルンペンと手を結ぶ。そのようにして、創造的なインテリゲンチヤが置かれている個人の競争という条件、それゆえ奴隷根性という条件を拒否し始めているのだ。というのも、現代芸術の運動は、創造者がたえず知的労働力の資格を引き下げる運動と考えられるからだ（それも、すべての労働者が、指導階級の位階秩序化戦略を受け入れる限りにおいて、部門（カテゴリー）ごとに競争に突入する時に）。

革命的インテリゲンチヤが今から成し遂げようとしている任務は巨大である。というのも、彼らは、幕を閉じようとしている長い時代——そこでは「弁証法的理性の眠りが怪物たちを産み出すだろう」——から、いかなる妥協もなしに訣別するのだから。理解しなければならない新しい世界とは、使い途もなく増加してゆく物質的力の世界であると同時に、人々が展望もなく経験する異議申し立ての自発的な行動の世界である。かつてのユートピア主義においては、独断で汚された理論が、いかなる可能な実践よりも先に進んでいた（とはいえ成果がなかったわけではない）が、それとは逆に、現代性についての問題全体のなかに今、存在するのは、自分たちの理論を探し求めている無数の新しい実践である。

誰かが夢想するような「知識人の党」は存在しえないであろう。というのは、そのような同業組合主義のなかで認められうる知性とは、まさにグイドウッチ氏やモラン*17氏やナドー*18氏の合法的な思考にすぎないからだ。そんなものは要らない。分離され、専門化した団体として認可され——たとえ左翼に投票しようと、関係ない——、結局は自分自身に満足し、あるいは自分の凡庸な文学的不満足にすら満足しているインテリゲンチヤは、逆に、最も自発的に反シチュア

シオニスト的な社会部門である。この知識人階層は、プレミアムショーの観客のようなもので、しばらくしてから先進国のすべての労働者に少しずつ提供されることになる消費を、代表して先に味わっているにすぎない。われわれは彼らが自らの価値や趣味（現代的と言われる家具や、クノー*19の著作）に吐き気を催すようにしむけなければならない。彼らの恥が、革命的感情となるだろう。

インテリゲンチヤのなかに、服従に向かう派と、差し出された仕事の拒否に向かう派とを区別しなければならない。そして、あらゆる手段を用いて、この2つの分派のあいだに剣を投げ入れ、彼らを完全に対立させ、来るべき社会戦争への道をはっきりと照らし出さねばならない。出世主義者たちは、階級社会でのあらゆる知的サービスの条件を本来的に表現しているが、ハロルド・ローゼンバーグ*20が『新しいものの伝統』のなかで指摘しているように、彼らは、自分に心地よい疎外が作られたので、知識人層全体が何の反対行動も行わずにただ自らの疎外を論じるようにしむけるのである。しかしながら、現代の社会全体がこの安楽の道へと向かい、それと同じ運動によって、この安楽がいつそう退屈と不安に汚染される一方で、破壊活動（サボタージュ）の実践が知性のなかに広まることもありうる。かくして、19世紀の前半に哲学から（哲学についての批判的考察から、哲学の危機と哲学の死から）生まれた革命理論が、今や、現代芸術から、詩から、その乗り越えから、現代芸術が探究し約束してきたものから、言い換えれば、日常的な行動の価値と規則のなかに現代芸術が築くことのできた言わば明確な立場から、再び出現してきたのである。

知的で芸術的な創造の生きた価値は、服従したインテリゲンチヤの生存様式全体によって可能な限り否定されている。同時に、彼らは、この「価値」の創造との内縁関係を誇示して、自分たちの社会的立場を飾りたてようと思っている。御用インテリゲンチヤは、この矛盾をかぎつけ、芸術的ボヘミアンと呼ばれたものを曖昧に誉め称えることによって遅れを取り戻そうと試みる。ボヘミアンとは、物象化の下僕たちによって、他のいたる所で拒否されている日常生活の質的使用の契機として、極貧のなかでの豊かさ等々の契機として認識されているのである。だが、おとぎ話には、その公認版では、道徳的な結末が付き物である。つまり、貧困における純粋な質としてのこの契機は変質して、ありふれた「豊かさ」に至らなければならないのである。貧しい芸術家は、この間にも市場から評価されない傑作を産み出すだろう。しかし彼らは救われる（質との彼らの戯れは許され、教訓的なものとすらなる）。なぜなら、今この瞬間に彼らの現実の活動の副産物にすぎなかった彼らの労働が、次には高い価値を付けられるからである。物象化に背を向ける生きた人間〔＝芸術家〕も、やはり、彼らなりの商品を生産してしまうのである。それゆえ、選別されて、ブルジョワジーの量の楽園に入る価値を讃えることで、ブルジョワジーは、ボヘミアンに対して、彼らの自然淘汰（ダーウィニズム）を遂行してきたのである。創造段階の生産物と採算の取れる商品段階の生産物を手に入れた人間が稀に同じ人間であるとしても、それはまったく偶然のことなのだということを忘れてはならない。

文化的イデオロギーがますます急速に墮落した結果として、あの知的、芸術的価値観の恒常的な危機が始まった。この危機の勃発を白日のもとに曝したのはダダイスムである。この文化の終焉は、明々白々な二重の動きによって特徴付けられている。一方には、スペクタクルの自律的な

メカニズムによって、偽の新しい事物が新たな外観のもとに自動的に再び世に出て広まる現象がある。他方には、「高品質の」文化的生産の革新の才に明らかに恵まれた者たちによって、大衆的な拒否と破壊活動（サボタージュ）が行われている。アルチュール・クラヴァン*21はそうした人間の原型のような人物である。彼については、文化的大惨事の最も激しい放射能が残留している地帯を通り抜けたことが知られているが、彼自身はいかなる種類の商品も思い出も残さなかった。人を落胆させるこの2つの作用が結びついたことは、インテリゲンチヤのなかに不安を高じさせてやまないのである。

ダダイズム以来、そしてまた、支配的文化がある種のダダイズム芸術を回収しえたとはいえ、芸術的反抗がつねに次の世代によって消費可能な作品のかたちで回収可能であることは、もはやまったく当然のこととは言えなくなった。そして今日では、ポストダダイズ的なスタイルを模倣する者たちが、スペクタクルのなかでのこの上なく安易な出世主義によって、売ることのできるものならどんな文化的事物でも生産できるようになった。しかしその一方で、さまざまな現代資本主義国に、非芸術家的なボヘミアンの拠点も存在している。そうしたボヘミアンたちは芸術の終焉あるいは不在という考えの上に結集したのであり、もはや何らかの芸術生産を目的としているのではないことは明らかだ。われわれの見出す「未来の芸術」（このように表現すること自体がすでに、現在の専門化した枠組みのなかで未来を勝手に扱っている印象を与えるので、不適切な表現であるが）は空間と感情と時間の利用法を全面的に変革することに完全にかかっているのだから、未来の芸術は商品として価値付けられることはないだろう。このテーゼの進展につれて、現代資本主義諸国では、不満足は激化するばかりである。そして、こうした扶況のなかでようやく姿を現し始めた自由な思考と自由な行動様式の実験の実験のすべては、確実にわれわれと同じ方向に、つまり異議申し立ての理論的組織化へと向かって進んでいる。

われわれの考えるところでは、理論家の役割は不可欠ではあるが支配的ではない。その役割とは、人々——それは、名前を付与した上で詳述せねばならない、あの「新しい貧困」に曝された新しいプロレタリアートだと言おう——が経験しているような危機と潜在的欲望とを、明確な言葉で、あるいは、より明確で首尾一貫した言葉で、表現するための認識要素〔概念と判断〕と概念装置をもたらすことである。

現代においてわれわれが立ち合っているのは、階級闘争のカードの再配分であり、階級闘争の消滅でもなければ、古い図式のなかでの階級闘争の正確な継続でもない。それは確かである。同時にまた、われわれが目にはしているのは、国家の乗り越えではなく、超一国家装置のなかでのナショナリズムのニューディール〔=新規まき直し〕である。つまり、2つの世界ブロックのなかには、ヨーロッパや中国勢力圏のように多少とも遠心的な〔=米・ソの勢力圏から離れてゆく〕超一国家的地帯があるのである。そのように枠づけられた国家領域の内部には、朝鮮半島からワロン地方〔ベルギー南部のフランス語使用地域〕にいたるまで、さまざまなレベルでの変更と再統合起こりうる。

現在、現れつつある現実を見る限り、プロレタリアートとは、（社会が許容する豊かさと消費の促進のさまざまなかみで）社会から消費するよう割り当てられた社会的時空間を変更する可能性をまったく持たない人々であると思えることができるだろう。指導者とは、この時空間を組

織する者か、個人的選択の余地を持つ者（それは、例えば、私有財産の古くからの形態の多量の名残によることすらある）である。革命運動とは、この時空間の組織化と、その後の恒常的な再組織化を決定するやり方そのものを、根底から変革する運動である（単に、所有権の法的形式や指導者の社会的出自だけを変えるような運動ではない）。

今日すでに、いたるところで、膨大な数の多数派が、ごくわずかな少数派の「生産する」おぞましく絶望的な社会的時空間を消費している（明確にすべきことだが、この少数派が文字どおりその組織化以外の何も生産していないのに対して、われわれがここで理解する意味での時空間の「消費」には、消費と生活全体の疎外が明らかに根ざしている現行の生産全体が含まれている）。過去の支配階級が、社会総体の欠乏状態の上で、静的な社会生産から奪い取ったごくわずかな剰余価値から人間的な出費をひねり出すことができたのに対して、今日この指導的少数派に属する者たちは自らその「支配権」を失ったと言うことができる。彼らは単に権力の消費者にすぎないが、その権力は生き延び〔＝余りの生〕のくだらない組織化の権力なのである。そして、この権力を消費する目的だけのために、彼らはあんなにも悲惨なやり方でこの生き延び〔＝余りの生〕を組織するのである。自然の所有者たる指導者階級は、自らの権力の行使の卑小さのなかで解消してしまう（量的なスキュンダルだ）。解消することなく支配することができれば、完全な雇用が保証されるのだが。もちろん、すべての労働者の完全雇用ではなく、社会の全勢力の完全雇用であり、そのとき、各人の創造的可能性のすべてが、自分自身のために、そして対話のために完全に利用されるだろう。そうした支配を行使する者〔＝主人〕は、それでは、どこにいるのか。この馬鹿げた体制の逆の端にてある。拒否の極にである。支配を行う者は否定的なものからやって来るが、彼らは反一位階秩序の原則の使者である。

時空間を組織する者（ならびに、彼らに直接仕えている手先ども）と、その組織化を受けている者とのあいだにここで行った区別は、巧みに織り上げられた役割と給料の複雑な位階秩序をきっぱりと両極化するためのものである。この位階秩序は、どの段階も不分明の間に移行し、高度に柔軟化した社会構成のグラフの両端にはもはや真のプロレタリアートも真の所有階級もほとんどいないように思わせる。しかし、先の区分を行えば、社会的地位についての他の差異は、たちまち二次的なものと見なされるはずである。逆に、知識人も「職業的革命家」の労働者も、いつでも統合のなかに永久に落ち込む危険がある。つまり、指導者階級の操り人形（ゾンビ）の陣営（それはまったく調和的でも一神教的でもない）のなかの何らかの一族の何らかの地位に統合される危険がある。真の生かすべての者にとって存在するようになるまでは、「地の塩」はいつでも衰弱する可能性がある。新しい異議申し立ての理論家は、権力と通じたり、自らが分離した権力となったりしたときには、ただちに理論家でなくなるだろう（その時には、別の者が理論を代行する）。それはつまり、革命的インテリゲンチヤは、そのプロジェクトを実現した暁には、自らを抹殺するということである。「知識人の党」は、自らを乗り越える党としてしか実際には存在できず、その勝利は同時に敗北なのである。

*1: 『社会主義か野蛮か』誌 コルネリウス・カストリアディス（1922-97年）がトロツキズム運動（第4インター・フランス支部）と袂を分かった後に、クロード・ルフォールらとともに結成したグループ（1949-65年）。現代資本主義の発展のなかでの労働の質の変質、管理体制の強化などによって産み出された新しい疎外状況を、自治を基本とした労働者評議会組織によって乗り越えようとした。ここに触れられているような『社会主義か野蛮か』の見解は、例えば、カストリアディスが同誌31, 32, 33号（1960年12月）、61年4月、61年12月に発表した「現代資本主義下の革命運動」（『社会主義か野蛮か』江口幹訳、法政大学出版社、271-397ページ）に顕著である。

*2: カルダン 〈社会主義か野蛮か〉の指導者 コルネリウス・カストリアディス（1922-97年）の偽名の1つ。正式にはポール・カルダン。1959年以降使用。他にも、デルヴォー、ピエール・ショリユー（1946年以降）、ジャン＝マルク・クードレなどの偽名がある。

*3: 「共産主義者宣言」の文章 マルクスとエンゲルスの1848年のこの『宣言』の中の、第1章「ブルジョワとプロレタリア」に現れる有名な文章。邦訳、大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、42ページ。

*4: サルトルの中国 サルトルは1955年9月に中国政府の招きでポーヴォワールとともに中国を訪問し、約2ヶ月間、各地を回った。フランスへの帰国後『フランス＝オブセヴァトゥール』誌（55年12月1-8日号）に寄せた文章「私の見た中国」や『ザ・ニュー・ステイツマン・アンド・ネイション』誌（12月3日号）のインタビューで、サルトルは、中国革命がソヴィエト革命とは異なり軍事的勝利のうちに形成されたことが、中国における恐怖政治の不在の原因となっていること（前誌）、また革命中国における大衆の自発性、自治を高く評価する発言を行い、中国革命の神話を作り上げるのに寄与した。

*5: モイーズ・カペンダ・チョンベ（1919-69年） コンゴの政治家。1961年7月のコンゴ独立直後の動乱の過程で、ベルギー植民地資本とベルギー軍に後押しされてカタンガ州の分離独立を宣言するが、国連軍に敗れて62年末にスペインに亡命。その後、64年に帰国して65年10月までコンゴ首相となるものの、モブツ将軍に追放されて再度亡命。67年、政府転覆を謀ったかどで死刑宣告を受け、アルジェリア政府に逮捕され、コンゴ政府に引き渡される直前に獄死。

*6: カタンガ州 現シャバ州。コンゴ川上流域の高原地帯を占め、銅鉱石、ウランなどの鉱物資源が豊富。ベルギー領時代はカタンガ・ユニオン・ミニエールがこれらの鉱山を独占所有。チョンベはこの独占企業体に後援されたカタンガ協会連盟（CONAKAT）の総裁で60年5月の州議会選挙で、CONAKAT派の勝利を勝ち取り、州政府首相に就任した。

*7: サン＝ジュスト（1767-94年） フランス革命の急進的指導者。92年国民公会議員に当選して国王の処刑を主張。それを実行することで山岳党の幹部となる。93年、最年少の公安委員、94年、国民公会議長となり、ロベスピエールの片腕としてジロンド党、ダントン派の弾圧に活躍し、「恐怖政治の大天使」と呼ばれたが、94年のテルミドールの反動によって処刑。その雄弁とレトリックの巧みさでもって知られ、「幸福とはヨーロッパの新しい観念である」などのスローガンは革命時に広く流布した。

*8: 『アルギュマン』誌 エドガール・モランを編集長とし、コスタス・アクセロス、ジャン・デュヴィニョーとの共同編集で、1956年から1962年まで刊行された季刊雑誌（全28号）。第1巻 113頁の訳注を参照。マルクス主義者やアナキスト、トロツキストから哲学者・文学研究者、社会学者までの幅広い執筆者を集め、50年代後半のフランスの反共産党系左翼知識人の結集軸となった。

*9: 『プラネット』 フランスの作家・ジャーナリストのルイ・ポーヴェル（1920-）がジャック・ベルジェとともに1961年に創刊した隔月刊の雑誌。66年まで全41号が刊行された。オカルトやSFなどの大衆文化から政治・芸

術まで、雑多な主題を扱う総合雑誌だが、その基調は右翼的保守主義だった。

*10: ジャック・エリュル (1912-1949) フランスの法学者・哲学者・キリスト者。レジスタンスに参加した後、ボルドー大学で教鞭を執りながら、雑誌『エスプリ』などに執筆する一方、世界教会会議やフランス改革派教会などの運動に協力。著書に、『技術あるいは世紀の賭け金』(54年)、『制度史(全5巻)』(55年)、『政治的幻想』(65年)など。

*11: ロベール・ギラン (1908-) フランスのジャーナリスト。『ル・モンド』紙の極東総局長。37年に上海特派員として中国勤務の後、38-46年に日本滞在。49年、革命前後の中国共産党取材した後、58-62年、69-76年に滞日。著書に『6億の蟻——私の中国旅行記』、『第3の大国・日本』など。

*12: ユビュ フランスの詩人アルフレッド・ジャリ (1873-1907) が、1896年に発表・初演した戯曲作品『ユビュ王』の主人公のこと。ユビュは、冒頭の「糞ったれ!」という言葉に始まり、卑語と造語の連発によって言語の暴力的実験性を体現する存在であると同時に、マクベス的な暴君としてアナーキーな笑いを呼び覚ます暴力的存在として舞台の上に登場し、以後、不条理で滑稽な暴力的独裁者の代名詞となった。

*13: ロベルト・グイドウッチ 『アルギュマン』誌の初期のイタリア版編集委員として活動し、同誌に「グラムシと新体制」(第4号)、「新しい政治の困難な探究」(第25-26号)を執筆したこと以外は不詳。

*14: アントニオ・グラムシ (1891-1937年) イタリアのマルクス主義思想家・共産党の指導者。20年代に工場評議会運動を展開し、21年にイタリア共産党の結成に参加、極左路線を克服して党の指導権を掌握するが、26年、ファシスト政権に逮捕され、37年に獄死。第二次大戦後、その『獄中ノート』が発表された。

*15: アンドレイ・ジダーノフ (1896-1948年) ソ連の政治理論家。正統派スターリン主義の擁護者として活動。『文学、哲学、音楽について』(1947年)により芸術領域でのイデオロギー批判を行い、社会主義リアリズムに理論的根拠を与えたことで有名。

*16: パルミロ・トリアッティ (1893-1964年) イタリアの政治家。1921年のイタリア共産党の創始者の1人で、ファシスト政権下にはソ連に亡命、コミンテルン執行委員となる。44年、イタリアでのレジスタンス開始とともに帰国し、党書記長に就任、47年まで閣僚となる。56年には反スターリニズムの立場をとり、その年のイタリア共産党第8大会で「社会主義へのイタリアの道について」を報告し、後のユーロ Kommunismus に道を開く革命路線を提唱した。

*17: エドガール・モラン (1921-) フランスの社会学者。レジスタンスの時代にトゥールーズの「亡命学生収容センター」で活動し、共産党に入党。戦後、強制収容所の存在を知ったことを契機にスターリン主義を告発し、51年、フランス共産党を除名。50年から社会学者として国立科学研究センターで教える。1956年から62年にかけては、雑誌『アルギュマン』誌の編集長を勤める。著書に、『映画——あるいは想像上の人間』(56年)、『スター』(57年)、『自己批判』(59年)、『政治的人間』(65年)など。

*18: モーリス・ナドー (1911-) フランスの批評家。1930年代にトロツキストの活動家としてピエール・ナヴィルとともに活動し、ナヴィルを介してシュルレアリストと知り合う。1945年に刊行した『シュルレアリスムの歴史』は、シュルレアリスト自身からシュルレアリスムを過去の歴史にしたとして非難される。戦後は、『レ・タン・モデルヌ』誌や『コンバ』誌で文芸批評を担当した後、53年以降『レ・レットル・ヌーヴェル』誌の主幹として編集・批評活動を行う一方で、反共産党左翼知識人として発言し、60年のアルジェリア戦争への不服従宣言ある「121人宣言」にも起草者の1人として名を連ねた。現在は、書評誌『ラ・キャンゼーヌ・リテレル』の主幹である。

*19 : レーモン・クノー（1903－76年）フランスの小説家・詩人。1924年から29年、シュルレアリスムに参加、33年に小説『はまむぎ』、37年に詩集『樫の木と犬』を発表、独特の言語遊戯の文体で注目される。戦後は、50年代に「潜在文学工房（ウリポ）」の設立に参加、言語実験をさらに推し進めた作品を発表。他の小説に『地下鉄のザジ』（59年）、『イカルスの飛行』（68年）など。

*20 : ハロルド・ローゼンバーグ（1906－78年） 米国の美術批評家。30年代に『アート・フロント』誌、『パーチザン・レビュー』誌で共産主義の革命芸術を擁護していたが、やがてシュルレアリスムに関心を持ち、戦後、マザーウェルとケージとともに『ポシビリティーズ』誌を創刊、50年代に「アクション・ペインティング」を実存主義的に批評し、抽象表現主義の理論的支柱となる。この時期に『アート・ニュース』誌や『ニューヨーカー』誌に書いた美術・文学批評が『新しいものの伝統』（59年）にまとめられ、美術界で注目を集めた。他の著作に『不安なオブジェ』（64年）、『芸術作品とパッケージ』（69年、邦題『荒野は壺にのみこまれた——大衆状況のなかの美術』）、『現在の発見』（73年）など。

*21 : アルチュール・クラヴァン（本名ファビアン・ロイド 1887－1920年） 詩人にしてボクサー。スイスのローザンヌで生まれたがフランスに来て、詩を書きながら、ボクシングの世界タイトルマッチに出場。1912年から15年、パリで個人雑誌『マントナン』を発行し、手押し車に乗せて売り歩く、その第4号にサロン・デ・ザンデパンダンの揶揄とユーモアに満ちた展覧会評を載せたことから、ブルトンは『黒いユーモア選集』にクラヴァンを取り上げた。1920年、メキシコ湾を夜中に小舟で乗り出してそのまま行方不明になった。

訳者解題

『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第2号の論説「不在とその飾り立て役」、第6号の論説「ふたたび、解体について」に続き、この論説もまた、前衛芸術と呼ばれる文化領域を支配する「解体」派をいっそう手厳しく批判するものである。現代社会の気分としての「不在」を最も「前衛」的に表現する者としてリュシアン・ゴルドマンが讃えるヌーヴォー・ロマンの作家たち、読者や観客の参加によって成り立つマルク・サポルタのトランプ小説やシュトックハウゼンらの実験音楽、あるいは「視覚芸術探究グループ」の実験的なスペクタクル作品、都市の環境を改善する「空想的な建築」の例として『今日の建築』誌が掲げる統一的都市計画の紛い物、行為としての芸術として観客を巻き込んで行われる「ハプニング」芸術……60年代の新しい前衛芸術としてマスコミを賑わすこれらの試みを、シチュアシオニストは2つの点から批判する。まず、これらの「前衛」の作品は、少しも新しいものではなく、すでに過去にダダイストやシュルレアリストが「芸術の真の自己破壊をめざして」試みた探求の模倣である。それらは、ダダイストらが戦前に行っていたさまざまな芸術形式の破壊の実験から、コンテクストを無視してその技術のみを切り放して移植したものにすぎず、過去の実践に含まれていた社会と歴史に対する批判を巧妙に消し去ったものにほかならない。「小説社会学」を提唱し、「価値」の「不在」という言説スタイルを採用したヌーヴォー・ロマンの「大作家」たちのなかに、現代消費社会における「人間」に対する「モノ」の優位という情況への告発を見出すゴルドマンは、そうした作家たちの作品が、実際には、あらゆる芸術形式の「拒否」というかたちで「現代社会の物象化」を誰よりも鋭く告発していたダダイストたちの試みの焼き直しであるところか、そうした試みを「文学」に回収するものですらあることには気がつかないのである。シチュアシオニストが「解体」派の芸術を批判する第2の点は、より切実なものである。すなわち、シチュアシオニストが次第に世間の注目を集めつつあるこの時期に、シチュアシオニストのものとは見紛うばかりの「作品」が現れはしめたことである。「受動的な観客という伝統的な状況を転覆する」、「スペクタクルという観念を回避」するなどというシチュアシオニスト的用語法を用いて自分たちの総合的視覚芸術への観客の「実際の参加」を語る「視覚芸術探究グループ」のル・パルクなどは、明らかにシチュアシオニストの発想を巧みに盗み取っている。しかし、こうした「視覚芸術探究グループ」のスペクタクル作品や、『今日の建築』誌で紹介された統一的都市計画の紛い物、あるいはハプニング芸術などの作品は、いかにその外見がシチュアシオニストの試みと似ていようと、「自由で実験的な行動様式」が支配する社会の実現のための「生の瞬間」としての「状況の構築」というシチュアシオニストの本質的な目的と照らし合わせるならば、むしろそれと正反対のものである。ル・パルクの「作品」において「観客」は「操作」の対象である以上、その「作品」は「スペクタクルの社会」に人々を統合する役割しか持ちえない。元シチュアシオニスト（おそらくコンスタント）の統一的都市計画も『今日の建築』誌という建築の専門雑誌に紹介されることによって、他の多くの「空想の建築」とともに体制派のメガロマニアックな建築の夢

の1つとされてしまうだろう。そして、何も起きない日常生活のなかでの単に「何かが起きる」場としての「ハプニング」は、逆に、観客の日常生活の「貧困」を際立たせるだけであり、そうした日常生活を生み出している社会の変革にはまったく結びつかない。

偽装された自らの姿に立ち会うという、悪夢とも言えるこうした状況のなかで、シチュアシオニストは、しかし、自己の教義のなかに閉じこもり自らを秘教化することはない。逆に、彼らは、「生に対する還元不可能な不満と欲望を基盤とした「異議申し立ての力」の大衆的な解放に賭けるという選択を行う。現代社会における「不在」ではなく「否定」を復権し、生の「存在」を追求する「前衛」としての彼らのこの選択こそが、60年代の体制側のユートピアも諦念の「解体」派の芸術も転覆する大衆的な異議申し立ての反乱を生み出すことになるのである。

つい最近、文化の前衛（アヴァンギャルド）の専門批評家になったリュシアン・ゴルドマン*1が、『メディアシオン』誌 第4号で「不在の前衛（アヴァンギャルド）」について語っている。この「不在の前衛」とは、現代社会の物象化に対するある種の拒否を芸術や文章で表現するものだが、彼の意見によれば、ただそれだけを表現するものである。今世紀における前衛（アヴァンギャルド）文化のこのような否定の役割を、彼は、それが起きてから約45年後になってようやく認めるのだが、奇妙なことに彼がそれを行っているのは彼の同時代人や仲間に対してなのである。それゆえ、よみがえったダダイストの仮面の下に見出されるのは、ばかならぬ、イヨネスコ*2、ベケット*3、サロート*4、アダモフ*5、デュラス*6である。もちろん、『マリエンバート』のロブ＝グリエ*7も含まれている。そして、この楽しい小劇団は、みんな揃って、芸術形式の処刑という悲劇を茶番として再演する。サロートだなんて、いったい誰がそんなこと信じられるだろうか？ アダモフだなんて、誰が信じられようか？ ゴルドマンは、気のいい観客として、自分が目にするものを重々しい口調で解説する。「前衛の大作家の大部分は、実現された価値ないし実現可能な価値ではなく、とりわけ、その名のもとに社会を批判できるような、容認できる価値が不在であること、そのような価値を言い表したり、見つけたりすることが不可能であることを表現している。」これこそが、まさに間違いのもとだ。こんなことは、ゴルドマンの滑稽な作り話の役者を見捨てて、ドイツのダダイスムや、両大戦間のシュルレアリスムの歴史的事実を調べればすぐにわかることだ。ゴルドマンは、こうしたことを文字どおり知らないようだが、奇妙なことである。17世紀は複雑で、コタンの全集を通読するだけでも時間がかかるという理由から、パスカルもラシーヌも読んでいないという公言するような人が、彼の著書『隠れた神』*8の歴史的解釈に真っ向から異を唱えたとしたら、彼はその主張に根拠を認めるだろうか？ 少なくとも、オリジナルについておおよその知識をもっていながら、どうして、偽装されたものにこのような新鮮さを見出すことができるのか、まったく理解に苦しむ。使われている語彙自体が、テーマに不適當である。前衛の「大作家」というが、このような観念自体、前衛がずっと昔に決定的に滑稽なものとして捨て去った観念である。それより先でゴルドマンは、すでに息の根を止められた演劇的伝統の断片や切れ端を使ってプランション*9が感じよくまとめた趣味のよい娯楽

作品を引き合いに出し、そこに、なおいくばくかの前衛趣味は嗅ぎつけるのに、「歴史的生成とヒューマニズム的価値の存在を中心に据えた、同等に重要な文学作品」を認めることはできないと言う。しかしながら、ゴールドマン的前衛にまったく価値のない作品が大量に含まれていることが打ち消しがたいことを考えれば、プランションが有利な立場に立つことも事実である。それなのに、結局、ゴールドマンは文学作品を話題にするのである。文学の拒否、エクリチュールの破壊自体が、ヨーロッパにおける前衛の探求の20年ないしは30年間の最初の傾向であったことを知らないなどということがありえようか？ 彼の話に出てくる華々しい（スペクターキュール）道化師たちは、このことをオペラグラスの逆の側からしか見なかったのであり、年金生活者のいじましきで、それを利用しているのである。芸術の真の自己破壊をめざしたあの前衛は、まったく別の生の不在とその存在の可能性を不可分の形で表現していた。だからと言って、アダモフの後を追って、あの不在——それがあまりにもよく似合うので、彼は今やそれを独占しようとしている——のなかに陥りたくないと思えば、ヒューマニズムの欺瞞のなかに陥らなければならないのだろうか？

ゴールドマンよりも真面目になろうではないか。彼は、この記事のなかで、現在の社会、つまり、周知のように、残念ながら日々強化され、発展している現代資本主義のなかに、その乗り越えを引き起こすに足るだけの十分に力強い要素であるとする新しい社会勢力、あるいは少なくともその乗り越えをめざしている社会勢力」が存在しているのかと自問している。実際、この問いは非常に重要である。われわれは、その答えがイエスであるという証明を試みよう。現実の芸術的前衛運動や政治的前衛運動のまさに虚像を暴露する研究は、いずれにせよ、評価できる要素をもたらすことができる。そうした要素は、イヨネスコの作品のなかにも、ガロディ*10の作品のなかにも、あまり見られないものである。スペクタクルの社会の社会的外観〔le visible〕は、かつてないほど社会的現実から乖離してしまった。この社会における前衛芸術や、その問題提起的な思考すら、今や、この外観をライトアップすることで粉飾されてしまっている。ゴールドマンをかくも驚嘆させるこの現在の〈音と光のショー〉*11の外部に身を置いているものは、今のシチュアショニストのように、まさに存在の前衛に位置している。ゴールドマンが不在の前衛と呼ぶものは、まさに前衛の不在にほかならない。こうした騒ぎや自惚れは、現実の問題提起と現代の歴史において、何もあとに残さないであろうと、われわれははっきりと断言しよう。この点についても他の点についても、われわれが間違っているかどうかは100年後にはっきりするだろう。

そもそも、ゴールドマン主義的な前衛とその不在主義は、すでに時代遅れである（ロブ＝グリエは別だ。彼は、前衛主義的スペクタクルのルーレットのすべての数字の上に賭けている）。最新の傾向は、自らを統合すること、いくつかの芸術を互いに統合すること、いかなる犠牲を払っても観客（スペクタトゥール）を統合することである。まず、今や、どのジャーナリズムでも必ず言及される『マリエンバート』以来、「各人がさまざまに異なる感じ方をするように作られているので、観客の個人的な参加によってしか」（1962年11月28日付け『ル・モンド』紙のジャック・シクリエ*12による、テレビ放映されたつまらぬバレエについての記事）存在しえないような作品は枚挙にいとまがない。マルク・サポルタ*13は、トランプ小説を発表したが、これは読み始める前に札を切らなければならない。そうやって参加するのだ。次に、統合する作

品がある。たとえば、陶磁器に実験音楽を統合し、観客が聞けるようにする（スタルゼウスキー*14のパリでの展覧会）。あるいは、演奏家の意のままに楽譜〔の順序〕を「変更できる」ようになったシュトックハウゼン*15の音楽を、キルヒゲッセルというドイツ人の抽象映画に統合する（ダルムシュタット〔ドイツ中部サクセン州内部の都市〕現代音楽院で）。さらに、視聴覚環境のなかでの、ニコラ・シェフェール*16とフィリップス社*17の統合（『壁 - 創造』）もある。最後に、ヨーロッパのいたるところのビエンナーレ展で互いに統合される無数の統合があり、それらは統合の最高峰となっている。雑誌『メディアシオン』のなかには、新しい職業の統合も見られることも指摘しなければならない。絵画のカタログのなかでは、ここ15年来日常茶飯事になっていた抽象作品の「抽象的な」散文による批評——ミシェル・タピエ*18は傑作をものした——が、文学においては、ジャン・リカルドゥー*19とともに現れたのである。彼は、テキストの説明という幼稚でおとなしい形式を貼に移植するだけないハが、そわにひとつの改良を加えた。つまり、純粋なニューヴォー・ロマンのひどく読みにくく、わざと内容を貧しくした文章に、黒字に黒く塗るように、内容と読みやすさの点で模範たるにふさわしい不定形な批評言語で注釈を加えるのである。こういう具合に、30の小匙でも、10万本の壘でも、100万人のスイス人でも、何でもかんでも「新しい写実主義（ニューヴォー・リアリズム）」*20に統合することができる。それがその威力である。新具象芸術（ニューヴェル・フィギュラシオン）*21は、絵画の過去と現在と未来を、儲かるものになら何にでも統合したがっている。抽象芸術の愛好家と具象芸術の愛好家の両方に対して掛けられた全災害保険というわけである。

文化はこのような現状なのだから、解体を互いに統合することしかできはしない。そして、誰も指摘しようとしなが、これらの解体自体が、ほとんど常に、過去のものの繰り返しにすぎない（サポルタのランプ小説は、1930年以前に出版され、数年前に再販されたポール・ヌーージェ*22のランプ詩『言葉と偶然の戯れ』の焼き直しである。こうした例はいくらでも数え上げることができよう）。こうした結構なものへの観客の統合について言えば、それは、観客を、ニュータウンへと、国土のいたるところにあるテレビへと、彼らを雇用する企業へと統合することの貧弱な縮小コピーにすぎない。それは、同じ筋書きをたどっているが、その力は無限に弱く、そのモルモットも無限に少ない。新たな解体の芸術の古くさい形式はどれも、今やそれ自体、現代文化の支配のための闘争の中心から遠くはずれている。文化の地盤の変化は、ただ単に、文化における革命的前衛のテーゼであるだけでなく、不幸なことに、現在の支配者たちの側の逆の計画でもあり、その計画は、すでに広く実現されているのである。もっとも、「キネティック」運動*23の専門家たちについては別に論じる必要がある。彼らは、単に時間を芸術のなかに統合したがっているだけだ。彼らはずいていなかった。というのも、現代のプログラムはむしろ、芸術を生きられた時間のなかに解体することなのだから。

何人もの研究者からが、まだ空きのある専門領域を確保するために、すでに多くの点でこうした性急な統合やその短絡的な正当化を越えた地点にまで足を踏み入れている。何人もの技術者が、ル・パルク*24のようにスペクタクルを改革することを望んでいる。彼は、1962年9月の「視覚芸術探究グループ」*25のパンフレットのなかで、受動的な観客を「刺激された観客」や「演技者としての観客」にまでも進化させることができると考えているが、それはあいも変わ

らず、「格闘させるための彫刻や描かれるためのダンスやフェンシング絵画のたぐい」をもたらすような専門化したがるたの枠組みのなかにとどまっている。おまけに、ル・パルクは、シチュアショニストめいた言い回しすらいくつか使っている。「受動的な観客という伝統的な状況を転覆することをはっきりと認めることによって、スペクタクルという観念を回避できる（……）。」しかしながら、この観念は、回避するのではなく、社会におけるその位置を正確に測定したほうがよい。観客は、「実際の参加（諸要素の操作）」——その通りだ。そして、視覚芸術家は、もちろんその、要素をすべて準備しているだろう——を達成することで、ル・パルクを満足させるだろうが、観客に対する彼の期待の無益さが何かもっと堅実なものに到達するのは、彼が、文章の終りで、「プログラミングの概念」、すなわち権力側のサイバネティックス研究者に手を差しのべるときである。もっと先の地点にまで遡っている者は犬勢いる（『フランス＝オプセルヴァトール』誌 *26 1962年12月27日号を参照せよ）。たとえば、「RTF〔フランス・ラジオ・テレビ放送協会〕研究局」は、先の12月21日にユネスコで、雑誌『プラネット』を率いる有名な地球外生物たちの参加を得て、会議を開催することで、まさしく「状況を創造」しようとしたのであった。

理論面でのシチュアショニスト・インターナショナルの勝利ゆえに、すでに敵どもはシチュアショニストに変装せざるをえなくなっている。ここに、歴史の弁証法がよく示されている。われわれに敵対して行なわれている接近戦には、さっそく2つの傾向が見出される。1つは、シチュアショニストの思想を何も持たないのにシチュアショニストと自称する輩（ナッシュ主義*27のいくつかの変種）であり、もう1つは、逆に、シチュアショニストなしに、またS Iの名を挙げることなしにシチュアショニストのいくつかの考えを取り入れようと決め込んでいる輩である。われわれのテーゼのなかでも、最も単純で、最も古いもののいくつかの正しさが立証される確率がしだいに高まってくるにつれて、大勢の者が、口には出さずとも、あれやこれやのテーゼのかなりの部分を自分のものとして取り上げるようになってきた。もちろん、これは、前例があることを認めるべきだとか、当然受けるべき個人的名声の問題ではない。こうした傾向を指摘することに意味があるのは、次のような決定的な1点でそれを糾弾するためである。つまり、彼らは、そうすることで、新しい問題について語りながらも、ただ単にその問題のもつ暴力性や社会全体の転覆との関係を完全に排除し、それゆえその問題を骨抜きにして大学の研究発表かそれよりずっとひどいものにしてしまうことで、その問題をできる限り排斥し、結局彼ら自身でその問題をありきたりのものにしてしまうのである。こういう意図があるからこそ、S Iを隠しておくことが必要なのである。

例えば、雑誌『今日の建築』*28第102号（1962年6-7月合併号）は、ついに「空想的な建築」一覧の特集をした。そのうちの新旧のいくつかの試みは、かなり興味深いものかもしれない。しかし、その興味深い応用の鍵を握っているのは、S Iだけである。『今日の建築』誌のへぼ絵描きたちの手にかかるると、そうした試みも受動性の砦を飾るためにしか役立たない。例えば、この雑誌の編集長は、その個人的な芸術活動——それが芸術と言えらして——において、流行の彫刻のほとんどすべてに手を染めて、見紛うばかりにそっくり模倣してきた。このことで、彼は、心理操作という造形芸術の分野での権威を薙かなものにしたようである。こんな奴

らが今、環境（デコール）を改善しなければならないと気付いたのは、あらゆる改良主義者たちと同様に、先手を打って行動して、より強い圧力に対抗するためである。こうした今日の責任者たちは、舞台装置（デコール）を改良する気ではいるが、そこで送られる生活には触れようとしない。そして、彼らは、これについてのいかなる結論からも逃れるために、この件に関する調査を「システム」とこわごわ呼ぶのである。この号のなかで、1960年にSIを去ることを余儀なくされた、統一的都市計画の亜流の「技術者」に、最小のスペースが与えられているのは、理由のないことではない。この最大限に貧弱にされた亜流の理論さえ、古い機能主義からの改宗者の折衷主義にとっては、あまりに厄介なのである。しかしながら、われわれは、まさしく、いかなるシステムも擁護しはしない。われわれには、彼らが擁護する一方で、彼らをかきも細かく切り刻みながら、彼らを守っているシステムが、そのあらゆるレベルにおいて、誰よりもよく見えるのである。われわれは、このようなシステムの息の根を止めたいと思っているのだ。

過去6ヵ月ないし10ヵ月来、いくつかの雑誌で、余暇の問題や、将来の革命組織の内部で必要とされる新しい人間関係について、再考し始めている者たちについても、同じように反駁しなければならない。彼らには何か欠けているだろうか？ 実際の経験、既存のものに対する仮借ない批判という酸素、全体性である。今や、シチュアシオニストの観点は、酵母のように不可欠であると思われる。それなしでは、数年来SIによって提起されてきた最良のテーマもしぼんだ生地のようにつぶれてしまう。支配的な生活と支配的な思考の倦怠にどっぷり浸かって形成された者たちは、倦怠の余暇に喝采を送ることしかできはしない。革命運動の現在やその可能性をよく感得しなかった者どもは、精神工学の賢者の石を追い求めることしかできはしない。その石は、政治離れした現代の労働者を、既存の社会の模範を巧妙に再生産している左翼組織の熱烈な活動家に再び変貌させるだろう。そうすると、左翼組織は、工場のように、自分たちののミクロ集団に少々潤滑油を差すために、社会心理学者か何かを雇うかもしれない。社会調査法やサイコドラマの方法は、決して誰も、状況の構築の方へと前進させはしないだろう。

参加がますます不可能になるにつれて、モダニズム芸術の二流のエンジニアたちは、当然のように誰も参加を要求する。彼らは、公認されたゲームの規則として、使用法のパンフレットを配布するが、そこには請求書も付いてくる。まるで、（あらゆる芸術を制限してきた階級と深さという点での限界はあったが）参加が現に存在していた芸術において、参加とは常に暗黙の規則ではなかったかのように。われわれは、これほどわずかしかわれわれに関係のない芸術やスペクタクルに「介入する」よう、厚かましくせき立てられる。こうした栄えある物乞いの滑稽さの裏側で、彼らは、労働や私生活の余暇のような「参加することの不可能な何かのなかへの参加」を組織するスペクタクルの社会の高等警察の不吉な領域に行き着くのである（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第6号「統一的都市計画事務局の基本綱領」を参照せよ）。この観点に照らして、次に引用するル・バルクの文章の明らさまなお目出たさを再検討しなければならないだろう。ル・バルクが「刺激」しようとする大衆には、奇妙な非現実性がまとわりついている。「観客が非—実現、非—観照、非—行動に参加したいと強く思うような場にでくわすかもしれない。その場合、たとえば、完全な暗黒のなかにいる10人ほどの非—行動の観客が、何も言わずにじっと動かずにいることも想像できるだろう。」このような状態に置かれれば、人は

大声で叫びだすだろう。否定（ネガティブ）の前衛の実際の行動に参加したことがある者なら、幸運にも誰でもそのことには気がついたであろう。否定（ネガティブ）の前衛は、ゴールドマンが信じているのとは違って、決して純粋な不在の前衛であったことはない。それは、望まれた存在に呼びかけるための不在のスクランダルの演出、「人間存在そのものの謂いたる遊びへの扇動」（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第4号の「マニフェスト」）であったのだ。「視覚芸術探究グループ」の生徒たちが抽象的な大衆について持っている観念は非常に形而上学的なので、彼らはきっとそれを芸術の地盤の上に見出すことはできないだろう。こうした傾向の連中がみな、あきれるほど破廉恥に想定している大衆とは、完全に痴呆化した大衆であり、専門家だちと同じように、彼らの愚にもつかない仕掛けに対してうっとうしいほど真面目になれる大衆である。だが、彼らが考えるのとは逆に、こうした大衆は、社会全体のレベルで形成されつつある。それは、スペクタクルの社会の「孤独な群衆」であって、この点で、もはやル・パルクは、自分で思っているほど現実に先んじているわけではない。この疎外の組織化において、純粋に受動的であり続ける自由のある観客は、確かにいないだろう。彼らの受動性は組織されていて、ル・パルクの言う「刺激された観客」は、すでにいたる所にいるのである。

われわれは、状況の構築という考えこそが現代の中心的な考えであると、ますます確信を深めている。その逆のイメージ、奴隷制論者的なその反対物は、現代のあらゆる心理操作のなかに現れている。まだ現れたばかりの社会心理学者——マックス・パジェス*29は、過去20年にまだ50人ほどしかいないといっている——は急速に増加するだろう。彼らは、いくらかの所与の状況を操作できるようになったが、そうした状況とはまだまだ粗雑なものである。サルセル*30の住民のために計算された恒久的な共同の境遇〔＝状況〕が粗雑なのと同様である。サイバネティックスの仕掛けの装飾家という専門を救うために、この陣営に並ぶ芸術家たちは、統合の操作においてその第1歩を踏み出したことを隠そうとしない。しかし、この統合に反対する芸術的否定の側に立つならば、回収の危険を冒すことなくこの状況という地雷原に近づくことはできないように思われる。もっとも、あらゆる面で、首尾一貫した新しい異議申し立てを行うという立場を取るなら、話は別である。それにはまず、政治の面でそのような立場を取る必要があるが、この政治においては、どのような未来の革命組織を考えるにせよ、それを真面目に考えるなら、多くの点で「シチュアシオニスト」的な資質をもはや欠くことはできないだろう。

自由な遊びというものも、それが、芸術の解体の経験という地盤だけの上で孤立するなら、回収される危険性がある。1962年春に、ジャーナリズムは、ニューヨークの芸術的前衛たちのあいだでのハプニング*31の実践について報告し始めた。それは、閉ざされた場所に居合わせた者たちによる、一種の極端に解体されたスペクタクル、ダダイスト風の即興的な動作である。そこには、ドラッグとアルコールとエロティシズムが多少とも寄与している。「役者」の動作は、詩、絵画、ダンス、ジャズを混ぜ合わせようとするものである。こうした形の社会的出会いは、古くさい芸術的スペクタクルの限界例とみなすことができる。そこには、そのようなスペクタクルの残骸が共同墓穴に投げ捨てられているのである。あるいは、通常のびっくり（サプライズ）パーティや古典的な乱痴気騒ぎの革新の試み——もっとも、そう呼ぶにはあまりに美学が詰まりすぎているが——とみなすこともできる。「何かが起きること」への無邪気な探求、分解され

た観客の不在、人間関係のかくも貧しい分野に少しでも新風を吹き込もうという意志によって、ハプニングは、貧困（物質的貧困、出会いの貧困、芸術的スペクタクルから受け継いだ貧困、こうした契機の現実を大いに「イデオロギー化する」はずの厳密な哲学の貧困）の基盤の上での状況の構築の孤立した探求であるとすら考えることができるだろう。S Iが定義した状況は、これとは逆に、物質的かつ精神的な豊かさの基盤の上にしか構築されえない。言い換えれば、状況の構築の始まりは革命的前衛の遊びでありかつ真面目さでなければならず、いくつかの点で、政治的受動性や形而上学的絶望、さらには芸術的創造性の純粋な欠如さえをも甘受している者たちにとっては存在し得ないのである。状況の構築は、自由で実験的な行動様式が支配するであろう社会の、究極の目的であると同時に最初の模型でもある。しかし、ハプニングは、程なくしてヨーロッパに輸入され（12月にパリのレーモン・コルディエ画廊に）、フランスの模倣者の手でまったく裏返しにされ、詰めかけた観客がじっと見ているだけの、美術学校のダンス・パーティのような雰囲気の中で、シュルレアリスム風のがらくたの展覧会の初日（ヴェルニサーージュ）の単なる宣伝に成り果ててしまった。

貧困の基盤の上に構築されたものは、常にそれを取り巻く貧困によって回収されて、貧困を保証するものに奉仕することになるだろう。1960年初頭、S Iは、1つの罨を免れた（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第4号の「迷宮としての世界（ディ・ヴェルト・アルス・ラビリント）」を参照せよ）。罨となったのは、市立（ステーデリク）美術館からの舞台装置（デコール）の設計の提案のことで、それは、アムステルダムにおける一連の漂流や、この都心で統一的都市計画のいくつかのプロジェクトを行う口実として役立つはずだった。当初S Iは迷宮のプランを認めさせたのだが、その迷宮は、36種類の規制と統制によって、伝統的前衛芸術のイベントの域をほとんど出ないものに矮小化されそうなことが明らかになった。それで、われわれはこの契約を破棄した。前衛主義的なこの美術館は、長い間悲嘆に暮れていたようである。というのも、1962年にとうとう彼らは、「彼らの」迷路*32を実現させたからである。それは、より簡単に、「ニューヴォー・レアリスム」の一味に委託してのことだった。この連中は、ツアラ*33がその全盛期に言っていたように、「心にダダを持っている」とても写真映りのいいものを寄せ集めたのだった。

使用可能で説得力のある——どうして奴らを説得しなければならないのか？——詳細な計画を公表せよとわれわれに迫る奴らは、その計画を一目見て、われわれのユートピア主義の証拠だと言ってすぐに突き返すか、あるいは、すぐさまそれを骨抜きにしてそこらじゅうにまき散らすことだろう。実は、他のほとんどすべての者に対しても、詳細（デターユ）な計画を要求できるのである。それらの多くが満足いくものだろうと思いついでいるのは、あなた方なのだから。しかし、われわれに対してはできない。基本的な文化的革新は、細部（デターユ）においてではなく全体としてのみある、というのがわれわれのテーゼなのだから。われわれは、他の者より数年先んじて、現在の極限的な文化的解体のありとあらゆるトリックを発見するのに、明らかに有利な立場にいる。そうしたトリックは、われわれの敵のスペクタクルにおいてしか利用できないので、われわれはそれについて言うべきことは引き出しの奥に隠してある。しばらくすれば、その多くが間違いなく自然に見つけ出されて、何某によって鳴り物入りで発表されるだろう。しか

しながら、われわれの手のなかにある大部分は、今なお「歴史に追いつかれて」はいない。その多くは、決して歴史に追いつかれることがないかもしれない。これは戯言ではない。それどころか、実験によって証明されていることである。

現代芸術は、その出現の条件そのものにおいて新に批判的で革新的であったところろでも、その大きな役割を果たし終え、そして、それが産み出した物に対する投機的な思惑にもかかわらず、いまだに自由の敵によって嫌悪されている。そうわれわれは考えている。同毒療法（ホメオパシー）論者の非スターリン化の主導者たちが、現代芸術をすっかり忘れさせたと思っていた自分の国に、それが舞い戻ってきたわずかな兆しを見て、恐怖に襲われる様子を見るだけで十分である。彼らはそれをイデオロギーの浸水孔のように暴きたて、あらゆるレベルでこのイデオロギーの操作を独占することが、自分たちの権力にとって死活問題だと白状する。しかし、それでもやはり、現在、西側で閉塞したかつての文化的遊戯の恭しい延命と人工的な蘇生によって繁栄している者たちは、実際は現代芸術の敵である。そして、われわれはといえば、現代芸術の遺産をまるごと受け取る者なのである。

われわれは、たとえどれほど現代的なかたちを取っていようとも、文化の因習的な形態には反対する。しかし、当然のことだが、それよりも、無知や、肉屋のプチ・ブルジョワ的良識や新（ネオ）ーブリミティヴィズムを好むというのではない。古くさい神話への不可能な回帰の流れである、反文化的態度というものがある。われわれはもちろん、そのような流れとは逆に、文化の側につく。ただ、われわれは、文化の別の側に立っているのである。つまり、それ以前ではなく、それ以後にいたのである。分離された領域としての文化を乗り越えることによって、文化を実現しなければならない。ただ単に、専門家に任された領域としての文化を乗り越えるだけではなく、生——これには当の専門家の生自体も含まれる——の構築に直接関わらない専門的生産物の領域としての文化を乗り越えることによって。

われわれはユーモアをまったく欠いているわけではない。ただ、このユーモアさえもが、いささか新しい種類のものなのである。われわれの諸テーゼに関して、その微妙な点やニュアンスのより精緻な理解に立ち入らずに、とりあえず1つの態度を選ぶ必要があるなら、その場合、最も単純で最も正しい態度は、われわれの言うことを完全に真面目に、文字通りに受け取ることである。

どのようにして、われわれは支配的な文化を破産させようとしているのか？ それには2つのやり方がある。最初は徐々に、次いで急激にやるのである。われわれは、芸術に端を発する諸概念を、芸術的ではないやり方で用いるつもりである。われわれは、1つの芸術的要請から出発したが、それはまさに、全盛期にあった革命的現代芸術の要請であったために、かつてのいかなる美学的理論とも似ていないものだった。われわれは、この要請を生活のなかに持ち込み、革命的な政治の方向に、すなわち、実際には革命的政治の不在とその不在の説明の探求に向けて推し進めた。そこから生じた全体的な革命的な政治は、過去100年間の現実の革命闘争の最良の部分によって立証されてきたものだが、それがこの計画の第1段階（直接的な生への意志）ということになる。この段階においてすでに、芸術や政治は独立した形態としては存在せず、その他の分離した領域も、ことごとく認められないことがないだろう。異議申し立てや世界の再構築は、この

ような計画を分割せずに実行することにおいてのみ生命を与えられる。そこにおいては、慣習的な意味での文化闘争は、より深遠な作業のための口実や隠れ蓑にすぎなくなるだろう。

優先的に片付けねばならない問題の果てしないリストを作るのは、たやすいことだ。困難はいくつもあるし、悲しいことに、短期的には解決できない問題すらいくつもある。たとえば、パリにあるユネスコ本部において十分に目立つスキャンダルを巻き起こそうという計画は、シチュアシオニストの間で人気を博したが、それは、まず第1に、シチュアシオニストの活動がシチュアシオニストのものとして、公然と、肯定的に現れるような具体的な介入の地盤を見つけたいというS Iに潜在的な好みをおそらく表しているのである。それは一種の出来事の構築であり、ここでは、官僚主義化された文化の世界的な中心に反対する立場を華々しく表明することになるはずであった。こうした側面を補完するのが、アレキサンダー・トロッチ*34がかつても今も支持している見解で、シチュアシオニストの活動の一部が秘密裏に行なわれれば、われわれの介入の自由度が増すこともありうるというものである。ヴァネーゲム*35が書いているように、「華々しい（スペクターキュレール）やり方である程度までわれわれの存在を知らしめることは避けられない」のである限り、こうした新しい秘密のやり方は、われわれの敵やわれわれに拒否された追従者たちがすでに頭のなかにこしらえている、われわれ自身の華々しい（スペクターキュレール）イメージに対して戦うためにおそらく有益であるかもしれない。この世で形成されるどのような威光とも同様に（われわれの「威光」は本当に特殊なものだが）、われわれは、われわれ自身に服従するという悪し尽力を解き放ち始めてしまった。こうした力に屈伏しないためには、われわれは、過去においてほとんど研究されてこなかった適切な防衛手段を、新たに講じなければならないだろう。シチュアシオニストの活動の疲労の原因のもう1つは、高度に専門化された思考と実践の社会にあった、すべてから包囲され攻撃されている非専門化の拠点を守り、全体性の旗を掲げ続ける務めが必然的にもたらす、一種の専門化である。さらにもう1つは、人々をわれわれの活動と彼らの行動に照らして判断して、私生活のレベル——これは受け入れることのできない基準である——では楽しい何人かの者たちとの交際を絶たねばならないということである。しかしながら、既存のものに対する異議申し立てというものは、それが日常生活をも考慮に入れるものならば、当然、日常生活の中での闘争として表現されるものなのだ。こうした困難は、数え上げれば切りがないが、それに端を発する議論は、まだ極端に薄弱である。というのも、われわれには、この時代の分岐路で思考が行う二者択一のもう一方の側、すなわち、すべての点での無条件の服従、が完全に見えているからである。われわれは、ほとんど無に等しいもの——すなわち生に対する還元不能な不満と欲望——の上にわれわれの大義の基礎を置いたのである。

S Iは、状況を構築したというのには、いまだほど遠いが、すでにシチュアシオニストを生み出した。それだけでも大したことだ。この、解き放たれた異議申し立ての力は、その最初の直接的な適用とあいまって、そのような解放は不可能ではないという実例である。したがって、まもなくさまざまな分野でその成果を見ることになるだろう。

- *1: リュシアン・ゴルトマン (1913-70年) フランスのマルクス主義社会学者。マルクス主義の立場から社会学的方法論を文学批評に適用した。著書に『隠れた神』(56年)、『弁証法研究』(58年)、『小説の社会学のために』(64年)など。『アルギュマン』誌の協力者の1人である。
- *2: イヨネスコ (1912-94年) フランスの劇作家。『禿の女歌手』(50年)、『授業』(51年)などで、アンチテアトルあるいは不条理演劇の代表的作家として認められる。
- *3: サミュエル・ベケット (1906-89年) アイルランド生まれのフランスの小説家・劇作家。38年以降フランスに定住し、最初は英語で、45年以降は主にフランス語で小説・戯曲を発表。代表作の小説『モロイ』(51年)と戯曲『ゴドーを待ちながら』(52年)で、ヌーヴォー・ロマン、アンチ・テアトルの先駆者とされる。69年ノーベル文学賞受賞。
- *4: ナタリー・サロート (1900-) ロシア生まれのフランスの女性作家。38年発表の『トロピスム』は、後に有名になり、ヌーヴォー・ロマンの最初の作品と見なされる。他の作品に『見知らぬ男の肖像』(48年)、『プラネタリウム』(59年)など。
- *5: アルチュール・アダモフ (1908-70年) ロシア-アルメニア系のフランス人で、劇作家 1924年以降フランスに定住し、シュルレアリスム運動に参加。やがてマルクス主義の影響を受け、50年代に劇作に投じ、アンチ・テアトルの代表者となる、作品に『侵入』(50年)、『1871年春』(61年)など。
- *6: マルグリット・デュラス (1914-96年) フランスの女性作家。暗示的な会話と極度に簡素な文体によってヌーヴォー・ロマンの作家と見なされる。代表作に『モデラート・カンタービレ』(58年)、『わが愛、ヒロシマ』(59年)など
- *7: アラン・ロブ＝グリエ (1922-) フランスの小説家。『消しゴム』(53年)、『覗く人』(互五年)などの小説によって、ヌーヴォー・ロマンの騎手とされる。アラン・レネ監督の映画『去年マリエンバートで』(61年)の脚本、自らが監督した映画『不滅の女』(63年)によって、映画にも手を染めたが、シチュアシオニストから批判されている。本書 第3巻『サンセット大通り』を参照。
- *8: 『隠れた神』 リュシアン・ゴルトマンの1956年の著書。ルカーチなどの影響を受けて、作品は社会状況に一方的に規定されるという還元主義的なマルクス主義文学批評に異を唱え、作品は社会を構成する要素であるという新しい批評を打ち出した。具体的には、ラシーヌとパスカルの中に見出される「悲劇的ヴィジョン」が、社会状況の反映ではなく、独自の自律性をもって機能するものであることを証明した。
- *9: ロジェ・プランション (1931-) フランスの劇団主宰者、演出家、劇作家。シェイクスピア、モリエールなどの古典劇や、ブレヒト、アダモフなどの現代劇の演出を手掛けた。ここで暗示されているのは、彼の作品『ル・シッドの破砕』(発表年不詳)のことか(『ル・シッドはコルネイユ作の古典劇)。
- *10: ロジェ・ガロディ (1913-) フランスの哲学者、政治家。当時はフランス共産党政治局員、中央委員(かつ大学教員)。当時までに社会主義リアリズムや唯物論についての研究を著しており、当時の近著として『神は死んだ』(62年)。なお、その後68年のチェコ事件に対する立場の相違から、70年にフランス共産党を除名され、さらに81年の著書ではイスラームに改宗している。
- *11: 〈音と光のショー(ソン・エ・リュミエール)〉 城館などの名所旧跡に照明や音響効果を配し、時にはそこにちなんだ歴史上の人物を登場させたりする一種の歴史絵巻スペクタクル。

*12: ジャック・シクリエ フランスの映画批評家。著書に『ペタンのフランスとその時代の映画』（81年）、『フランス映画』（全2巻、90年、91年）、『七月の夜』（91年）など。ここで言及されている『ル・モンド』紙の記事は、バレエ、オラトリオ、ドラマを組み合わせたマルセル・ドゥラノワの『時間の夜』（脚本はフィリップ・スーポー）についての批評「テレビ番組『時間の夜』」のこと。

*13: マルク・サポルタ フランスの作家・文学批評家。著書に『アメリカ小説の歴史』（76年）、『鷹の足跡——ウィリアム・フォークナーの心理的伝記』（89年）など。『アルク』誌のナタリー・サロート特集、ヘンリー・ミラー特集、デュラス特集なども編集している。ここで言及されている「トランプ小説」とは、1962年6月にスイユ書店から出版されたサポルタの小説『コンポジション第1番』のこと。そこには『読者には、トランプゲームのようにこの本のページを使って争うことを願います。そのゲームから出てくるページの順序によってXの運命が方向づけられることになるだろう』と書かれている。

*14: スタルゼウスキー ポーランドの画家ヘンリク・スタゼウスキー（1894—1988年）と思われる。スタゼウスキーは、ワルシャワで活動した抽象芸術の画家で理論家。30年代に〈セルクル・エ・カレ〉や〈アブストラクション・クレアシオン〉などの抽象表現主義の運動に参加、戦後も現代文明と芸術の関係に関心を向けた作品を作り続けた。ここで触れられている、「陶磁器」と「実験音楽」とを結合した作品については不明。

*15: カルルハインツ・シュトックハウゼン（1928—） ドイツの作曲家。パリに来てメシアンらに師事し、ブーレーズとともにヨーロッパ前衛音楽の先頭に立った。彼の探求は、12音技法の原理をリズムと音色と音の強さに拡張することを意図しており、伝統的な音と電子音を混ぜ合わせることによって、空間と時間の観念を一新した。また、「導かれた偶然」の原理を援用して、演奏者が創造に参加することを可能にした。

*16: ニコラ・シェフェール（1912—92年） ハンガリー生まれのフランス人で、彫刻家。1948年に金属板による幾何学的な構造からなる「空間力学的（スパシオダイナミック）」な彫刻を想像し、次いで音と光のインパルスによって動く彫刻を創造した。1957年に「光力学（ルミノデュナミスム）」に拠って反射鏡などの光学装置で動く光の効果を、1961年にプレキシガラス製の部品の動きによるアナモルフォーズ（光学的な歪み）作品を製作した。1962年の『光一壁』などでは、感光性のセルのインパルスの作用による抽象的形態を製作した。

*17: フィリップス社 オランダに本社を置く欧州最大の電機メーカー。1891年、電球製造業者として出発、現在は家電から音響、通信、医療機器まで幅広く手がける。

*18: ミシェル・タピエ（1909—87年）フランスの美術評論家。1948年、ブルトン、ジャン・ポーランと「生の芸術（アール・ブリュト）商会」を設立し、大戦直後から画家のデュビュッフェが実践していた「生の芸術」（幼児、精神疾患患者、アマチュアの作品）の収集活動を推進する。それと平行して、デュビュッフェ、ヴォルス、フォートリエら大戦後の前衛的な非具象絵画を「アンフォルメル（非定型）」芸術と命名し、この運動の推進者にして中心的理論家として活動。また、サム・フランシスやアンリ・ミショー、フォンタナ、日本の具体派なども積極的に評価した。著書にアンフォルメルのマニフェストである『もう一つの芸術』（1952年）などがある。

*19: ジャン・リカルドゥー（1932—）フランスの作家。1961年に、テキストが「冒険の物語というよりは物語の冒険」になるような小説『カンヌ展望台』を発表、その後、雑誌『テル・ケル』の編集委員を71年まで勤め、その間に2冊の評論『ヌーヴォー・ロマンの諸問題』（67年）と『ヌーヴォー・ロマンの理論のために』（71年）（邦訳題名は『言葉と小説』と『小説のテキスト』、いずれも野村英夫訳、紀伊國屋書店刊）も著している。

*20: 「新しい写実主義（ヌーヴォー・リアリズム）」 現代美術の流派としての「ヌーヴォー・リアリズム」は、1960年から63年に、美術批評家ピエール・レスタニーと画家のイヴ・クライン、デュフレーヌ、彫刻家ティンゲリー、アルマンが行ったフランスの前衛芸術集団の名。彼らは彩色したスポンジ、圧縮したスクラップ、騒音を発しつつ動く廃

品彫刻、梱包作品、壁から剥がした広告ポスターによる作品など、現代の産業社会の生産物や機械をそのまま提示することが現代の「新しいリアリズム」だと主張した。ここでは、日常生活の微細な事物を延々と描写する文学流派の「ヌーヴォー・ロマン」の手法を、「写実主義」という共通性の上に美術流派の「ヌーヴォー・リアリズム」になぞらえている。

*21：新具象芸術（ヌーヴェル・フィギュラシオン） 60年代初頭のフランスの前衛美術界で支配的な抽象画とも、新しく生まれてきたヌーヴォー・リアリズムとも異なる「第3の道」として、61年以降生まれた芸術表現の流派で、デフォルメされ、図案化された具象表現によって、日常生活の中に神話的素材を見出したり、政治的批判を行ったりした。何回かの集団展が開催されたが、1つの運動体ではなく、そうした手法を用いるものの総称として「ヌーヴェル・フィギュラシオン」の名が用いられた。代表的な画家に、アダミ、アロヨ、エロ、モノリらがあり、集団展として「日常の神話」展（64年）が有名。

*22：ポール・ヌージェ（1895－1967） ベルギーの詩人。1925年から40年まで、マグリットとともにブリュッセルのシュルレアリスムの中心人物として活動。フランスのシュルレアリストの自動書記（エクリチュール・オートマチック）に反対し、ヴァレリーを賛美して、理論的にも作品的にも抑制のきいた厳密さを擁護した。彼の詩は、言語的常套表現を巧みに「転用」した手法を用いたもので、デュシャンやレトリストの作品に近いものがある。ヌージェはまた、1919年のバルギー共産党の創始者の1人であり、その政治的姿勢を生涯貫いた。50年代以降は、ドゥポールらも協力したマルセル・マリエンの雑誌『裸の唇』作品に定期的に寄稿した。まとまった作品集は死後出版の『笑わない物語』（1980年）、『持続的実験』（81年）など。

*23：「キネティック」運動 キネティック・アートとは「動く芸術」の意味で、機械仕掛けによって、あるいは光や電気や映像などによって、作品の一部または全体を動かす芸術表現のこと。テクノロジーに裏付けられ1960年代に盛んになった。パリの〈視覚芸術探究グループ〉、西ドイツの〈グルッペ・ゼロ〉、イタリアの〈グルッポT〉などの集団が有名である。

*24：フリオ・ル・パルク（1928－） アルゼンチンの芸術家。 58年からパリに

訳者解題

この論説は、S Iの結成以降5年を経てさまざまな理由からS Iを除名された、あるいは脱退した者たちが、世界の各地で「シチュアシオニスト」の名を騙って行っている活動に対して、その理論的・実践的変質をS Iが暴露する内容のものである。とりわけ、1962年3月にスウェーデンで「バウハウス・シチュアシオニスト」という名の分派を結成し、シチュアシオニスト商標の家具の製造販売などを試みてS Iを除名されたヨルゲン・ナッシュら（本書 第2巻 参照）が、その後スカンディナヴィアで行っている行為を、S Iは「ナッシスム」と呼び、それを激しく糾弾している。ナッシュは、S Iを除名後、ジャックリーヌ・ド・ヨング、アンスガー・エルデらと共にシチュアシオニスト第2インターナショナル」を結成し、映画・絵画・装飾・都市計画・詩・考古学・音楽などの前衛芸術活動を行ったが、それらの活動はどれほど「前衛」的であろうと、現代社会において「芸術作品」の存在を成り立たせている制度そのものへの批判を欠いたものであった。ナッシュ自身の言葉（『タイムズ・リテラリー・サプリメント』1964年8・9月号に発表された「シチュアシオニストとは誰か」という題の記事）によると、この「自由に組織された運動」は、「自律的な作品製作集団の自発的な結社」であり、「今のところ、そうした集団はスウェーデン南部のハランド州に4つ、デンマークとフィンランドにあと2つ存在し」、ミュンヘンのドイツ前衛集団〈シュプール〉とも共同で作業を行っている」とされるが、これらの集団は、とりわけ「芸術作品」至上主義を理由にS Iを除名された者たちである。ナッシュがいかに自分たちの「シチュアシオニスト第2インターナショナル」がドウボールらの「シチュアシオニスト第1インターナショナル」と「互いに補完しあうようにされる可能性がある」（前掲論文）と述べようとも、「作品」の自律性を無批判に信じるナッシュらと、「作品」こそが「芸術家」をスペクタクルの社会に組み入れる最大の装置であるとして社会の全体的批判の路線を確立したS Iとは、「両立不可能」である。ナッシュらは、この後、カタリーナ・リンデルを編集長として61年以降発行してきた『ドラカビュゲット [ドラゴンの巣]』という名の雑誌を拠点に、さまざまな形態の前衛芸術フェスティバルやフィルム・フェスティバルなどを開催するとともに、「バウハウス・シチュアシオニスト出版局」から多くの本を出版し、1970年代まで活動し続けた。彼らの活動の全体像は1971年にアンブロシウス・フィヨルドとパトリック・オブライエンの編集で「バウハウス・シチュアシオニスト出版局」から出版された資料集『シチュアシオニスター』に詳しい。」

1963年6月25日にシチュアシオニスト・インターナショナルが発表した、ミュンヘンのウーヴェ・ラウゼン*1裁判に関する宣言は、今後の予測は不明だが、今までのところシチュアシオニスト運動が遭遇してきた3種類の否定を列挙している。つまり、警察（ドイツにおける

ような)、沈黙(その記録はフランスがしっかり保持している)、そして公然たる偽造(この1年来、北ヨーロッパがこの上なく豊かな研究領域を提供してきた)である。もちろんこれら3つの方法は、シチュアシオニストが最初、それぞれの地域に孤立して現れた時に活用されたように、その地域独白の方法としていつまでも融合せずにいるように、最初から決められているわけではない。逆に、どこでも、たえず配合を変えて、これらの方法が——それらに共通の機能とは厄介な問題を消し去ることだ——混ぜ合わせて用いられることが予想できる。警察というのは明らかにいささか古風なやり方である。それに対し、偽造は今世紀の日々の糧であり、専門家の沈黙はスペクタクルの社会のより新しい武器である。しかし、この社会の強みは同時にいくつもの方法をとれることだ。この社会に統合されない者たちはどちらにせよ、この種の妨害やその絶えざる強化をものともせず、現在許されている思想や日常生活に対する批判を維持し、発展させることを学ばなければならない。したがってシチュアシオニスト・インターナショナルは、自らがひきおこす、自らにふさわしい敵対行為には驚きも憤慨もしない。われわれに現在可能であり、また将来可能になるであろう反撃の展望のもとにこうした敵対行為を描写し、分析すれば充分である。

この8ヵ月間、シチュアシオニスト・インターナショナルに対する抵抗を特徴づけてきたのが、偽のシチュアシオニスト的ニュアンスを誇示することによる詐欺の戦術であることには異論の余地がない。もっとも、このようなシチュアシオニストのプログラムを偽造する試みには、より控えめではあったが前例があり、われわれはすでにそれらを忘却の淵に沈めてきた。3月にヨルゲン・ナッシュ*2が、スカンディナヴィア・セクションの名のもとにシチュアシオニスト・インターナショナルを攻撃した宣言のまがい物については、すでに言及した(『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号 参照)。スカンディナヴィアのシチュアシオニストたちが互いに遠く離れて往んでいることを計算に入れて、ナッシュは仲間の全員に相談することなくこの強権を発動した。全員一致で支持されないばかりか、シチュアシオニスト・インターナショナルの多数派から、すばやい決定的反論の発表によって即座に反撃されて、あわてたナッシュは、最初、シチュアシオニストとの完全な決裂に至ったことに驚いてみせた。まるで、公にしかも嘘の急襲をしかけることが、ナッシュ的スカンディナヴィアの自立性なるものに立脚した対話の継続と両立可能であるかのように。第一、陰謀の発展ぶりからして、その実際の目的にはほとんど疑いの余地がない。なぜなら、スカンディナヴィアの2、3人の元シチュアシオニストと、儲け話を嗅ぎ付けて駆けつけた見知らぬ連中の集まりであるスウェーデン「バウハウス」は、ただちに陳腐この上ない芸術製作を始めたからである(この新「バウハウス」の仕事の最初の成果であるファザーケレイなる者の「詩」*3を例にとれば充分であろう。1930年以降、あえてこんなものを書く者はもういない)。同時に、オランダで、『ザ・シチュアシオニスト・タイムズ』*4という題名の全く無内容なナッシュ主義者の雑誌が出た。この雑誌はシチュアシオニスト・インターナショナルに対抗して編集されたという意味においてのみ「シンチュアシオニスト」であるという特徴を有している。この雑誌の数多い臨時の協力者たちは、シチュアシオニストだったことなど1度もなく、それを自慢する気もない。唯一の例外が2人の指導者のうちの1人である。彼は18ヵ月間シチュアシオニスト・インターナショナルにいた人物*5で、それについて饒舌にしゃべっている。もう1人の指導者はスターリン主義的パタフィジックの墓から戻って

きたノエル・アルノー*6その人である。この御都合主義的集まりには、他に元レトリストが1人、そして死後出演のポリス・ヴィアン*7が混じっている。スカンディナヴィアにおけるナチストとシチュアシオニストの論争においてナチ主義者は、自分たちに実行可能だと思えたあらゆる威しと暴力に訴えたばかりか、（共犯の意を固めたジャーナリストの助けを借りて）一連の偽情報を組織的に流しさえした。最も反響を呼んだ6月の偽情報は、他ならぬS Iが彼らの再加入をめざして対話を再開することを受け入れたというものであった。そして彼らはそのチャンスを証明するために、中央評議会の手紙なるものを引き合いに出したのだが、それもまた完全な偽物であった。この事件がスカンディナヴィアのジャーナリズムに広く知れ渡ったことで、その性質からしてS Iテーゼを客観的に示すよりはナチスト的に変形することに有利な場で議論がなされるようになった。しかし、それにもかかわらず、時間を稼ぎ、混乱をほんの1週間でも延ばそうとする彼らのあらゆる努力も、ナチストが正体を現すのをとどめることはできなかった。つまり、ナチストはS Iとは無関係で、たしかにS Iよりずっと社交的だが、知的にはけるかに劣るのである。

ナチストは全員まず最初に、そして2度とそれについて考えないですむよう、S Iの全理論に賛成であると宣言した。しかし実践においてはまったくそうではない。それにこの実践について彼らが批判することといえば、S Iの行きすぎた規律という点に関してのみである。だが、この規律の行きすぎこそまさに、理論と可能な実践の間に何らかの関係を見いだそうとするシチュアシオニストの合意にほかならない。ナチストが求める実践とは明らかに、「現在の」——つまりすっかりすたれた——モダニズム芸術に無意味なおしゃべりと商業的ラベルを添えて続けることである。一時的にナチズムに加盟したこの連中（彼らにはほとんど、あるいはまったく知りもしないS Iに対する反対以外、互いに何ひとつ一致するところがない）の創造性の貧困が示すのは、苦勞して何らかの修正主義を作り出すよりもわれわれのテーゼをすべて採用すると口走った方がよい、と彼らが思っているということである。しかし創造性の欠如はあまりにひどいので、彼らには平板なコメントによってすら、われわれのテーゼを参照する力がないということもありうる。彼らのうちの、元シチュアシオニストだった連中が、S I時代には注意深く隠していた才能を、今になって、疑わしい必要にせまられて発揮する（なぜなら、われわれの思想は出世主義者にはまったく向いていないのだから）というのも変な話であろう。

われわれはナチズムとその一味に、特殊な倒錯性を認めたいというわけではない。われわれには、ナチズムはある客観的傾向を表しているように思われる。その傾向は、文化の中で、この文化の現在のあらゆる組織化に反して、さらには分解された領域としての文化のすべてに反して行動することを受け入れることによって、S Iがそのリスクを引き受けねばならない、曖昧で危険の多い政治に起因する。そして、あらゆることがらに、最も手恐い異議申し立ての眼差しとプログラムをもたらしながら生きること以上に曖昧で危険なことはない。しかも、こうした異議申し立てでさえ、ありのままの生活と共存しているのである。1962年の始めに除名されたドイツのシチュアシオニストたちは、より率直に、また芸術的にナチストよりは力強く、ナチスト同様の反対を表明していたが、それには現実的根拠があったのかもしれない。ハイムラート・プレム*8のイエーテボリ大会（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号

参照)での発言は、芸術的前衛の慣習に則ったかたちでの「作品製作」の数々の依頼を、大半のシチュアシオニストが繰り返し拒否した点を強調していた。多くの人がそうした作品製作にS Iを参加させたいと考え、そうしてものごとを收拾し、シチュアシオニストを芸術的実践という古い分類項目に連れ戻そうとした。プレムはシチュアシオニストの芸術家たちの、さしあたり十分な活動領域を見だしたいという欲望を表現していた。ただ芸術だけを急いで刷新することをめざすこの態度が、シチュアシオニストの理論と完全に矛盾することは確かである。シチュアシオニストの理論が前提としていることは、必要な他の変革、社会全体の自由な再構築を行うことなしに、分離された伝統的芸術だけに根本的な刷新をもたらすことはもはや不可能であるということである(構築された状況という仮説は、古い芸術のあらゆる「通常兵器」を解体するポスト・芸術の爆発の最初の一例である)。ナツシストはただ、卑しい商業的広告のために、悪意を、またあらゆる理論に対する深い無関心を、さらには慣習的な芸術活動に対してすら示される無関心を推し進めただけである。しかし、プレムの仲間たちも、もう少し品があるとはいえ、文化市場にまったく譲歩しなかったわけではない。つまり、彼らが一時的に避難したシチュアシオニスト・インターナショナルのなかには、芸術的前衛の現在の使命を理解することのできない反復の芸術家があったということなのである。これは、われわれの探求が緒に就いたばかりであることや、誰の目にも明らかな慣習的芸術の疲弊を考えれば、それほど驚くには値しない。彼らとわれわれとの間の矛盾がこうした対立にまで至る時というのは、曖昧さを明るみに引き出し、審判を下さなければならないほど、シチュアシオニスト・インターナショナルが前進したことを示しているのである。運動の芸術的生産物を反シチュアシオニスト的と名付けるというイエーテボリで採択された決定によって、シチュアシオニスト派の権威の下に慣習的芸術の若返りを図る連中との関係は、おそらくもはや引き返せない地点に達した。ナツシズムがもたらした矛盾は品のないものだったが、S Iの発展にともなって、より高い次元で、ほかにも数多くの矛盾が出てくるかもしれない。しかしながら、現在の決裂が注目に値するのは、われわれが強くなり過ぎないうちに排除しておこうと、支配的文化の世界が攻撃に移る瞬間を、この決裂が示しているという点においてである。以前にも、1961年春の、ルールでの「統一的都市計画」を自称するもののような偽造の例がいくつか見られてはいた(『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第6号参照)。しかしわれわれは今、核心に迫る試みを前にしている。S Iを知るものはみな、S Iがどんな種類の圧力にも耐え、自らの思想の軟化や穏健化とは正反対の方向へ進んでいることを確認することができた。文化の世界は、どれほど現代的でわれわれに対して好意的なものでも、同時に、S Iの現実についての混乱を最大限助長し(乱暴なやり方で。つまり、ナツシストの企てには資本が不足することは決してない、われわれをますます公然とのけ者扱いし(彼らの多くが投獄されようとしていたウーヴェ・ラウゼンを擁護するのを拒否したことで明らかになったように。彼らはそのくせ、同じ古い出版法違反で告訴されたS Iドイツ・セクションからの除名者は擁護していたのだ)、またとりわけ、われわれの経済的窒息を組織しようとするのである。

こうした流れの中で、現在のナツシストのような些末な出来事は付帯現象にすぎない。その後継者たちは、おそらくもっと強力だろう。ナツシュー昧はどれでも取り替えがきく。彼らは、古い芸術世界とわれわれとの対立を代表しているにすぎないのである。

ナツシズムの進化は、その短い命の最初からすでに、われわれの分析が正しかったことを証明

している。S I スカンディナヴィア・セクションは、今や雑誌『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』*9を出しているが、S I から切り離されたナツシストらは、たちまち芸術的環境の習慣のうちでも最も伝統的なものを再発見した。すなわち、一方では展覧会の初日での値引交渉とお菓子、もう一方では「美術学校（エコール・デ・ボザール）」スタイルの健康的なおふざけである。ナッシュは、S I を除名された彼の仲間たちのうち最も当惑しているのはアンブロシウス・フィヨルド*10で、彼は自分の不幸の理由が理解できないでいると新聞に告げた。実際は、アンブロシウス・フィヨルドはナッシュに属する馬以外の何者でもないだろう。スカンディナヴィア・ナツシズムが完全なものになるにはノルウェー代表が欠けていたので、ナッシュはある日、何かの宣言にフィヨルドの名前を書き入れたのだろう。これは絶対権力は絶対に腐敗するという有名な規則の一例なのだろうか。いずれにせよ、軍事クーデタの後、自分の村で第一人者であり続けることのできたカイウス・ナッシュ*11は、自分の馬をシチュアシオニストにしたのだ。彼の次なる堀り出し物を待とうではないか。彼は、自分の馬がS I 中央評議会のメンバーでもあったと主張するだろう。これまでも彼はこの種のことを試みたことがある（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号 参照）。このようにナツシズムはあまりにも過去の方に向いているので、今までになされたナツシストたちの想像力の唯一の努力は、彼らのわずかばかりのシチュアシオニストとしての過去を自己流に改造することにあつた。また9月には、同じナッシュが、パトリック・オブライエン*12という名のもう1頭の馬（今度のやつが、どちらにしても無条件にナツシストであるコヨーテか鯨だというわけでもない限り）に隠れて、オーデンセの街のとある画廊で「7人の反逆音たち」の絵を展示した。今になってナッシュが白状しているように、この7人はS I から放り出され——そのうち何人かは放り出されるという経験さえできなかったのだが——、ようやく彼らだけで〈スカンディナヴィア・シチュアシオニスト・インターナショナルヨナル〉に集っている。結構なアイデアだ。1961年に何人かのドイツ人が国家シチュアシオニズムを企んだ後、こんどはナッシュの賢い馬小屋がわれわれにシチュースカンディナヴィズムを敦えてくれるだろう。そこで何をなすべきか。数を数えることのできる馬がみな、話すこともできるなら、サーカスはもっと大入りになるだろう。

ナツシズムの無意味な論争のなかにも、しかし、完全にはっきりさせておいたほうがよい点が1つある。彼らは、自分たちを除名した多数派は疑わしい連中だと言明しているのだが、多数派を疑わしく見せるために彼らが発表した（2月のパリでの〔中央評議会〕の集まりについての）数字と事実はまったく疑う余地の無い嘘であつた。そのようにして彼らは「民主主義的」という自分自身の主張を掘り崩してしまった。しかしこの問題は明確にしておかねばならない。なぜならそれはS I の本質そのものに関わるからだ。S I の多数派は実際、はっきりと民主主義的規則に従つた。それゆえナツシストの反論はすべて、単なる不識実のレベルに位置付けられる。しかし問題の本質は別の所にある。もしいくつかの国における、愚かな追従者や利害関係者による見境のない人集めとS I への潜入工作という悪しき政策が、もう少し長い間受け入れられていたら、公式にS I に参加している偽のシチュアシオニストの数はたしかにであろう多数を占めるに至っていた。しかしそのことによって、シチュアシオニストが、彼らを非シチュアシオニストとし

て除名する権利と義務を変更するようなことはいささかもなかつたろう。それは最も基本的な理由によってである。なぜなら、すべてが刻一刻と示していたように、彼らはわれわれの思想や行動の基盤を、理解も評価もしていなかったからである。唯一の例外が、ある日、S Iに加盟するという選択をしたことなのだ。たとえ除名という行動に出たとしても、やはりわれわれがS Iの全体を代表し、彼らのほうは何も代表

しなかつたろう。しかし、そのような分派主義的暴力には頼らない方が望ましかつた。また、「忠実な」セクションの重みを増すために、ほとんどの国のシチュアシオニストに要求される水準を、たとえわずかといえども下げることを受け入れて、ナチストの観点に戦術的な面で追従することは問題外であつた。平等な投票の外見を保つためにとられるそうした巧妙な手段は、実際には、全員がS Iにおける現実の平等を放棄すること（弟子や従属的活動家の取り消し不可能な加盟）を意味しただろう。つまり、少数の出世主義者を、彼らが——現メンバーによる新メンバーの選考という方法で——増える前に排除し、どこであろうとS Iに加盟する際の、より客観的な規則を制定すべき時に来ていたのである。

S Iは大衆組織ではありえないし、慣習的な前衛芸術グループのように弟子を受け入れることもできない。最も不利な条件のもと、まったく新しい基礎の上に文化と革命運動を再創造するという任務が問題となる歴史的時点において、S Iは、〈平等者の陰謀〉*13であるしかなく、また、部隊を欲しない司令部にしかなりえない。新たなる革命へ向けて「北西への突破口」を見出し、開くことが問題なのであり、その革命は、大量の実行者を持つことはできず、これまでは革命の振動からは守られてきた中心領域、つまり日常生活の征服に押し寄せねばならない。われわれは雷管だけを組織する。自由な爆発はわれわれの手から永久に逃れる。それは、他のいかなるコントロールをも逃れるだろう。

生を自由に組織することを探求するグループに対して、旧世界がおそらく最もよく使う伝統的な武器の1つは、何人かの「スター」を他から区別して孤立させることである。現代社会の唾棄すべき通常の選択の大半と同じく、「自然」であるかのような外見を呈しているこのやり方に対して、われわれは自己防衛しなければならない。われわれの中でスターの役割を果たすことを望んだり、スターをあてにすることを望んだりする者は排除されなければならなかつた。そのことに議論の余地はない。第一、彼らは、野心を実現する手段を持っていないことがわかつた。そしてわれわれは、シチュアシオニストの問題設定の影響範囲から彼らが完全に姿を消すことを保証できる。ナッシュだけは別だが、われわれは彼をも始末し、彼はS I以外の者たちの間で有名になることだろう。現在のS Iのメンバー——その誰一人としてこのようなヒエラルキーのゲームをしたいと思っていない——にとって、この客観的危機はより現実的に現れてくるだろう。なぜなら、S Iは、より公的な段階に入っているからである。シチュアシオニストはナチストよりも多くの解釈やコメントの材料を提供するであろうが、その解釈やコメントはナチストの真の目的からもS Iの真の目的からもまったくかけ離れたものであることもありうる（ロベール・エステヴァル*14氏の著書『1945年以降のパリの文化的前衛』の最終章における、非常に個人的な解釈を見よ）。

文化と社会の古いモデルを復元しようとするスター化のプロセスに備えて、S Iへの加盟が必然的にもたらすさまざまな度合いの広告効果を考慮しなければならない。名前を明かしている

シチュアシオニストと地下活動を行っている同志との区別にすぎないにせよ、そのような非合法性は、この方法によってしかわれわれとの結び付きを発展させることのできない国々においては、避けられないものであり、他のいくつかの場合においては望ましくさえある。ただし、そのメンバーは、最も確かなメンバーのなかから選ばれるのであって、ナツシストの提案していたような、多かれ少なかれコントロール不能であったり、二重スパイであるような連中ではない、という条件のもとである。弾圧そのもののせいで、当然、われわれのうちのある者だけがより目立つことになるかも

しれない。しかし日常生活の反植民地闘争においては、指導者崇拜はありえないだろう（「唯一のヒーロー、それはS I」）。

われわれに実行者としてのシチュアシオニストを認めさせるのも、誤った立場をとらせるかもしれないのも、この同じ動きである。確実性を求め、現実の問題を愚かなドグマに変え、そこから資格や知的快適さを引き出したがり、そしてもちろん、この矮小化された確実性の名のもとに、自分たちにそれを与えてくれた者に対して、教えを若返らせるべく反抗するのも弟子の本性である。このようにして時とともに、受容のエリートたちが更新される。われわれはこのような連中は外に放っておきたい。なぜなら、われわれは、S Iの理論的問題設定を単なるイデオロギーに変えようと望む者すべてと戦うのだから。このようなことを望む連中は、S Iなど知らないで自分自身の生を直視するどんな人々と比べてもけるかに劣り、興味に欠ける。逆に、S Iがどこへ行こうとし

ているのか、その方向を理解した者は、S Iに加わることができる。なぜなら、われわれの語る乗り越えとはすべて、実際に現実のなかで見い出すべきものであり、われわれは全員で見いだしねばならないからである。S Iよりも過激であるという任務はS Iに属している。それは、S Iの永続性の第1法則ですらある。

怠惰から、われわれの計画を、すでに出来上がった、称賛すべき、批判の余地なき1つのプログラム、もはやそれに対して何ひとつすることのないようなプログラムに押し止めることができると考えている連中がすでにいる。心情的にさらにラディカルであると口に出して言う以外何も行動しない、すべてはS Iによって言われてしまい、それ以上のことはできないのだからというわけである。われわれは逆にこう言おう。われわれが切り開いた諸問題のうちで最も重要なものは、——S Iによって、または他の人々によって——まだこれから見い出すべきものであり、さらに、われわれがすでに見出したもののうち最も重要なものは、あらゆる種類の手段が欠けているせいで、いまだに発表されていない、と。欠如といえば、S Iが他の分野で（何よりも行動様式の分野で）素描した実験のための手段は、さらにいっそう不足している。しかし、例えば、出版の問題に限って言えば、今やわれわれは、これまでに発表したすべてのもののうち最も興味深いものを、われわれ自身の手で書き換えなければならないと考えてる。それによって何らかの誤りを正したり、いくつかの偏向の芽生え——その後、肥大化した帰結（たとえば、シチュアシオニスト的職業についてのコンスタントのテクノクラートの考え方、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第4号、24および25ページ〔本書 第2巻 73-77ページ〕参照）が見られた——を取り除くためではない。そうではなくて、われわれのテーゼのうち、最も重

要なものを訂正し改良することが問題なのだ。現在そのテーゼのおかげで得られた知識をはじめとして、われわれは、まさにそれらのテーゼの発展によってより遠くへ遠むことができたのであるが。そのためにはいくつもの再販が必要だが、S Iの現在の出版の困難はまったく解消されていない。

初期のシチュアシオニストの思想について、それがすでに歴史的獲得物であって、騒々しく偽物を作ったり無邪気に称賛すべき時が来たと考える者は、われわれの語る運動というものを理解していない。S Iは風を蒔いた。それは嵐を刈り取るだろう。

*1：ウーヴェ・ラウゼン 本書185－186ページの記事および172ページの訳注を参照。

*2：ヨルゲン・ナッシュ（1920－） デンマークの詩人・芸術家。S Iスカンディナヴィア・セクションのメンバー。1959年からS Iに参加したが、翌年、「ハウハウス・シチュアシオニスト」建設のための農場を手に入れ、1962年3月、アンスガー・エルデとともに、スウェーデンで分派宣言を行ったためS Iを除名される。

*3：ファザーケレイなる者の「詩」 ゴルドン・ファザーケレイの『ドローイング・詩のこと。ヨルゲン・ナッシュが序文を付し、1962年にハウハウス・シチュアシオニストの出版物として、スウェーデンで発表された。ファザーケレイについては不詳。

*4：『サ・シチュアシオニスト・タイムズ』 シチュアシオニストの国際版雑誌を名乗っているが、ドウボールらシチュアシオニストは参加せず、ヨルン、ドイツの〈シュプール〉派など、シチュアシオニストを除名された者たちや、アレシンスキー、カウロス・サウラ、ポリス・ヴィアン、ロベルト・マッタ、ウィフレド・ラムなどが参加した。ジャックリーヌ・ド・ヨングの編集で、1962年5月から64年9月まで全6号が出された。

*5：18か月間シチュアシオニスト・インターナショナルにいた人物 オランダのシチュアシオニストで1962年3月に除名されたジャックリーヌ・ド・ヨングのこと。

*6：ノエル・アルノー（1919－） 1941年、占領下のフランスでシュルレアリスムの非合法雑誌『ペンを持つ手』を発行し、レゾスタンスに加わる 戦後、ドトルモン、ジャガールらと、シュルレアリスムの政治化を図って『革命的シュルレアリスム』誌を発行するが、ブルトンからも、フランス共産党からも批判される。51年以降、コレージュ・ド・パタフィジックのメンバーとなり、〈潜在文学工房〉の設立にも加わる。「スターリン主義的パタフィジック」とは、共産党との関係とコレージュ・ド・パタフィジックとの関係を共に持つことを指している。

*7：ポリス・ヴィアン（1920－59年） フランスの作家。その活動は、ジャズ・トランペット奏者、作詞・作曲家、歌手、俳優、レコード会社のディレクター、自動車技師など、非常に多方面にわたる。文筆関係でも、小説・戯曲・詩の創作にとどまらず、音楽評論や、アメリカのミステリー・SFの翻訳なども手がけた。代表作とされる小説『日々の泡』（47年）は、発表時にはほとんど無視されたが、彼の死後の60年代に、驚異的なミリオン・セラーとなった。なお、ヴィアンは、1952年に、コレージュ・ド・パタフィジックに正式加盟している。

*8：ハイムラート・プレム（1934－78年） S Iドイツ・セクション、〈シュプール〉派のメンバー。62年2月に、他の〈シュプール〉のメンバーと共にS Iを除名。

* 9 : 『シチュアシオニスト革命 (シチュアシオニスティック・レヴォリューション)』 1962年10月から不定期に刊行されたS I スカンディナビア・セクションの機関紙。

* 10 : アンブロシウス・フィヨルド ヨルゲン・ナッシュとともにバウハウス・シチュアシオニストの活動に参加して活動したこと以外は不詳。

* 11 : カイウス・ナッシュ 第28代ローマ教皇 (283? - 296年) カイウスとナッシュの名を組み合わせた名。

* 12 : パトリック・オブライエン フィヨルドと同様、バウハウス・シチュアシオニストのメンバーであること以外は不詳。

* 13 : 〈平等者の陰謀〉 フランス革命期の最左派の革命家バブーフが1759年から96年に行った活動で、共和国3年に樹立したブルジョワ政権を人民の名において転覆しようとした「陰謀」。バブーフらは徹底した平等主義を唱え、土他の分配と平等な財産の分配、さらには私的所有権の廃止を求めて、秘密総裁政府を作り、秘密の工作員を区や軍隊の中に送り込んだが、96年5月に発覚して逮捕される。バブーフは翌年処刑されるが、この〈平等者の陰謀〉の「思想」はマルクスに強い影響を与え、その戦術と組織論はブランキ、レーニンに受け継がれた。

* 14 : ロベール・エスティヴァル フランスのレトリスト・批評家。イズーのレトリズムから分かれた自称ウルトラレトリストとして、1957年から59年まで雑誌『グラム』を刊行、レトリストのデュフレーヌ、エスティヴァル、ヴォルマン、ジャン＝ルイ・ブローの詩・批評・パンフレット類を掲載した。後には、CNRSの研究者となり、古書物学 (ビブリオロジー) なる学問を始めた。著書に『1945年以降のバリの文化的前衛』 (63年)、『総合的表意文字のハイパーグラフィック』 (64年)、『前衛』 (68年) 『構造主義から図式主義へ』 (83年)、『世界の書物——国際的書物学 (ビブリオロジー) 序論』 (83年)、『書物学』 (87年)。

訳者解題

「王さまのすべての家来（オール・ザ・キングズ・メン）」というこの論文の奇妙なタイトルは、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』に出てくるマザー・グースから採られている。ハンプティ・ダンプティ登場の場面でアリスが暗唱するその童謡は、「ハンプティ・ダンプティは塀の上に坐ってた、／ハンプティ・ダンプティはしたたかに落っこちた、／王さまのすべての馬と王さまのすべての家来でも、／ハンプティ・ダンプティを元に戻すことはできなかった」というものだが、シチュアシオニストは、アリスにその名前の意味を問うたり、さまざまな言葉に自己流の異なる意味を担わせたり、2つの意味を1つの単語に詰め込んだ「かばん語」を次々と発してアリスを混乱させるこのハンプティ・ダンプティに、「言葉の不服従」の革命的実践者を見出すのである。シチュアシオニストもまた、ある意味ではハンプティ・ダンプティのように、権力によって「偽の身分証明書」を与えられた言葉、「通行許可書」を押しつけられ、「生産」における役割を規定され、強制的に働かされる言葉に、サボタージュを行わせるが、そのサボタージュの戦略は、ハンプティ・ダンプティのそれとはひと味違う。S Iの言語戦略は、権力によって意味を切り縮められ、生を剥奪された実用的な「情報」の裏をかき、権力にコントロールされ、権力の力の源泉となっている一方通行の「コミュニケーション」を転覆することであり、そのために権力のコミュニケーション網に頼らない「直接的なコミュニケーション」をあらゆる場所で開始し、「コミュニケーションの評議会」を形成することである。この直接的なコミュニケーションは、別のところでは、「自らの拒否を内包するコミュニケーション」として、すなわち自らがスペクタクル化し権力と化すことのないような「優先的コミュニケーション」として称揚されていた（『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌 第7号「優先的コミュニケーション」）。シチュアシオニストが「詩」と呼ぶものは、出来事と言語が不可分に結びつくなかでしか誕生しない、この直接的でダイナミックな「優先的コミュニケーション」のことであり、それは、シュルレアリストの言うように「必要とあらは詩作品のない詩」というのを乗り越えて、「詩作品の必ずない詩」である。この直接的なコミュニケーションと化した詩において、言語は「働く」のではなく「遊ば」なければならないというのが、シチュアシオニストの考えである。「詩」作品を創造するのではなく、過去の「詩」作品を国家や書物の保管庫から解放し、直接的コミュニケーションのなかで再活用すること。死んだ言葉、あるいは商品として「引用」するのではなく、状況の構築のために「転用」することこそが問題なのである。

その具体例の1つを、ミシェル・ベルンシュタインの転用小説に見ることができるだろう。ベルンシュタインは、フランス近代小説の1つの起源であると言われるラクロの恋愛小説『危険な関係』をずたずたに解体して、その文章を並べ替え、シチュアシオニストの男と女の冒険を物語ったまったく別の物語にしてしまったが、その転用小説のタイトルは「王さまのすべての家来」ならぬ『王さまのすべての馬』というものであった。そして、ベルンシュタインのこの転用小説は、再び、1967年10月にストラスブール大学で撒かれたシチュアシオニストの転用コミ

ック形式のピラ『ドゥルッティ旅団の帰還』のなかに転用され、「ストラスプールのスキャンダル」に始まる67年秋から68年5月にかけてのフランスの学生反乱の開始を告げるのである。ハンプティ・ダンプティが開始した「言葉の不服従」の闘いは、まさに、「王さまのすべての馬と王さまのすべての家来」でも、「元に戻すことはできなかった」と言えるだろう。

現在の疎外を廃止するか維持するかのあらゆる闘いにおいて、言語の問題は中心的位置を占めており、闘争の場の全体と不可分の関係にある。われわれは、汚染された空気の中で生きているのと同じように言語の中で生きている。才気ある人々が考えているのとは逆に、言葉は遊ばない。言葉は、ブルトンが考えていたように、愛の営みなどしない。夢の中を除いては。言葉は、生の支配的組織化のために、働くのである。しかしながら、言葉はロボット化もしない。情報理論家には気の毒だが、言葉自体は「情報主義者」ではない。多くの力が言葉の中に現れ、計算の裏をかくこともあるのである。プロレタリア（この語の古典的な意味においても現代的な意味においても）が権力と結びついている関係と同様の関係をもって、言葉は権力と共存する。ほとんど四六時中使用され、フルタイムで、意味を一杯に、また無意味を一杯にこめて使われても、言葉はどこかで根底的に異質なものとどまるのである。

権力は言葉に偽の身分証明書を与えるだけである。権力は言葉に通行許可書を押し付け、生産における彼らの位置を規定し（ここでは言葉の一部は明らかに超過勤務をおこなう）、いねば給料明細を発行する。ルイス・キャロルのハンプティ・ダンプティ*1のきまじめさに感謝しよう。彼は、言葉の使い方を決定するあらゆる問題は、「だれが主人なのかを知ることに尽きる」と考える。そして、この分野の社会的パトロンである彼は、よく使う言葉には2倍支払うと表明するのである。また、言葉の不服従という現象、その逃亡、公然たる抵抗をも理解しよう。この現象は、社会における総体的な革命的危機の兆候同様、（ボードレールからダダリストやジョイスに至る）現代のエクリチュールのすべてに現れている。

権力のコントロールのもとでは、言語は、常に、真正の生きられた経験以外のものを指し示す。まさにここにこそ、全面的な異議申し立ての可能性がある。言語の組織化における混乱はあまりにひどくなっているので、権力の押し付けるコミュニケーションは詐欺か欺瞞であることが判明しつつある。萌芽期のサイバネティック権力が、今後は情報が唯一可能なコミュニケーションとなるよう、自分の制御する機械に言語を従属させようと努力しても無駄である。この領域においてすら抵抗が現れ、たとえば電子音楽を、もちろん曖昧で限界はあるが、言語の利益のために機微を転用して、支配関係を逆転させる1つの試みであると考えることができる。しかし、反対の力はそれよりはるかに一般的で、ずっとラディカルである。それは、古い芸術においても、現代の情報主義においても、一切の一方通行の「コミュニケーション」を告発し、一切の分解された権力を破壊するコミュニケーションを呼びかける。コミュニケーションのあるところ、国家はない。

権力は隠匿によって生きている。それは何も創造せず、回収する。権力が言葉の意味を創造す

るとしても、詩は存在せず、ただ実用的な「情報」のみがあるだろう。言語の中で、反対することは決して誰にもできず、どんな拒否も言語の外に存在する純粹にレトリスト的な拒否となるだろう。ところで、言語の革命的契機——それ自体、歴史の革命的契機や個人の生の歴史の革命的契機と切り離すことはできないものだが——でないとしたら、詩とはいったい何だろうか。

言語に対する権力の支配は、全体性に対する支配と同一視できる。全体性への直接的な指向をすべて失った言語のみが、情報を確立できる。情報とは権力の詩（秩序維持の反詩）であり、存在するものに対する、媒介されたトリックである。反対に、詩は、現実の中での直接のコミュニケーションとして、また、その現実の実際の変革として理解されなければならない。詩は、解放された言語以外のものではありえないし、自らの豊かさを取り戻し、記号を打ち破ることで、語と音楽、叫び、身振り、絵画、数学、事実を同時にカヴァーする言語以外のものではあり得ない。つまり、詩は、社会経済的構成のある段階において、生か生きられ、変革されうる豊かさのレベルに依存している。したがって、言うまでもなく、社会において詩が、その物質的基盤に対して持つ関係は、一方的従属ではなく相互作用なのである。

メキシコ革命、キューバ革命、コンゴ革命のいくつかの段階がはっきりと証明しているように、詩の再発見は革命の再創造と混じり合う。大衆が行動しながら詩に到達する革命的な時代の合間には、詩的冒険のサークルこそ、革命の全体が、未完成だが身近にある、不在の人物の影のような潜在的可能性として生き延びる唯一の場所でありつづける。したがって、ここで詩的冒険と呼ばれているものは、困難で、危険で、とにかく決して保証のないものである（実際のところ、それは、一時代のほとんど不可能な行為の総計なのである）。確信を持って言えることはただ、もはや一時代の詩的冒険でないものとは何か、認められ許可された偽の詩とは何か、ということだけである。したがって、シュルレアリスムが抑圧的な文化や日常生活を攻撃した時代には、自らの武器を「必要ならば詩作品のない詩」と定義できたように、今日、S1にとって、詩作品の必ずない詩が問題なのである。われわれが詩について述べることは、最新の形式的モダニズムに従うものであっても新作詩法の反動的で遅れた連中とは何の関係もない。実現された詩のプログラムとは、出来事とその言語を、同時に、不可分な方法で作り出すことにほかならない。

あらゆる閉じられた言語——若者たちのインフォーマルなグループの言語、今日の前衛が自己を探求し自己を定義する時に仲間内で用いる言語、かつて外部に向けて客観的な詩的生産物として伝達され、自らを「閉鎖詩語（トロバール・クルス）」*2とか「清新体（トルチェ・スティル・ヌオヴォ）」*3とか呼ぶことのできた人々の言語——は、ある種のコミュニケーション、相互的な認識、一致を、直接的に、透明なかたちで行うことを目的とし、実際にそのような成果を得ている。しかし、このような試みは、さまざまに孤立した状態にある限定的な集団内部でのことである。それらの集団が準備することのできた出来事、自分自身に与えることのできた祝祭も、非常に狭い範囲にとどまらざるをえなかった。革命的課題の1つは、直接的なコミュニケーションをあらゆる場所で開始するために、この一種のソヴィエト、コミュニケーションの評議会の連盟を作ることにある。そのような直接的コミュニケーションは、もはや敵のコミュニケーション網（つまり権力の言語）に頼らなくてもすむだろうし、そうして自分の欲望のままに世界を変えることができるだろう。

詩を革命に奉仕させることが問題なのではない、革命を詩に奉仕させるのである。そうしてはじめて、革命は自らの計画を裏切らずにすむのである。われわれは、もはや革命が存在しなくなったまさにその時に革命に奉仕しようとしたシュルレアリストの過ちを、繰り返さないようにしましょう。たちまち打倒されてしまった部分的革命の記憶に結び付いたシュルレアリスムは、たちまち、スペクタクルの改良主義、スペクタクルの支配的組織の内部で展開される、支配的スペクタクルのある種の形態だけを批判するものとなってしまった。権力は、スペクタクルのいかなる内部的改良や近代化のためにも、権力自身の解釈、権力がコードを握っている解読を押し付けるのだという事実を、シュルレアリストはないがしろにしたように思われる。

どんな革命も詩の中で生まれ、最初は詩の力によってなされた。これは革命の理論家たちが、これまでも今も見落とし続けている現象である確かに、革命や詩の古い把握の仕方にいまだにしがみついているなら、それは理解できないが、反革命の側は広くこれを感じ取ってきた。詩が存在するところでは、それは彼らに恐怖を抱かせるのである。焚書から純粋な文体的探求にいたるまで、彼らはさまざまな悪魔払いによって詩を厄介払いしようやっきになってきた。「未来のある」現実の詩の契機は、その都度、それ自身の目的に従って世界の全体と全未来の方向を変えたいとのぞむ。その契機が読く限り、その要求は妥協を知ることはありえない。そして清算されていない歴史の負債を再活用する。フォーリエ*4やパンチョ・ビラ*5、ロートレアモン*6やアストゥリアス地方の武装アナキストたち*7——その後継者たちは今では新しい形態のストライキを発明している——クロンシュタットやキールの水兵たち*8、そして世界中で、われわれと共に、あるいはわれわれとは別に、長期の革命のために闘いの準備をしている人々は皆、新たなる詩の密使でもある。

詩が空虚な場所として、消費社会の反物質であることは次第に明らかになりつつある。なぜなら、詩は、消費可能な物質ではないからだ（消費可能な物孤立した消費者からなる受動的な大衆にとっての等価物——を決める現代の基準によれば）。詩は、引用される時には、何ものでもない。詩は、転用され、再活用されるしかない。さもなければ、過去の詩に関する知識も、大学的思考のもつ総合的機能に属する犬学風の練習問題にすぎない。その時、詩の歴史は、歴史の詩からの逃亡にすぎない。歴史という語を、支配者たちの華々しい（スペクターキュレール）歴史ではなく、日常生活の、さらにその可能な広がり歴史、個々人の生とその実現の歴史と理解するならば。

ここで古い詩の「保管者（コンセルヴァトゥール）」の役割について、つまり国家が、まったく別の理由によってではあるが、文盲を消滅させるのと連動して詩を普及させる者たちの役割について、曖昧にしておいてはならない。この者たちは、博物館のあらゆる芸術の保管者のうち、ある特殊な事例を代表するにすぎない。世界には、普通、大量の詩が保存されている。しかし、それらの詩を再び生き、伝達し、活用する場所も、機会も、人も、どこにも存在しない。それは転用という状態でしか決して存在できない。なぜなら、古い詩の理解は、知識の喪失によっても獲得によっても変わってしまったからであり、また古い詩が実際に再発見されるたびに、特定の出来事とともに提示されることで、その詩にはまったく新しい意味が与えられるからである。とりわけ、詩が可能となる1つの状況は、過去のいかなる詩的失敗も修復できないだろう（この失

敗は、詩の歴史のなかに、転倒された形で成功として、また詩的モニュメントとして残っているものだから)。このような状況は当然、その状況そのものの詩の伝達、およびその詩が主権をもつチャンスへと向かって進んでゆくのである。

現代のスペクタクルによって作られた新たな文盲の大衆のために、専門家がレコードで朗読する古い詩の選集を復元する詩的考古学が生まれたが、それとほとんど同時に、情報主義者は、ただ命令だけを伝達するために、自由のあらゆる「冗長性」と闘おうと企てた。自動運動の思想家たちは、生活においても言語においても、変動するものを固定化し、排除することによって、自動的な理論的思考を公然とめざしている。彼らには問題が絶えなかった。例えば、情報の地球的規模での画一化と過去の文化の情報主義的見直しを確実にやり始めている翻訳機は、あらかじめ作られた彼らのプログラムに従い、1つの語の新たな意味付けや、過去の弁証法的両価性をまねがれていなければならない。したがって、言語の生——理論的理解の前進の1つ1つに結びついている。つまり「観念は改善される。言語の意味はそのことに与する。」——は公式の情報の機械的領域から追放されているのだが、同時に、自由な思想が、情報主義的警察の技術によってはコントロールできない非合法性をめざして組織されることも可能である。議論の余地なき信号と瞬間的な二分法的分類の研究は、既存の権力のめざす方向へとあまりにもはっきりと道むので、同じ批判の範疇に入ることになるだろう。錯乱した公式化においてもなお情報主義の思想家たちは、サイバネティクス的な国家の強化という、自分たちが選び、現在の社会の支配的勢力が作り出そうとする未来の、勅許状を待った愚鈍な先駆者として振る舞う。彼らは、現在揺るぎない地位を確保しつつある技術的封建制のすべての君主たちの家来である。彼らの道化ぶりには無邪気なところはない。彼らは王の道化なのだ。

情報主義と詩の二者択一はもはや過去の詩には関係ない。同様に、古典的革命運動の行き着いたどのような変種も、いかなる場所でも、生活の支配的組織化に直面した、現実の選択肢の1つとして当てにすることはもはやできない。まさに同じ判断からわれわれは、詩はそれが作られ消費されてきた古い形式においては、完全に消滅することを暴き、予期せぬ効果的な形式のもとに回帰するであろうことを予告する。われわれの時代には、もはや、詩的指令を書くことではなく、それを実行することが問題なのだ。

*1: ルイス・キャロルのハンプティ・ダンプティ 『鏡の国のアリス』の第6章に出てくる登場人物、訳者解説を参照。

*2: 「閉鎖詩語(トロバール・クルス)」 13世紀ごろの南フランスのトゥルバドゥールと呼ばれる吟遊詩人たちが用いた詩的言語で、誌形式や語彙の点で、民衆には近寄れず、自分たちの内でのみ通じる特殊な言語、マルカブリユ、レンボー・ドラングジュ、アルノー・ダニエルなどが実際にこの閉鎖詩語を用いた作品を作っている。

*3: 「清新体(トルチェ・スティル・ヌオヴォ)」 13世紀末から14世紀初頭にイタリアで起こった詩法およびその流派で、グイード・グニツェッリ、グイード・カヴァルカンティらの詩人がその中心。ダンテが『神曲』「煉獄篇」第24歌の中で名付けたその呼称の原義は「完璧にして斬新なスタイル」で、旧来の封建制社会や宮廷の枠内での「愛」ではなく、中世末期に北イタリアで勃興した自治都市の対等で自由な身分の男女の愛を、ラテン語ではなく民衆語を用い

て歌った。

*4: シャルル・フーリエ（1772－1837年） フランスの空想的社会主義者。

*5: パンチョ・ビラ（1878－1923年） メキシコの革命家。貧農の生まれで幼くして孤児になり、妹を迫害していた男を殺害したことから山回こもり、山賊の頭とる。1910年に独裁者ディアスに対して蜂起したマデロとともに革命闘争に参加、投獄されるが脱獄して米国に亡命。マデロ暗殺の報を聞いてメキシコに帰国、5万人から成る北部軍を指揮してメキシコ革命を推進した。

*6: ロートレアモン（1846－70年） フランスの詩人。ウルグアイのモンテビデオに生まれ、14歳でフランスに送られ中学に入るが、詳しい経歴は不明。散文詩『マルドロールの歌』（69年）とアフォリズム集『ポエシー』（70年）が全作品。その作品は既存の文章の「転用」ロートレアモン自身は「剽窃」と呼ぶ）を多用して成り立っている。

*7: アストゥリアス地方の武装アナキストたち 1934年10月、スペインのアストゥリアスの鉱業地帯での左翼反乱の中心となったアナキストのこと。この時、鉱山労働者のストが2週間にわたって戦闘的なストを展開したが、政府によるモロッコ兵部隊と外人部隊の投入によって多大な犠牲（逮捕者数千名、死傷者数万名）を払って壊滅させられた。この叛乱は、1936年からのスペイン革命と内戦への本稽古と見なされている。

*8: クロンシュタットやキールの水兵たち クロンシュタットは旧ソ連の港。1917年、クロンシュタットの水兵たちが巡洋艦〈オーロラ〉号に支援されて、ケレンスキー内閣への叛乱を行った、キールはドイツの北部の港湾都市で、第一次大戦末期の1918年10月29日、水兵の反乱が起き、その処罰をめぐり、ストやデモが生じ、ドイツ11月革命なことが有名である。

S I は君たちにそれをはっきりと言っていた！

「1961年1月1日以降『アルギュマン』誌に寄稿する者は誰であれ、それが将来のいかなる時であれ、いかなる場合にもシチュアシオニストの一員としては認められないと、評議会は決定した。このボイコット通知は、少なくとも今後何年にもわたる文化においてS I に保証されている——われわれにはそれがわかっている——重要性から、その威力を引き出すだろう。いかがわしい仲間に魅力を感じるなら、その当人が危険を冒して逆に賭けてみるがいい。」

(1960年11月6日のS I 中央評議会の決議。

『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 第5号、
13ページ、1960年12月、に掲載。)

「たぶん、われわれはいつか、あえて神の問題に取り組み、聖なるものと宗教に対して質問することになるだろう。」

(『アルギュマン』誌、第24号*1——1961年 第4四半期、
発行は1962年3月——の編集部の冒頭宣言)

「(……) このレベルの日常生活を植民地化された部門と形容することさえできる(……)。あらゆる手段を用いて欺かれ警察的なやり方で操作されている日常生活は、善良なる未開人のための一種の居留地である。彼らは現代社会の何たるかも知らずに、技術力の急速な増大と市場の強制的な拡大によって現代社会を動かす原動力となっているのである。」

(『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌、第6号、
22ページ、1961年8月)

「この日常生活が、要するに、実存の植民地化された領域、社会を動かしている良き未開人のための『保護区』と見なされて、あらゆる戦闘的な活動の敵になったという、この今日明白な事実。」

(『アルギュマン』誌、第25-26合併号、46ページ*2
1962年第1第2四半期、6月発行)

「『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』に発表されたすべてのテキストは、出典を明記しなくても、自由に転載、翻訳、翻案できる。」

(『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌 各号冒頭の反著作権の通告)

今や、われわれの判断は立証された。その判断とは、『アルギュマン』はもはや消えるしかない！

*1:『アルギュマン』誌、第24号 『アルギュマン』誌のこの号の特集は宇宙論問題で、コスタス・アクセロスなどのアルギュマン派の哲学者のほかに、ステファン・リュバスコなどの『プラネット』派のインチキ学者も寄稿している。

*2:『アルギュマン』誌、第25-26合併号、46ページ 引用は同誌に掲載されたアンドレ・フランカンの論文『日常の党』から。アンドレ・フランカンはかつてレトリスト・インターナショナルのメンバーとして活動していたことがある。

定義

—— J・V・マルティンの報告において、アントワープ大会で採択された

20世紀のデンマークに生きていたらしい作家ナッシュの名前から規則的に導き出された用語。主として、この時代の運動と革命理論に対する裏切りの試みによって知られているナッシュは、この運動によって、自分の名が、文化と社会の支配的条件に対する闘争における偽の同志すべてに適用可能な一般的名称として転用されるのを目にした。用例、「しかしナシズムは野の草のように、1日のうちに枯れてしまった」。ドイツ語ではナシズム。英語ではナシズム。イタリア語ではナシスモ。ナシスト——ナッシュまたは彼の主義を支持する者。転じて、行動または表現においてナシズム的意図や外見の部類に入るもの。ナシスティック——同一語源の俗語表現、おそらく英語の形容詞ナシスティックの影響でできたもの。ナシストリ——一般にナシズムをとりまく社会的環境。ナシストゥズという隠語は俗語表現である。

前章までの要約

今日、福祉国家は、快適さを提供する技術（ミキサー、缶詰、サルセル*1そして万人のためのモーツァルト）のかたちで、生き延びのための諸要素をわれわれに押しつけているが、そうした生き延びを維持するのに、最大多数の人々は、かつて今も、たえず全エネルギーを捧げ、まさにそのことによって、生きることを自らに禁じている始末である。

ところで、われわれの日常生活のための物質的設備の分配はことごとく組織化されているため、それ自体としては、本来なら日常生活を豊かに構築するのに資するはずのものが、われわれを贅沢なほど多くの貧困のなかに陥れる。さらに、それらのものは、快適の要素のそれぞれが解放の出で立ちと隷属の重荷をともなってわれわれの上に襲いかかってくるだけに、いっそう疎外を耐え難いものにするのである。まさにこうして、われわれは、解放としての労働の奴隷になることを余儀なくされているのである。

このような問題を理解するには、昼も夜も自明な事実と化した位階秩序化された権力に照らして、この問題を位置づけなければならない。しかし、アルコールが腐敗や成長を防ぐことによって胎児を護るように、位階秩序化された権力も何千年も前から人類を護っているのだと言うだけでは、おそらく十分ではないだろう。位階秩序化された権力は、専有〔＝排他的所有 *appropriation privative*〕の最も高次の段階を、しかも歴史的には、専有の始まりと終わりを表象しているのだということを、よりいっそう明確にせねばならない。専有について言えば、自然的疎外に対する闘争が社会的疎外を生じさせるのであるから、それを、存在の占有による事物の占有と定義することができる。

専有という概念には、根元的な諸矛盾が隠蔽されるように外見を組織することが含まれている。つまり、専有において、奉仕者は、主人の墮落した反映として自己を認識し、そうすることで、虚妄な自由を映し出している鏡の向こう側で、ますます服従の度を強めて一段と受動的になるように、自ら手を貸さなければならないのである。主人の方とは言えば、自らを、神あるいは超越性に神話的なやり方で完璧に奉仕する者に同一化しなければならないが、その場合の神や超越性とは、主人の権力が行使されている当の存在と事物の全体性を、抽象的な聖なる形で表象するものにほかならない。そのような主人の権力も、主人による自己放棄という美德があまねく信用を得ているだけに、なおさら現実的であり、異議を唱えられることも一層少ないのだ。実行者による現実的犠牲に、指導者による神話的犠牲が呼応し、一方が他方のなかで自らを否定し、奇怪（エトランジェ）なものが身近なものになり、その逆に、身近なものが奇怪なものになって、各自は逆の方向で自らを実現するというわけである。主人と奉仕者に共通に見られる疎外から、調和が生まれる。それは犠牲という概念に拠って根本的な統一性を持つことになった否定的な調和なのだ。この客観的な（そして倒錯した）調和を維持するものこそが神話であり、この神話という用語は、統一的な社会における外見の組織化を指し示すために使われてきた。統一的な社会とはすなわち、部族制であれ封建制であれ、奴隷制権力が神の権威を公式に戴き、聖なるものが

権力による全体性への統制を許しているような社会である。

ところで、もともと「自己の贈与」に基づいていた調和は、ゆくゆくは発展し自律して当の調和を破壊することになる1つの関係形式を包含している。このような関係は、細分化した交換（商品、金、製品、労働力……）に、すなわち自由についてのブルジョワ的な概念を基礎づけている自己の断片の交換に、依拠しているのである。この関係は、農業型の経済の内部で商業と技術が優勢になるにつれて生まれるのである。

ブルジョワジーによる権力奪取にともない、権力の統一性は姿を消す。聖なる専有は、資本主義のメカニズムのなかで世俗化する。権力の統制から解放されることによって、全体性は、再び具体的な、無媒介的なものになった。細分化の時代とは、到達不可能な統丁壮を奪回し、聖なるものを代用品で蘇らせてその中に権力をかくまおうとする一連の努力にほかならない。

革命の契機〔＝瞬間〕とは、「現実によって提示される一切のもの」がその無媒介的な表象＝代表（ルプレザンタシオン）を見いだす時のことだ。それ以外の時は、位階秩序化された権力は、魔術的で神秘的なその壮麗な装いからますます遠ざかりながら、全体性（これこそ、かつては現実にほかならなかったのだが！）から自分か詐欺師として告発されていることを忘れさせようと汲々としているのである。

14

ブルジョワ革命は、外見の神話的組織化に対して正面から攻撃をしかけたが、まったくその意に反して、統一的権力の急所だけでなく、いかなる形式であれとりわけ位階秩序化された権力の急所までもを攻撃した。避けることのできないこの過ちは、ブルジョワ精神の支配的な特徴の1つである罪悪感を説明するものなのだろうか。疑う余地がないのは、まさにそれが避けられない過ちであったということである。

過ち、と言うのは、まず何より、専有を隠蔽している嘘の不透明性がいったん破壊されると、神話は砕け散り、常軌を逸した自由と大いなる詩によってしか塞がれることのないような空虚をあとに残すからである。確かに、狂乱的な詩が今日までのところ、権力を打倒した例はない。それに成功しなかった理由は容易に説明がつくが、そうした詩の曖昧な徴は、傷痕をふさぐと同時に、銃撃が加えられたことを示してもいる。しかしながら、かつての叫びや言葉や身振り——これらの収集は歴史家と審美家にまかせておこう——が再び権力にくまなく血を流させるには、思い出を覆っている瘡蓋（かさぶた）を剥ぐだけで十分なのである。思い出の生き延びをどんなに組織しても、そうした思い出が生きたものと化し、溶け出しはじめるにつれて、思い出は忘却のなかに消し去られてしまうだろう。われわれが自分の日常生活を構築するなかで、生き延びが消し去られるのと同じことである。

避けることのできないプロセスとは、以下のものである。マルクスが示したように、交換価値の出現と、貨幣によるその象徴的置き換えとは、統一的世界のただ中に、潜在的で深い危機を開く。商品は、普遍性という性格（1000フランの紙幣は、私がこの金額で手にいれることの

できる一切のものを表象している)と平等という性格(同等な物どうしにこそ交換がなりたつ)を人間関係のなかに導入する。この「平等主義的な普遍性」は、部分的には、被搾取者にも搾取者にも気づかれることはないが、両者ともこの平等な普遍性のなかで互いを認知しあっている。彼らが向かい合い、ぶつかり合うのは、かつての貴族の場合とは違って、もはや出生と神の系統にまつわる神秘のなかではなく、理解可能な超趨性のなかである。この理解可能な超趨性とは〈ロゴス〉というもので、万人にとって了解の可能な法の総体——たとえ、そうした丁解か神秘に包まれたままであっても——である。その神秘には秘儀参加者——まずは司祭がいて、彼らは神秘的な神秘神学の古聖所(リンボ)のなかでこの〈ロゴス〉を維持しようとするが、やがて哲学者に、次に技術者に席を譲り、あわせて自らの聖なる使命の尊厳まで譲ってしまう。プラトンの共和国からサイバネティクス学者の国家になるのである。

こうして、交換価値と技術(「手のとどく所にある媒介」と呼ぶこともできるような技術)の圧力のもとで、神話はゆっくりと世俗化する。しかしながら、次の2つの事実を銘記しておく必要がある。

a 神秘的な統一性から生じた〈ロゴス〉が確立されるのは、その統一性のなかであると同様にそれに反してである。魔術的かつ類推的(アナロジック)な行動上の構造に、合理的かつ論理的な行動上の構造が重なり合い、前者の構造を否定すると同時に保存する(数学、詩学、経済学、美学、心理学など)。

b 〈ロゴス〉、すなわち「理解可能な外見の組織化」は、自律性を増すたびに、聖なるものから切り離され、細分化される傾向にある。その結果、〈ロゴス〉は統一的権力にとって二重の危険となる。聖なるものが金体性に対する権力の統制を表現しているということ、さらには、全体性を手に入れたいと欲する者はすべて、権力の仲介を経なければならないということは、すでに周知のとおりである。神秘家、錬金術師、グノーシス派を襲った禁止は、このことを十二分に証明している。このことによって、なぜ現在の権力が専門家を「庇護して」いるのかということも説明がつく。権力は、専門家に全幅の信頼を寄せているわけではないが、聖性を再び付与された〈ロゴス〉の宣教師を彼らのなかに漠然と認めているのだ。神秘的な統一的権力の内部に〈ロゴス〉の統一性を要求する対抗権力を打ち立てるためになされたさまざまな努力の証拠となるような徴は、歴史のなかに数多く見られる。神を心理学的に説明できるものにしたキリスト教の折衷主義、ルネッサンスの運動、宗教改革、そして〈啓蒙〉こそ、まさに、そうした徴に思われる。

すべての主人は、〈ロゴス〉の統一性を維持しようと努めつつ、統一性だけが安定した権力を作りあげるのだということを十分に意識していた。19世紀および20世紀における〈ロゴス〉の細分化は、彼らの努力が無駄であったことを証明しているかに見えるが、より子細に眺めてみれば、その努力もそれほど無駄ではなかった。原子(アトム)化の運動が全般化するなかで、〈ロゴス〉は粉々に砕け散り、専門化された諸々の技術(物理学、生物学、社会学、パピルス文書

研究、後は省略)となってしまうが、それと同時に、全体性に回帰しようとする必要性が、以前にもまして強くなっている。忘れぬようにしてもらいたいが、全体性の計画的運用が実地に行われるには、そしてまた、〈ロゴス〉が未来の統一的権力(サイバネティクス権力)による全体性の統制として神話の後を継ぐには、テクノクラートの全能な権力があれば、それで十分なのかもしれない。このような展望からすれば、百科全書派たちの夢(緊密に合理化された際限のない進歩)は、実現にいたるまでに、2世紀にわたって延期されるしかなかったのかもしれない。この意味=方向においてこそ、スターリン主義的サイバネティクス学者は将来を準備しているのだ。この展望に立つてこそ、平和共存が全体主義的な統一性に着手するのだということを理解しなければならない。自分はすでにそれに抵抗しているのだということを、誰もが意識すべき時である。

15

戦場はわかっている。要は、技術なき全体性をそなえたパタフィジシャン*2と全体性なき技術をもったサイバネティクス学者との政治的交接が正式に祝福される前に、戦いの準備をしておくことなのだ。

位階秩序化された権力の視点からすれば、神話の聖性を剥奪することが許容されたのは、〈ロゴス〉に、あるいは少なくとも、聖性を剥奪する〈ロゴス〉の諸要素に、聖性を再付与する場合だけであった。聖なるものを攻撃することは、同時に、——いつもながらの言いぐさではあるが——全体性を解放すること、したがって、権力を破壊することでもあった。ところで、ブルジョワジーの権力は、粉碎され、貧弱になり、たえず異議を唱えられながらも、ある曖昧さに依拠することによって、相対的な均衡を保っている。つまり、技術というものが、客観的には聖性を剥奪するものでありながら、主観的には解放の道具として現れるということである。聖性を剥奪することによってのみ、すなわち、スペクタクルの終焉によってのみ、現実的な解放が可能なはずであるのに、この場合の解放は、そのカリカルチュア、代用品、唆(そそのか)された幻覚なのだ。細分化された権力は、統一的な世界観によってあの世に投げ返されたもの(聖体奉挙のイメージ)を、明日の生活水準の向上(投一企のイメージ)のなかに書き込む。だが、その明日たるや、現在の汚物を乗り越えて燦然と歌い上げられてはいるものの、実は、これから生産すべき数多くのがらくたによって増殖した現在にすぎないのである。「神において生きよ」というスローガンから、「若々しく生きよ、長生きせよ」と言われるが、実際は「年老いるまで生き延びよ」ということにほかならないヒューマンニスムの定式に変わっただけである。

聖性を剥奪され細分化された神話は、その尊大さと精神性を失う。それは、貧しい形式となり、昔の特徴は保存してはいるか、それらを具体的で、粗暴で、触れることのできる仕方ですすようになる。神は演出家であることをやめたが、〈ロゴス〉が技術と科学という武器をたずさえて神の後を継ぐまでは、疎外の亡霊たちが、いたるところで物質化され、無秩序の種をばらまくのである。しかし、注意してもらいたい。それこそが、未来における秩序の前触れなのだ。これが

らは、演じる=遊ぶのはわれわれの方である。将来が生き延びという徴のもとに置かれるのを避けたいなら、あるいはさらに、不可能になった生き延びが根底から消え去ってしまう（人類の自殺という仮説）のを避けたいのなら、さらに、それとともに、日常生活の構築の実験も、明らかにそっくりそのまま消え去ってしまうのを避けたいなら、われわれが演じ=遊ばなければならない。日常生活を構築するための闘争の、死活に関わる諸目標は、位階秩序化されたあらゆる権力の急所である。一方を構築することは、他方を破壊することなのである。聖性の剥奪と聖性の再付与とが生み出す渦のなかで、われわれが何にもまして反対を表明する要素は、依然として次の3つである。すなわち、誰もがそのなかで自己を否定するスペクタクルとして外見を組織すること、私生活の基礎となっている分離（というのも、私生活とは、有産者と無産者との間の客観的な分離があらゆる面で経験され、反響している場だからである）、そして、犠牲である。言うまでもなく、これら3つの要素は、それに敵対する要素である参加、コミュニケーション、実現と同じく、互いに関連しあっている。それらのコンテクストである非-全体性（不足だらけの世界、あるいは、コントロールされた全体性の世界）と全体性についても、同じことが言える。

16

かつては神の超趨性（言い換えれば、聖なるものを戴いた全体性）のなかに溶解していた人間関係は、聖なるものが触媒として作用することをやめるや否や、上澄みのように澄んで固体のように固まってしまった。そうした人間関係の物質性が暴露されると、経済の気まぐれな法則が神の摂理の後を継ぐようになる一方で、神々の権力の下からは人間たちの権力が透けて見えてきた。各自が神の陽光の下で演じていたかつての神話的な役割に対応して、今日、多種多様な役割が生まれている。それらの役割にふさわしい仮面は、人間の顔はしているが、神話的犠牲と現実的犠牲との弁証法に従って自ら自分の現実生活を否定することを、役者に対して——端役に対しても——要請し続けることには変わりはない。スペクタクルとは、聖性を剥奪され細分化された神話にほかならない。スペクタクルは、権力の甲羅（本質的な媒介と呼ぶこともできるようなもの）を構成するが、その場合の権力は、ありとあらゆる叫びが押し殺されて調和するような不協和音のなかで、専有という自らの本性を隠蔽することがもはや不可能になるや否や、そしてまた、そうした本性によって多かれ少なかれ大量の不幸を万人に分配していることを隠蔽することがもはや不可能になるや否や、どのような攻撃に対しても脆くなってしまうのである。

聖性の剥奪に蝕まれ細分化された権力の枠組みのなかでは、すべての役割が貧しくなってゆく。それは、スペクタクルが神話に対して貧困を刻印するのと同じようなものである。それらの役割は、その仕組みとトリックをいとも不器用に漏らしてしまうので、権力の方が民衆の側からのスペクタクルの告発にそなえるために持つ手だてとしては、大臣を変えるように役者を変えたり、いかにもそれらしい、あるいは都合よく仕立て上げられた演出家たち（モスクワ、ウォール街、ユダヤ人支配、二百家族の代理人たち）に対する大虐殺を組織したりすることによって、それに上回る不器用さで、その告発を自ら率先して行うことしかない。このことはまた、人生の役

者や端役がみな、その意に反して大根役者に席を譲ったということ、様式が手法を前にして消え去ったということをも意味する。

かつて神話は、不動の全体性として、運動（その例は、不動性における達成であり冒険でもある聖地巡礼）を含んでいた。今では、一方で、スペクタクルが、全体性を1つの断片あるいは一連の断片（心理学、社会学、生物学、文献学、神話学におけるそれぞれの世界観（ヴェルタンショウウंक））に棲小化することによってはじめて全体性を把握し、他方で、そのスペクタクルは、聖性を剥奪する運動と聖性を再付与する試みとの合流点に位置している。したがって、スペクタクルが不動性を強いることができるのは、現実的な運動の内部において、それも、スペクタクルの抵抗にもかかわらず、それを変革するような運動の内部においてでしかない。細分化の時代には、外見の組織化によって、運動は不動の瞬間の線状の継起と化す（こうしたアプト式鉄道のような前進の完全な例は、スターリンの唯弁（ディアマト）〔唯物的弁証法（ディアレクティブ・マテマティック）〕である）。われわれが「日常生活の植民地化」と呼んだものの枠組みのなかでは、断片的役割の変化以外の変化は存在しない。市民、一家の父、恋人の一方、政治屋、専門家、職人、生産者、消費者と、次々に、多かれ少なかれ差し迫った都合にしたがって、その役割を変える。しかしながら、自分か支配されていると感じない支配者などいるだろうか。時に一杯喰わすことはあっても、一杯喰わされるのが常、という格言が万人にあてはまる！

細分化の時代は、少なくとも次の点について、いかなる疑いをさしはさむことも許さないだろう。つまり、日常生活こそ、全体性と、その全体性をコントロールするために全エネルギーを注いでいる権力とのあいだで戦いが交わされる戦場なのである。

位階秩序化された権力に対して日常生活の権力を要請することで、われわれが要求しているものは、すべてである。われわれは、家庭内の言い争いから革命戦争にまでおよぶ全面的衝突のなかに自らを位置づけ、生きる意志に賭けてきた。このことは、われわれが反一生き延び者として生き延びねばならないということの意味する。われわれが本質的に関心を抱いているのは、生き延びの氷河期のなかで生がほとぼしり出る契機〔＝瞬間〕である（それらの契機が、無意識的であれ理論化されたものであれ、歴史的なもの——革命の場合がそうであるように——であれ個人的なものであれ）。しかし、明白な事実を認めなければならない。われわれはまた、権力による全般的な圧制によっても、われわれの闘争や戦術などの必要によっても、（革命そのものの契機を除いて）そのような契機の流れに自由につき従うことを阻まれてもいる。このような契機を拡張し、その質的射程を明白なものにすることで、そうした契機に付き物の「誤謬の割合」を埋め合わせるための手段を見出すこともまた、同様に重要である。日常生活の構築に関してわれわれが述べるのが、文化と文化の垂流（『アルギュマン』誌の連中、すなわち、有給休暇を使って問いを発する思想家たち）によって回収されないでいるのは、まさに、シチュアシオニストの理念のどれもが、1日が台無しにされた24時間の生にならないよう、一瞬ごとに、何千もの人々が素描した身振りを、忠実に引き延ばしたものであるからだ。われわれは前衛なのだろうか。そうだとすると、前衛であるということは、現実と同じ歩調で歩むことにほかならない。

われわれは、知性ではなく、まさに知性の用途を独占するつもりなのだ。われわれの立場は戦略的なものであり、われわれは、いかなるものであれ、あらゆる衝突の中心にいる。〔量ではなく〕質こそが、われわれの抑止力なのである。誰かが、鳥肌がたつという理由で、この雑誌〔『アンテルナショナル・シチュアショニスト』誌〕をドブに捨てたとすれば、その人は、この雑誌を読んで生半可に理解し、われわれに補足趣意書を依頼するより、ずっと豊かな行為をしたことになる。そんな補足趣意書を手に入れても、自分が知的で教養のある人間だということを、すなわち、馬鹿だということを自分に証明できるだけだろう。われわれの使う言葉や文章が現実に対してまだ遅れをとっていることを、遅かれ早かれはっきりと理解しなければならない。罰の言葉で言えば、われわれの表現方法（美術センスの持ち主が、まんざら嘘でもないが、「神経にさわる秘教的テロリズム」と呼ぶもの）に、歪みや不器用さがあるのは、われわれがその点でもまた中心にいる、つまり、権力によって不法監禁された言語（大衆操作〔の言語〕）と解放された言語（詩）との間で限りなく複雑な戦いが行われている不分明な境界線上にいるからだということを、遅かれ早かれはっきりと理解しなくてはならないだろう。われわれとしては、一步遅れてわれわれの後をついてくる者より、われわれの言語はまだ本物の詩、すなわち、日常生活の自由な構築ではないがゆえに、辛抱しきれずにわれわれをはねつける者の方を好む。

思考に関わる一切のものがスペクタクルに関わっている。大部分の人間は、自己に目覚めることの恐怖——それは、権力によって巧妙に維持されている——のなかで生きている。操作とは権力の特殊な詩であるが、それは、その支配権（権力に属する物質的設備のすべて、すなわち、新聞、テレビ、ステレオタイプ、魔術、伝統、経済、技術——われわれが不法監禁された言語と呼ぶもの——が操作のもとにある）をあまりに遠くまで押し広げるので、マルクスが支配されない部門と呼んでいたものをほとんど解体させ、別の部門に置き換えることさえある（後出の、「生き延び者」のモンタージュ写真を参照）。しかし、生きた体験は、一連の空疎な形象にそう易々と還元されるわけではない。生を外面的に組織すること、すなわち、生き延びとして生を組織することに対する抵抗には、これまで出版されてきたどのような詩句や散文よりも、ずっと多くの詩が含まれており、文学的な意味での詩人とは、このことを少なくとも理解し、あるいは痛感した者のことである。しかし、そうした詩は、重大な脅威にさらされている。確かに、シチュアショニスト的な意味合いでは、こうした詩は権力によって何かに還元されたり、回収されるものではない（ある身操りが回収されるや否や、それはステレオタイプ、操作、権力の言語になってしまう）。だからといって、詩が権力によって包囲されていることに変わりはない。権力が、還元不能なものを包囲しつつ維持するのは、孤立という手段によってであるが、しかしながら、孤立には生命力がない。それを締め付ける鋏の二つの切っ先は、一方が、崩壊（狂気、病気、浮浪者化、自殺）の脅威であり、他方が、遠隔操作による治療（セラピー）である。前者は、死を可能にし、後者は、ただ単に生き延びることだけを可能にする（空疎なコミュニケーション、家族あるいは友人どうしの結合、疎外に奉仕する精神分析、医療、作業療法）。S Iは、遅かれ早かれ、治療として自己を定義しなければならなくなるだろう。われわれは、ただ権力（操作）だ

けによって仕組まれた偽の詩に対して、万人によって作られる詩を防衛する準備ができています。医者と精神分析家もまた、このことを理解することが重要である。さもないと、彼らは、いつの日か、建築家と、生き延びを説く他の使徒とともに、自分の行為の報いを受けることになるだろう。

18

いまだに解決されていない、いまだに乗り越えられていない敵対関係はすべて、弱まってゆく。そうした敵対関係は、まだ乗り越えられていない古い形式（例えば、文化のスペクタクルにおける反文化的芸術）に囚われたままであることによってしか、進化することができない。勝利していない、あるいは、——同じことだが——部分的な勝利しかしていないどんなラディカルな反対派も、少しずつ萎えてきて、改良主義的な反対派と化してしまう。細分化された反対派は歯車の歯のように、ぴったりと合わさって、スペクタクルや権力の機械を回すのである。

かつて神話は、あらゆる敵対関係をマニ数的二元論の元型のなかに維持していた。今日、細分化された社会のどこに元型を見いだすべきなのか。実際、かつての敵対関係は、明らかに価値を失い非攻撃的になったかたちで理解され、その思い出が、今日、外見を組織するための最後の首尾一貫した努力として出現している。それほど、スペクタクルは、混同と等価値とを標榜するスペクタクルになってしまっているのだ。われわれは、古い敵対関係のなかに含まれている全エネルギーを、近い将来のラディカルな闘争のなかに結集させることによって、そうした思い出の痕跡をすべて消し去る用意ができています。権力に封じられたあらゆる泉から、世界の地形を変更するような大河がほとばしり出ることもあるのだ。

敵対関係のカリカチュアである権力は、B・B〔フリジット・バルドー〕*3、ニューヴォー・ロマン、シトロエンの4馬力自動車、スパゲッティ、メスカール〔メキシコの蒸留酒〕、ミニスカート、国連、古典教育、国営化、熱核戦争、ヒッチハイクに対して賛成か反対か、態度を決めるよう各自に迫る。誰もが、どんなに細かなことについても意見を求められるが、それは、全体性に関して誰もが意見を持つことを、一段と巧妙に禁じるためである。こうした策動を戸口から戸口へと紹介して歩くセールスマンたちが自分自身の疎外に気づいていなければ、たとえどれほど不器用なものであっても、その策動は成功するだろう。無産者の大衆に押しつけられる受動性に、指導者や役者たちのいや増すばかりの受動性がつけ加わる。彼らは、市場とスペクタクルの抽象的な法則に従って、世界に対してますます効力を発揮しなくなった権力を享受している連中なのである。すでに、役者たちあいだに、ある反抗の兆しが現れている。B・Bやフィデル・カストロのように、宣伝から逃れようと試みるスターや、自分自身の権力を批判する指導者が生まれている。権力の道具は磨滅するものである。彼らが道具であることから抜け出して、自由であるという身分を要求するかぎり、彼らのことを考慮に入れておかねばならない。

奴隷の反乱によって権力構造が転覆の脅威にさらされ、超越性を専有のメカニズムに結び付けていたものが暴露されようとした時、キリスト教は、大がかりな改良主義を展開することに追い込まれた。その改良主義の中心であった民主主義的な要求は、奴隷を人間らしい生活の現実近づけること——そんなことは、占有をその排除の運動において告発するのではなければ、不可能であっただろう——ではなく、幸福を神話のなかに汲み取るような実存の非現実に近づけること（あの世のためにイエス・キリストを模倣すること）にあった。何が変化したのだろうか。あの世への期待は、燦然と歌いあげられる明日への期待になってしまった。現実的で無媒介的な生を犠牲にすることが、外見だけの生を犠牲にすることが、外見だけの生における虚妄にみちた自由を買い取るために支払う価格なのである。スペクタクルとは、強制労働が同意の上での犠牲へと変形する場のことなのだ。労働が生き延びへの脅しである世界では、「それぞれが、その働きに応じて」という定式ほどいかがわしいものはない。欲求が権力によって決定されている世界では、「それぞれが、その欲求に応じて」という定式ほど疑わしいものはないことも、言うに及ばない。自律的な——つまり部分的な——仕方で自らを定義するつもりで、実は、万事が未解決のままの否定性によって定義されているのだということに気づかないような構築はすべて、改良主義的プロジェクトの部類に入る。そのような構築は、動く砂の上に立っているにもかかわらず、あたかもコンクリートの滑走路の上にも立っているかのように言い張るのだ。位階秩序化された権力によって決定された文脈（コンテクスト）を侮り、誤認すれば、そうした文脈を強化することにしか行き着かない。逆に、いたるところで権力とそのスペクタクルに抗して姿を現しつつある自発的な行為は、あらゆる障害に対する警戒を怠ってばならず、敵の力とその回収手段を考慮した戦術を見出さなくてはならない。われわれが今から普及させようとするこの戦術、それは転用という戦術である。

見返りなしに、犠牲を理解することはできない。労働者は、自ら現実的犠牲を行うのと引き替えに、自らの解放の道具（快適な設備、アイデア商品（ガジェット））を受けとるが、その解放は純粋に虚構としての解放なのである。というのも、すべての物質的装備の使用法を握っているのは権力の側であり、権力が、道具もその道具を使う人々も、自分自身の目的のために利用するからである。キリスト教の革命とブルジョワ革命は、神話的犠牲、すなわち「主人の犠牲」を民主化した。今日では、秘儀に通じている者の方が多数派で、彼らは自分の部分的な知の全体を万人に供することによって、権力のかげらを拾い集めている。彼らは、もはや「秘儀参入者」という名ではなく、いまだ「〈ロゴス〉の司祭」という名でもない。ただ単に、専門家と名付けられているだけである。

スペクタクルのレベルでは、専門家の権力は異論の余地がない。サイコロ賭博の客もフラン

ス郵政省の職員も、自分の2CV車のメカニクスの凝り方について1日中こと細かに話す時には、どちらも専門家に同一化するし、生産部長が、単能工を手なずけるためにどれほどそうした同一化を活用しているかも、周知のことである。テクノクラートの真の使命とは、とりわけ〈ロゴス〉を統一することにあるだろう。もっとも、細分化された権力のさまざまな矛盾の1つによって、彼らが惨めな孤立のなかに閉じ込められ続けるのでなければの話だが。彼らは、自分たち相互の干渉から疎外されているため、細分化された1つの事柄のすべてには精通しているが、何も実現できないのである。原子論の技術者や、戦略家や、政治の専門家などが、核兵器に対してどんな現実的な統御力を行使しうるというのか。権力が、権力に反対して姿を現しつつあるあらゆる行為に対して、どんな絶対的な統御力を押しつけることを望めるというのか。舞台に登場する役者はあまりに数多いため、混沌だけが主人として君臨しているのだ。「秩序は君臨してはいるか、統治していないのである」（『アンテルナショナル・シチュアショニスト』誌 第6号の論説）。

世界を操作し変形させる道具の製作に参加する限りにおいて、専門家は、特権者たちの反抗を誘発する。現在までは、このような反抗はファシズムと呼ばれてきた。それは、本質的に、オペラ的な反抗であって、そこでは、長い間のけ者にされていた役者や、自分かますます自由ではなくなっていると考えていた役者たちが、突然、主役を要求する。ニーチェ*4は、ヴァーグナー*5のうちにそのような反抗の先駆者を見なかつたらどうか。臨床医学的に言えば、ファシズムとは、スペクタクル世界のヒステリーが頂点にまで昂まったものにほかならない。まさにそのような頂点において、スペクタクルは、瞬時のうちに統一性を確保しつつも、同じその機会に、自らの根源的な非人間性をさらけ出すことになる。スペクタクルのロマン土族的な危機を構成するファシズムとスターリン主義を通して、当のスペクタクルは、自らの本性を暴露するのだ。つまり、スペクタクルは、1つの病なのである。

われわれは、スペクタクルの中毒にかかっている。ところで、解毒治療（これを、われわれの日常生活をわれわれ自身で構築すること、と翻訳せよ）に通じるあらゆる要素は、専門家の手に握られている。それゆえ、専門家はみな、もちろん異なる理由でだが、最高度にわれわれの興味を引く。例えば、絶望的な場合がある。つまり、われわれは、権力の専門家や指導者に彼らの錯乱ぶりがどこまで及んでいるのか、その範囲を示そうとはしないだろう。逆に、われわれは、滑稽なものであれ不名誉なものであれ、とにかく狭い役割に囚われている専門家たちの恨みを考慮する用意ができています。とは言え、われわれの寛容にも限度がないわけではないことは、認めてもらえるだろう。われわれの努力にもかかわらず、もし彼らが自分自身の日常生活を植民地化する操作をでっち上げ、執拗に自らの後ろめたさと苦悩を権力に奉仕させるのならばもし彼らが、真の実現よりも、位階秩字のなかの虚妄な表象の方を好むのならば、もし彼らが、自分の専門（自分の絵画、自分の小説、自分の方程式、自分の社会測定法（ソシオメトリー）、自分の精神分析、自分の弾道学の知識）をこれ見よがしに振りかざすのならば、最後に、もし彼らが、彼らの専門に関して、S Iと権力の側だけがその使用法を握っていること知りつつ——それに、ほどなく、彼らはそれをもはや知らないはずはないとみなされるだろうが——へそれでもなお、彼らの無気力に力を得た権力から、権力に奉仕するために今まで選ばれてきたがゆえに、権力に奉仕

することを選ぶのであれば、その時には、彼らがくたばらんことを！ これ以上に寛大な態度を示すことはとてもできまい。どうか彼らがこのことを理解できるよう、とりわけ、指導的な立場にない役者たちの反抗は、これからはスペクタクルに対する反抗（「シチュアシオニスト・インターナショナルと権力」を参照）と結びついていることを彼らが理解できるよう、願おうではないか。

*1：サルセル パリの北の郊外の町。1958年から1961年にかけて、パリ周辺では初めての大規模な団地が建設されたが、多くの批判を巻き起こし、問題のあるベッド・タウンのシンボルとなった。

*2：パタフィジシャン パタフィジシャンの本来の意味は、フランス20世紀初頭の詩人アルフレッド・ジャリの唱えたパタフィジック（形而上学（メタフィジック）を超える学問で、「個と例外を研究し世界を多面的に把握するための想像力による解決の学問」）の実践者として、1948年にシュルレアリストのレーモン・クノーらが1948年に結成した結社〈コレージュ・ド・バタフィジック〉のメンバーのことであるが、ここでは、本来の意味に加えて、通常の現象を通常とは逆の観点から見て表現する「超形而上学者」というニュアンスも付け加えて用いられている、例えば、「木の実が地面に落ちる」ことを、「地面が上昇して木の実に衝突する」と言うのがパタフィジシャンである

*3：B・B〔ブリジット・バルドー〕（1934－） フランスの女優。パリのブルジョワ家庭に生まれ、モデルを経て、1952年に映画デビュー。56年の『素直な女』でBB（ベベ）時代を作り、フランスを代表するグラマー女優となる。他の出演映画に『可愛い悪魔』（58年）、『私生活』（61年）など。

*4：フリードリッヒ・ニーチェ（1844－1900年） ドイツの哲学者、ギリシャ悲劇、ショーペンハウアーの意志哲学の影響を受け、リヒャルト・ヴァーグナーの総合芸術的文化運動に共鳴。普仏戦争に従軍後健康を損ね、大学を辞し、狂気のなかで死んだ。著作に永劫回帰思想による生の肯定と超人の理想を説く『善言の彼岸』（88年）、権力意志を生を原理とする『権力への意志』（84－88年）など。

*5：リヒャルト・ヴァーグナー（1813－83） ドイツの作曲家・楽劇の創始者。44年『タンホイザー』、48年『ローエングリン』などのオヘラで成功を収めた後、49年ドレスデン暴動に参加して、その失敗後バクニンとともに亡命。スイスで「芸術と革命」、『未来の芸術作品』などの論文で総合芸術論を展開、以降、4部作『ニーベルングの指環』（53－74年）、『ニュルンベルグのマイスタージンガー』（67年）、『パルジファル』（82年）等の楽劇を完成、ドイツロマン派音楽の頂点を極めた。

ルンペンプロレタリアートに対して方々から浴びせかけられる呪詛の言葉は、ブルジョワジーがルンペンプロレタリアートを利用してそのやり方に起因する。ルンペンプロレタリアートは、ブルジョワジーに対して、権力のための調整役であるのに加えて、警官、たれ込み屋、手先、芸術家といった、いかがわしい治安部隊にもなっていたのである。しかしながら、そのかげには、労働の社会への批判が、かなりラディカルな度合いで存在する。ルンペンプロレタリアートが公言する下男と親方への軽蔑には、疎外としての労働へのもっともな批判も含まれているが、この批判は、今までまじめな考察の対象になったことはなかった。その理由は、ルンペンプロレタリアートがさまざまな曖昧さが交錯する場であったからであり、さらにまた、自然的疎外に対する闘争と快適さの生産とが、19世紀と20世紀初頭においてもまだ、もっともな口実に見えていたからでもある。

消費財の豊かさとは、生産における疎外の別の一面でしかないことが、ひとたび知れわたると、ルンペンプロレタリアートは新たな次元を獲得する。つまり、彼らは、組織された労働に対する軽蔑を解き放つのである。この軽蔑は、「福祉国家」の時代に、少しずつ、要求の比重を増してきたが、この要求を指導者だけがいまだに認めようとしていない。権力が浴びせかけるさまざまな回収の試みにもかかわらず、日常性に関して、すなわち日常生活を構築するために実行されてきたあらゆる実験は、現在のところ、疎外的な労働に対する批判と、強制的な労働に屈することへの拒否によって具体化されてきている（そのような実験は、封建制権力のもとでは制限され、一部の者だけに許されていたものだが、その権力が壊滅して以来、非合法的な歩みをたどってきた）。その結果、新しいプロレタリアートは、自らを「強制労働に反対する戦線」という否定の力において（ネガティブ）定義する傾向にあり、この戦線のもとに、権力による回収に抵抗するすべての者が結集している。これこそまさに、われわれの行動の場を決定するもの、われわれが権力の狡知に反対して歴史の狡知を働かせる場所を決定するもの、われわれが、組織された労働と組織された生を——意識的か否かはともかく——拒否する労働者（冶金工であれ芸術家であれ）に賭け、権力の命令のもとで労働することを——意識的か否かはともかく——受け入れる労働者に反対する闘争の場を決定するものなのである。こうした展望においては、オートメーション化と新しいプロレタリアートの意志によって、労働が専門家だけに委ねられ、経営者と官僚が一時的な奴隷身分にまで落とされるような過渡期を予見するのも、あながち独断とは言えない。オートメーション化が広く普及するようになれば、「労働者たち」は、機械を監視する代わりに、サイバネティクスの専門家に関心を持って見守ることになるかもしれない。この専門家は、ある種の生産を増大させるだけの役割に還元された専門家であるが、その生産とは、力と展望の転倒によって生き延びよりも生を優先させることに従うために、〔経済の〕優先部門であることをやめてしまった生産なのである。

かつて神は、統一的社会を定義する座標軸にほかならない空間と時間の保証人であった。神は

、すべての人間に共通の参照点だったのだ。神のなかで諸々の存在が自らの運命と1つになっていたように、神のなかで空間と時間は1つにまとまっていた。細分化の時代には、人間は時間と空間の間で引き裂かれたままであり、どのような超越性も、中央集権化された権力の媒介によってこの時間と空間を統一しに来ることはない。われわれは、どんな参照点もどんな座標軸も欠いた、乖離した時-空間のなかで生きている。すべてがそうするように誘っているのに、まるで、われわれはわれわれ自身と接触してはならないかのようである。

人が自分を作りあげる場と、人が自分を賭ける時間が存在する。日常生活の空間は、人が現実的に自己を実現する場であるが、あらゆる操作にとり巻かれている。われわれを規定するのは、われわれが実際に自己を実現する狭い空間であるにもかかわらず、われわれはスペクタクルの時間のなかで自己を規定している。あるいは、さらに言えば、われわれの意識はもはや、神話と神話-のなかの-個々の-存在に対する意識ではなくなり、スペクタクルとスペクタクル-のなかの-個々の-役割に対する意識なのである（私は前のところで、あらゆる存在論が統一的権力に対して持っている絆のことを指摘したが、ここで存在論の危機は細分化への傾向とともに現れるということ喚起しておいたほうがよいだろう）。あるいは、別の言葉でそれを表現すれば、あらゆる存在とあらゆる事物が位置する時-空間の関係のなかで、時間は想像のもの（同一化の場）となってしまった。一方、空間は、われわれが想像のもののなかで自己を規定し、想像のものがわれわれを主観性として規定するにもかかわらず、われわれを規定しているのである。

今のわれわれの自由は、権力の言語によってわれわれが名付けられている抽象的な時間性の自由のことであり（それらの名前とは、われわれに割り当てられた役割のことである）、その際、われわれに選択の余地として残されているのは、公式に同意語として認知されるような同意語を自分で見つけることぐらいである。逆に、われわれの本当の自己実現のための空間（われわれの日常生活の空間）は沈黙に支配されている。生きた体験の空間を名付ける名は、詩のなかにしか、すなわち、権力の支配から解放された言語のなかにしか存在しないのである。

22

統一的権力は、個人の実存を集団的意識のなかに解消しようと努めてきた。その結果、社会を構成するそれぞれの単位は、油のなかに浮きながら重量はまったく一定の分子のように、主観的に定義されることになった。各自は、ただ神の手だけが、容器を揺り動かし、すべてを神の計画のために用いているという自明の理のなかに、自分が浸っていると感じとらねばならなかった。当然、この神の計画は、個々の人間の理解を越え、崇高な意志の流出物として押し付けられ、ほんのわずかな変化にも神の意味を与えるものであった（しかも、〈四界〉、〈運命の歯車〉、神々から遣わされた試練などの、どんな動揺も、調和に向かって昇り降りする1本の道でしかない）。集団的意識と言えるのは、それが、それぞれの個人にとっても万人にとっても同時に存在し、神話に対する意識であると同時に神話-のなかの-個々の-実存に対する意識でもあるという意味である。幻想の力は非常に強力なので、本当に生きられた生も、生ではないものの中

から、その意味を汲み取るほどである。その結果、聖職者は、生が純粋な偶然性、あさましい物質性、無益な外見、そして、神話による組織化を逃れるにつれてますます墮落してゆく超越性の最低の状態にまで切り縮められているとして、生を断罪するのである。

かつて神は、統一的社会を定義する座標軸にほかならない空間と時間の保証人であった。神は、すべての人間に共通の参照点だったのだ。神のなかで諸々の存在が自らの運命と1つになっていたように、神のなかで空間と時間は1つにまとまっていた。細分化の時代には、人間は時間と空間の間で引き裂かれたままであり、どのような超越性も、中央集権化された権力の媒介によってこの時間と空間を統一しに来ることはない。われわれは、どんな参照点もどんな座標軸も欠いた、乖離した時-空間のなかで生きている。すべてがそうするように誘っているのに、まるで、われわれはわれわれ自身と接触してはならないかのようである。

人が自分を作りあげる場と、人が自分を賭ける時間が存在する。日常生活の空間は、人が現実的に自己を実現する場であるが、あらゆる操作にとり巻かれている。われわれを規定するのは、われわれが実際に自己を実現する狭い空間であるにもかかわらず、われわれはスペクタクルの時間のなかで自己を規定している。あるいは、さらに言えば、われわれの意識はもはや、神話と神話-のなかの-個々の-存在に対する意識ではなくなり、スペクタクルとスペクタクル-のなかの-個々の-役割に対する意識なのである（私は前のところで、あらゆる存在論が統一的権力に対して持っている絆のことを指摘したが、ここで存在論の危機は細分化への傾向とともに現れるということをお喚起しておいたほうがよいだろう）。あるいは、別の言葉でそれを表現すれば、あらゆる存在とあらゆる事物が位置する時-空間の関係のなかで、時間は想像のもの（同一化の場）となってしまった。一方、空間は、われわれが想像のもののなかで自己を規定し、想像のものがわれわれを主観性として規定するにもかかわらず、われわれを規定しているのである。

今のわれわれの自由は、権力の言語によってわれわれが名付けられている抽象的な時間性の自由のことであり（それらの名前とは、われわれに割り当てられた役割のことである）、その際、われわれに選択の余地として残されているのは、公式に同意語として認知されるような同意語を自分で見つけることぐらいである。逆に、われわれの本当の自己実現のための空間（われわれの日常生活の空間）は沈黙に支配されている。生きた体験の空間を名付ける名は、詩のなかにしか、すなわち、権力の支配から解放された言語のなかにしか存在しないのである。

23

神話の聖性を剥奪し、神話を細分化しながら、ブルジョワジーは、自分たちの要求（思想の自由、報道の自由、研究の自由などの要求、教条の拒否、を想起すること）の筆頭の意識の独立をかかげてきた。その結果、意識は多少なりとも神話を反映していた意識であることをやめる。それはスペクタクルのなかで次々と果たされる役割に対する意識となるのである。ブルジョワジーが何よりもまず要請したものは、組織されたスペクタクルのなかでの役者と端役の自由であるが、そのスペクタクルは、もはや神や、神に仕える警官や司祭によって組織されるのではなく

、自然法則と経済法則によって組織されている。これらの法則は、「気まぐれで冷酷な法則」だが、われわれは、その法則に再び警察と専門家が奉仕するのを見いだすのである。

神は、無用になった包帯のように、引きはがされてしまい、傷はぽっかり口をあけたまま残った。確かに、包帯は傷口が閉じるのを妨げていたが、それは苦痛を正当化し、モルヒネ数回分に匹敵する意味をその苦痛に与えていた。今では、苦痛はもはや正当化されなくなり、モルヒネも高くつく。〔包帯と傷口との〕分離は、具体的なものとなったのである。誰でも、それ〔＝傷口〕を指摘することができ、薬に関して、サイバネティクス社会がわれわれに提案できるものと言えば、壊疽と腐敗の見物人（スペクタトゥール）、生き延びの見物人になることだけである。

ヘーゲルが語っている意識のドラマも、それ以上に、ドラマの意識である。ロマン主義は、身体から引き抜かれた魂の叫びとして鳴り響いているが、その苦痛は、聖なる全体性の崩壊とすべてのアッシャー家の崩壊〔ポーの短編小説の題名〕に直面して誰もが再び孤立しているだけに、いっそう鋭いものとなる。

24

全体性とは、実現というかたちでしかその運動のなかに主観性を組み込むことができないような、客観的現実のことである。日常生活の実現でないものはすべて、生き延びが凍結（冬眠）されて、断片に切り分けられるスペクタクルに行きつく。本物の実現は客観的現実のなかにしか、全体性のなかにしか存在しない。その他のものはすべて、カリカチュアなのである。スペクタクルのメカニズムのなかで行われる客観的（オブジェクティブ）実現は、権力によって操作された物の成功でしかない（これが、有名芸術家やスターや名士録に載っている人物たちの言う、「主観性のなかでの客観的実現」というものである）。外見の組織化のレヴェルでは、どんな成功も——さらに、どんな失敗も——、あたかも唯一の成功か唯一の失敗であるかのように、情報によって、ステレオタイプになるまで水増しされ、通俗化される。権力の下す判決は圧力に屈したものであるのに、今まで、権力は自分を唯一の裁判官だと信じてきた。彼らの基準は、スペクタクルを受け入れ、そのなかで役割を果たすことに満足している者にとってしか価値がない。この舞台の上では、もはや芸術家は存在せず、端役だけが存在するのである。

25

かつて私生活（ヴィ・プリヴェ）〔＝剥奪された生〕の時－空間は、神話の－空間のなかで調和を保っていた。この倒錯した調和に呼応するのが、フォーリエ*1の言う普遍的な調和である。神話が、聖なるものに支配された全体性のなかに、個人的なものや部分的なものを包み込まなくなるや否や、個々の断片が全体性に格上げされる。事実、全体性に格上げされた断片とは、全体

主義的なものである。私生活を構成する乖離した時 - 空間のなかでは、時間は、スペクタクルの自由にほかならない抽象的な自由という様式に基づいて絶対化され、自らの乖離そのものを通して、私生活の空間的絶対条件、すなわちその孤立とその狭さを強固なものとする。疎外的スペクタクルのメカニズムは、非常に大きな力を発揮するので、私生活は、スペクタクルを欠いたものとして定義されるまでになり、〔自分が〕スペクタクルの諸範疇にもさまざまな役割にもあてはまらないという事実が、余分に加えられた剥奪として、また、権力が日常生活を取るに足りない身振り（座る、体を洗う、ドアを開ける）に切り縮める口実にする不安として、感じられることになるのである。

26

生きた体験に自らの規範を押しつけるスペクタクルの源は、生きた体験のなかにある。スペクタクルの時間は、次々と変わる役割のかたちで生きられ、本当に生きられた体験の空間を客観的な無力の場にするが、他方で、それと同時に、客観的な無力、つまり、専有の操作に起因する無力は、スペクタクルを潜在的な自由の絶対条件にする。

生きた体験のなかから生まれた諸要素は、スペクタクルのレベルにおいてしか認識されない。そのなかで、これらの要素はステレオタイプのかたちで表現されるが、一方、そのような表現は、本当に生きられた体験のなかで、そしてそのような体験によって、一瞬ごとに異議を唱えられ、打ち消される。生き延び者——ニーチェ*2が「小人」とか「最後の人間」と呼んでいた者たち——のモンタージュ写真があるとすれば、それは次のように理解された可能と不可能の弁証法のなかでしか考えられない。

a スペクタクルのレベルで可能なもの（抽象的な役割の多種性）は、本当に生きられた体験のレベルでの不可能なものを強化する。

b 不可能なもの（すなわち、現実には生きられた体験に対して、専有が押しつける限界）は、抽象的に可能なものの場を決定する。

生き延びには、このように2つの次元がある。こうした還元を抗する勢力として、あらゆる人間にとっての問題を構成するもの、つまり、生き延びと生の弁証法を強調しうるような勢力とは何かあ。S I がこれまでその賭けてきた明確な勢力によって、生き延びと生という対立物を乗り越えることが可能になり、空間と時間が日常生活の構築のなかで結び合わされることになるのか、それとも、生も、生き延びも、緩和された対抗関係のなかで動脈硬化を起こし、最終的には混ぜ合わされ、貧困に落とし込まれることになるのか、そのどちらかである。

生きられた現実、細分化され、さまざまなカテゴリ——生物学のものであれ、社会学のものであれ、あるいはそれ以外のものであれ——に分けてレッテルを貼られる。これらのカテゴリは、コミュニケーション可能なものに属するが、そこでコミュニケーションされるのは、本当のかたちで生きられた内容を取り除かれた事実でしかない。この点で、専有の客観的なメカニズム（容認—排除のこと、第3節を見よ）のなかに各自を閉じ込める位階秩序化された権力は、主観性を独裁的に支配するものでもあるのである。まさに主観性に対する独裁者として、この権力は個人の主観性それぞれに対して自己を客観化するよう、すなわち、権力によって操作される物〔=客体〕となるよう強いるのである。そこには、極めて興味深い弁証法があるが、それについては、より子細に分析することが望ましいだろう（主観性のなかでの客観的な実現——権力による実現——と客観性のなかでの客観的な実現——日常生活を構築し、権力を破壊する実践に含まれるもの——とを想起すること）。

ところで、諸々の事実は、コミュニケーション可能なものの名において、抽象的な普遍性の名において、各自が逆の方向で自己実現するような倒錯した調和の名において、その内容を剥奪される。このような展望において、S Iはサド、フーリエ、ルイス・キャロル、ロートレアモン、シュルレアリスム、レトリズムを経由する異議申し立ての線上に位置する。少なくとも、S Iの最も知られていない潮流——最も極端であった渦流——においては、そうである。

全体性に格上げされた断片においては、どの部分も、それ自体が全体主義的である。個人主義は、感性、欲望、意志、知性、良い趣味、下意識そして自我についてのあらゆるカテゴリを絶対として扱ってきた。今日では、社会学が心理学上の諸カテゴリを豊かなものになっているが、役割にいくらヴァリエーションを加えても、同一化という反射運動の単調さをいっそう強調することにしかない。「生き延び者」の自由は、自分をそれに切り縮めることを「選択」した、抽象的な構成要素を引きうけることにあるだろう。1度、現実的実現をすべて遠ざけてしまえば、後に残るのは、社会心理学のドラマツルギーだけである。そこでは、内面性は、身につけた衣を日常的な見せびらかしのなかに吐き出すための排水口の役目を果たすのである。生き延びは、機械的に複製される思い出という様式で組織された生の、最も完成された段階なのである。

現在まで、全体性へのアプローチは偽造されてきた。人間と自然の間に、まるで不可欠な媒介のように、権力が寄生的に挟み込まれる。ところで、ただ実践だけが、人間と自然との間の関係を基礎づける。実践こそが、神話と神話の代用品によって首尾一貫性が表現されようとしている嘘の層をたえず打ち破るのである。たとえ疎外されたものであっても、実践とは、全体性との接触を維持するものである。実践は、自らの断片的な性格を露わにしつつ、同時に、現実的全体

性（現実）を暴露する。実践は、自己とは逆のものを通して、すなわち断片を通して、自己を実現する全体性のことなのである。

実践の展望においては、どんな断片も全体性である。実践を疎外する権力の展望においては、どんな断片も全体主義的である。権力の努力の真剣さを過小評価してはならないが、サイバネティクス権力が実践を神秘的なかに包み込むために発揮する努力を阻止するには、これだけで十分であるにちがいない。

実践であるものはすべて、われわれの計画に含まれている。実践の疎外的部分も、権力の不純性も合わせてそうである。だが、われわれは濾過することができる。われわれは、隷属化のためのさまざまな策動を明らかにするとともに、拒否の身振りの持つ力とその純粋性をも明らかにするだろうが、それは、マニ教的二元論の展望（ヴィジョン）のなかで行われるのではない。それは、敵どうしが、いたるところで、あらゆる瞬間に、夜の闇のなかで、癒す薬のない不安のなかで、接触を求めて行き当たりばったりで格闘しているあの戦いを、われわれ自身の戦略を通して進展させることによって行われるのである。

29

日常生活は、外見の生のために常に空虚にされてきたが、外見には、神話的凝集力という点で、日常生活を決して話題にさせないだけの力が十分にそなわっていた。資本主義のさまざまな変種のすべてとブルジョワジーのさまざまな変種のすべてを通して浮かび上がる貧困、すなわちスペクタクルの空虚は、ある種の日常生活（避難所としての生活だが、しかし、何のための、何に対する避難所なのか？）の存在を暴露するとともに、日常生活の貧困をも暴露してきた。物象化と官僚支配が強化されるにつれて、スペクタクルと日常生活双方の虚弱な性格が唯一の自明な事実になってしまっている。人間的なものと非人間的なものとの衝突もまた、外見の面に移ってきた。マルクス主義が1つのイデオロギーとなるや否や、マルクスが生の豊かさの名において行った、イデオロギーに対する闘争は、イデオロギー的な反イデオロギーに、反スペクタクルのスペクタクルに変形されてしまった。（それは前衛文化において、反スペクタクル的なスペクタクルの不幸が役者たちの間にだけとどまっていることにあり、反芸術的な芸術が芸術家によってしか行われ理解されないのと同様である。このようなイデオロギー的な反イデオロギーと、レーニン主義における職業的革命家の機能との間の関係を考察しなければならない）。こうして、マニ教的二元論は、しばらくの間、息を吹き遂すことになった。なぜ、聖アウグスティヌス*3はあれほど激しくマニ教徒たちと戦ったのだろうか。それは、彼が、悪に対する善の勝利という1つの解決しか提供しない神話がどんなに危険であるかを予測したからである。こうした解決策の不可能性が神話の構造全体を瓦解させて、神話の生と本当の生との関の矛盾を前面に押し戻しかねないということ、彼は知っていたのだ。キリスト教は、第3の道、つまり、聖なる混同という道を提供する。キリスト教が神話の力によって成し遂げたものが、今日では、事物の力によって成し遂げられる。ソヴィエト化された労働者と資本主義化された労働者の間には、も

はやどんな敵対関係も存在しないし、スターリン主義の官僚の爆弾と非スターリン主義の官僚の爆弾の間にも、もはやどんな敵対関係も存在しない。もはや、物象化されたさまざまな存在の混同における統一しかないのである。

責任者はどこにいるのか。打倒すべき人間は、どこにいるのだろうか。われわれを支配しているのは、1つのシステム、1つの抽象的な形式なのである。人間性と非人間性の程度は、受動性の純粋に量的な変化によって測られている。質はどこでも同じなのだ。つまり、われわれはみな、プロレタリア化されている、あるいは、プロレタリア化される途上にある。伝統的な「革命家たち」は何をしているのか。彼らはそれぞれの段階を還元し、どのプロレタリアートも、プロレタリア化されているという点では同じであるようにしてしまうのである。プロレタリアートの終焉を綱領に掲げた党とはいったい何だったのか。

生き延びの展望は、耐えがたいものとなった。われわれの上のしかかっているのは、真空のなかの事物の重さなのである。これこそまさに、物象化というものである。どの存在もどの事物も等しい速度で落下し、どの存在もどの事物も風袋のように等しい価値を持つのである。等価値が君臨することによって、キリスト教の計画が実現されたのだが、それは（パスカルが推測していたように）キリスト教の外部で実現された。しかも、とりわけ、パスカルの予見とは逆に、神の亡骸の上に実現されたのである。

等価値の君臨するところでは、スペクタクルと日常生活とが共存する。存在と事物は互いに交換可能である。物象化の世界は、この世界の舞台背景（デコール）である大都市のように、中心を欠いた世界なのである。現在という時間は、恒久的な未来——過去の機械的な拡張でしかないような未来——に対する約束を前にして、消え去る。時間性そのものが中心を欠いているのだ。犠牲者と拷問者が同じ仮面をつけているこの強制収容所的宇宙のなかでは、拷問の現実だけが本物である。こうした拷問を、いかなる新たなイデオロギーも軽減することはできない。全体性（〈ロゴス〉）のイデオロギーにも、ニヒリズムのイデオロギーにも、それはできない。それらは、サイバネティクス社会を支える松葉杖にすぎないからだ。この拷問こそが、たとえどれほど隠された権力でも、どれほど組織された権力でも、位階秩序化されたあらゆる権力の欠陥を証明する。S Iが更新しようとする敵対関係は、最も古くからの敵対関係であり、根源的な敵対関係であるが、そうであるからこそ、それは、さまざまな反乱の運動や偉大な個性が歴史の流れに委ねてきたすべてのものを、再び引き受けるのである。

ほかにも改めて採り上げ、転倒すべき当たり前の事実が数多くあるかもしれない。最良のものには、決して終わりが無い。これまでに書いたことは、凡庸な精神の持ち主には3度目にやっと理解できることであるが、それを読み直す前に、次のテキストに注意を注いだ方がよい。この覚書が、他の覚書と同様に断片的であるため、議論と説明を呼ぶだけに、いっそうたゆまぬ注意力が必要だ。要は、S Iと革命権力という中心的な問題なのである。

S Iは、大衆党の危機と「エリート」の危機を一緒に考察することによって、ボルシェヴィキ的なCC〔中央評議会〕を乗り越える（大衆党の乗り越え）と同時に、ニーチェ的な企図をも乗り越える（インテリゲンチヤの乗り越え）ものとして自らを定義しなければならないだろう。

a 権力は、革命への意志を指導するものとして自己を提示するたびに、革命の権力をアプリアリに浸食してきた。ボルシェヴィキ的なCCは、自己を集中であると同時に代表として定義していた。ブルジョワ権力に対抗する権力の集中と、大衆の意志の代表として。この二重の特徴によって、ボルシェヴィキ的なCCは、早晚もはや中身が空っぽになった権力、何も代表しない権力にすぎなくなるように決定されていた。そして、その結果、共通の形式（官僚支配）のもとで、ブルジョワ権力——そちらもまた、ボルシェヴィキ的なCCの圧力によってよく似た進化を遂げた——と合流するよう決定されていたのである。S Iが自分たちは質を握っており、自分たちの理念は誰にでも理解できると念を押すとき、それは、集中した権力と大衆の代表のための条件がS Iの中に潜

在的に存在するということだ。しかしながら、われわれは、権力の集中も代表する権利もともに拒否する。それは、今この瞬間から、われわれが公に採るべき態度（というのも、われわれには、ある程度までスペクタクル的なやり方で自らを知らしめることが避けられないからだ）は1つしかないということを意識しているからである。この態度は、われわれの理論的、実践的立場に基づいて自己を発見する者たちに、革命権力を、無媒介の権力を、万人の直接行動を含み持つ権力を、与えうる唯一の態度であるだろう。そのモデル・イメージは町から村へ移動して、ブルジョワ的要素を一掃し、労働者に自己の組織化をまかせたドゥルッティ旅団かもしれない。

b インテリゲンチヤは、権力の鏡の間である。権力に異議を申し立てながらも、インテリゲンチヤは、どの行為を通して現実の異議申し立てを示している者たちの受動性に対して、カタルシス的な同一化を提供するだけである。しかしながら、「121人」宣言*4のなかに見て取ることでできたラディカリズム——行為のラディカリズムであって、理論のラディカリズムではないことは明白だが——は、これまでとは異なるいくつかの可能性を示した。われわれにはこのような危機を加速することはできるが、それができるのは、われわれがインテリゲンチヤのなかに（しかも、彼らに反対して）権力として入り込むことによってでしかない。この位相は、aの部分で描写された位相に先行し、そこに含まれるはずのものだが、われわれは、この位相によってニーチェ的な企図という展望のなかに置かれることになる。事実、われわれは、全体的人間の実現に着手する、ほとんど錬金術的とも言える小実験集団を構成することになるだろう。このような企てをニーチェは、位階秩序の原理の枠内でしか構想していない。ところで、われわれが事実上、位置することになるのは、そうした枠の中なのである。それゆえ、われわれとしては、まったく曖昧さを残さず、自己を提示することが最高度に重要になってくるだろう（集団のレベルでは、中核を浄化し、残滓を除去することは、今や成し遂げられたと思われる）。われわれが自分の置かれている位階秩序的な枠組みを受け入れるのは、われわれが我慢しきれず、われわれの支配する者たち、われわれ自身の認識基準に基づいてしか支配できない者たちを撲滅

するようになる場合だけである。

c 戦術面では、われわれのコミュニケーションは、多かれ少なかれ隠れた中心から放射状に発されるものでなければならない。われわれは、物質化されていないネットワーク（革命軍の到着以前の共産主義者の扇動者が行ったような、直接的関係、エピソード的關係、非束縛的な接触、漠然とした共感関係と理解関係の発展）を確立するだろう。われわれは、ラディカルな行為（行動、著作、政治姿勢、作品）を分析しながら、それらの行為を自らのものとして要求する。そして、われわれの行為やわれわれの分析を最も多くの者から要求されたものとみなすだろう。

かつて神が過去の統一的社会の参照点を構成していたのと同じように、われわれは、今ようやく可能になった統一的社会に対して、中心的な参照点を提供するための準備をしている。しかし、この参照点は、決して固定的なものではないだろう。非人間性の過去の中からサイバネティクス社会が汲みとっている、常に反復される混同とは逆に、それが表しているものは、すべての人間の遊戯であり、「未来の揺れ動く秩序」なのである。

ラウル・ヴァネーゲーム

*1：シャルル・フーリエ（1772－1837年） フランスの空想的社会主義者。商人としてフランス諸都市を巡り、資本主義の現実を観察する中で、独学で「ファランジュ」と名づけたユートピア的未来社会を構想した。人間の本能を12に分類、それを伸ばす調和的世界を理想とし、それに反する文明を悪として、物質的・有機的・動物的・社会的の『四運動の理論』を社会的運動法則として発見した。その考えは、フランスの社会主義運動・協同組合運動に影響を与えた。著書に『四運動の理論』（1808年）、『産業的社会的な新世界』（22年）など。

*2：フリードリッヒ・ニーチェ（1844－1900年） ドイツの哲学者、ギリシャ悲劇、ショーペンハウアーの意志哲学の影響を受け、リヒャルト・ヴァーグナーの総合芸術的文化運動に共鳴。普仏戦争に従軍後健康を損ね、大学を辞し、狂気のなかで死んだ。著作に永劫回帰思想による生の肯定と超人の理想を説く『善言の彼岸』（88年）、権力意志を生みの原理とする『権力への意志』（84－88年）など。

*3：聖アウグスティヌス（354－430年） 初期キリスト教会の教父・哲学者。ヌミディア（北アフリカ）に生まれ、青年時代に遊学したカルタゴで放縦な生活をしたが、それを悔いてマニ教に帰依。その徹底した善悪二元論に惹かれたが、やがてキケロを読み、マニ教の宇宙論に懐疑を抱くようになり、マニ教に捨てて、後にキリスト教に回心する。聖職に就いてから、まず最初に著書と論争によってマニ教の二元論的世界観を激しく攻撃した。著書に『告白』、『神の国』など。

*4：「121人」宣言 1960年9月5日、フランスのアルジェリア戦争政策に反対し、アルジェリア人の独立戦争を支持するために、フランスの知識人121名が行った宣言。アルジェリア人民に武器を取ることを拒否、フランス人によるアルジェリア人支援の正当性、植民地廃絶の大義という3点を掲げたこの宣言は、モーリス・ブランショ、ディオニス・マスコロ、クロード・ランズマン、マルセル・ペシュらが起草し、サルトルからシモーニュ・シニョレまで多くの知識人を結集し、署名者に対する警察の尋問など激しい弾圧を受けながらも、アルジェリアの独立のプロセスの中で大きな役割を果たした。本書 第2巻116ページの記者解題を参照。

アレキサンダー・トロッチのこの論文は、最初「百万の精神の见えない反乱 Invisible insurrection of a million minds」という別のタイトルで発表された英語の論文から本誌のためにフランス語に翻訳されたものである。英語版とフランス語版は、わずかな追加（第6段落の「前衛が現在可能なものを」以下）と表現の違いを除いて、まったく同じ内容である。英語版は、イギリスのシチュアシオニストと、その影響を受けたと言われるさまざまな運動の資料を収めた『終わりなき冒険……終わりなき情熱……終わりなき宴』（A situationist Scrapbook, verso/ICA, 1989, PP.53 - 57）に収められている。

トロッチとドゥポールあるいはシチュアシオニストとの関係は古く、S Iの前身レトリスト・インターナショナル（L I）の機関紙『ポトラッチ』第23号（1955年10月13日）にすでにトロッチの名が現れ、「即断即決」と題された短信に次のように書かれている。「最近まで北アメリカの前衛雑誌『マーリン〔魔術師〕』の編集長を務めていたアレキサンダー・トロッチは、レトリスト・インターナショナルの綱領に賛同して、このポストを辞した。彼は、即刻、自分のすべての友人に選択を迫り、不可避となった多くの絶縁を断行した」。ダダ、レトリスト、シチュアシオニスト、パンクを貫く「20世紀の隠れた歴史」を書いたグリル・マーカス（Greil Marcus, Lipstick Traces, Harvard university Press, 1989, PP. 385 - 388）によれば、1925年にグラスゴーに生まれたトロッチは、50年代にロンドンでオリンピア・プレスという出版社のポルノグラファーとして働きつつ、自ら小さな前衛雑誌『マーリン〔魔術師〕』を編集・発行していたが、1955年、パリ滞在時にドゥポールと出会い、その強い影響を受け、それまでの過去をすべて捨て去ってL Iに参加した。『ポトラッチ』に書かれていたのは、この時の事情である。マーカスによれば、トロッチは、その後、56年にパリを去り、米国に渡ったため、1957年のS I結成には立ち会っていないが、ドゥポールが彼をシチュアシオニストとして認めたため、S Iの設立時からのメンバーということになったようである。トロッチはその後、60年に『カインの本』という麻薬中毒者の日記の形式で書かれた自伝的小説を出版するが、おそらくこの本の出版が原因で、その年の9月、米国で麻薬所持の嫌疑をかけられて逮捕される。トロッチ逮捕の報を受けたS Iは、ちょうどロンドンで開催中のS I第4回大会でその釈放を求める決議を行い、それを『アレキサンダー・トロッチに手を触れるな』というビラを配布し、S I内外の多くの者の力を借りてトロッチの釈放運動を行った。これをきっかけにトロッチはイギリスのボヘミアンのサークルで有名になり、釈放後、62年にロンドンで「プロジェクト・シグマ」なる計画を打ち上げる。これは、反体制的で実験的な文化実践を統一し、「内的空間（インナー・スペース）の宇宙飛行士」の国際的結社を作るというもので、そのためにトロッチは「シグマ・フォリオ」という通信形式の出版を行うことを企画していた。

1964年にトロッチが出版した『ザ・シグマ・ポートフォリオ』の「寄稿者への通知」（An endless adventure... an endless passion... an endless banquer, p.85）によれば「シグマ・フォリオ」とは、作家や写真家、芸術家はその創作をじかに読者に配布し、読者は受け取った作品や資料、情報をあらかじめ配布されたバインダーに閉じてゆくようになっていた。この交通は一方

通行のものではなく、読者も自分の作品や情報をこの回路に乗せて配布することが求められ、さらに他の創作者に意見を述べ、作品の内容の変更さえ関与することができる。これは「インターパーソナル」なプロジェクトであり、文字どおり拡張的（エクスパディング）な「作品」の生成であり、「フォルオ」はそうした「作品」の生成のドキュメントとなるのである。トロッチはそれを未来（future）を起点にした過去（antique）の資料という意味で「フューティック」なフォルオであると言っている。この「プロジェクト・シグマ」は、出版の形態、「作品」の意味の変更、送り手と受け手の関係の変革などの点で、シチュアシオニストのめざすものを1つの形にしたと言える。しかし、このプロジェクトは、できる限りオープンなものとなることをめざし、誰でもいくらかの料金を払えば参加できるものであったため、S Iの組織の性格（非合法性、少数主義、理論・実践面での厳密性など）と相容れないものとなった。そのため、1964年8月に、このプロジェクトの最初の出版がなされた時に、トロッチは同意の上でS Iを脱退した。『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第10号の「S Iの出版物について」と題された記事の中で、S Iはトロッチのプロジェクトが「とりわけ合州国と英国において、この手段によってコンタクトを取りうるこの上なく気むずかしい個人との対話にわれわれが認める興味」にもかかわらず、「われわれの友人」のトロッチが「多くの点でわれわれが完全に承認する活動」を行うのは「もはやS Iのメンバーとしてではない」と書いている。

トロッチのS I脱退の理由はS Iによるとこのようなものであったが、グリル・マーカスはそのことには触れず、トロッチは、コリン・ウィルソンやアレン・ギンズバーグといった、ドゥボールが「神秘主義の大ばか野郎」と呼ぶ麻薬常習者たちと関係があったことを理由にS Iを「除名」されたと書き、58歳のトロッチにインタビューしてドゥボールに対して愛憎半ばする彼の複雑な心境を語らせている。確かにトロッチの麻薬癖はS Iにとって好ましいものではなかったかもしれないが、トロッチはその麻薬癖そのものをS Iから直接に問題にされたことはない。米国での逮捕時にS Iが示した連帯の姿勢や、釈放後のトロッチが、61年9月、S Iの性格を決する重要な決定「ハンブルク・テーゼ」*1に関わった事実、さらに、62年11月のS I第6回大会ではS Iの中央評議会のメンバーに選ばれ、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第8号（1963年）の編集委員になったことなどを考えると、トロッチの麻薬癖がS I脱退の直接の原因ではなく、やはり、S Iの言うように、「プロジェクト・シグマ」に現れた合法志向がトロッチを脱退に導いたのだと言うべきであろう。この合法志向は本論文のなかで提案される「アクション・ユニヴァーシティ」や「有限責任会社〈インターナショナル・カルチュラル・エンタープライゼズLtd〉」などのオプティミストすぎるとも思える計画にも見て取れる。「プロジェクト・シグマ」のその後がどうなったかは不明だが、トロッチは、1984年に死去した。

*1: 「ハンブルク・テーゼ」 1961年9月の初め、ドゥボール、コターニ、ヴァネーグムが、イエーテボリでのS I第5回大会の帰路に立ち寄ったハンブルクのとあるバーで行ったS Iの理論と戦略に関する議論の結論のこと（トロッチは、その場に同席せず、後に意見を加えた）。ドゥボールが1989年に発表した「1961年9月のハンブルク・テーゼ（シチュアシオニスト・インターナショナルの歴史に役立てるためのノート）」によると、このテーゼは

、S I 外への流出に対する危惧から、文書としては残されず、署名もなされなかったが、S I のその後の方向を決定する重要な役割を果たした。テーゼ自体の内容は豊かで複雑なものだったが、その要点は、「S I は、今や、哲学を実現しなければならない」という文章に尽きる。

「そして、今の時代に、まだ地獄のような、真に呪われた何かがあるとすれば、それは、火あぶりにされようとして、薪の山の上で十字を切る死刑囚のように振舞う代わりに、いつまでも芸術的に、形態にかかずにいることであろう。」

アントナン・アルトー『演劇とその分身』

反逆は人気がない。何故かは容易に分かる。反逆と断定されたらすぐに、それを阻止する適切な措置が画策される。慎重な人間であれば、反道者と自認するのを避けるだろう。そんなことをしたら、自分自身の死刑宣告をしたも同然だからである。そのうえ、それは自分自身に杵をはめることである。

われわれは、トロッキーやレーニンのように国家を奪取したいのではなく、世界を奪取したい。その過程は必然的に、より複雑で、より全面的であるが、また、より段階的で、より地味でもある。われわれの方法は、遭遇する経験的事実——ここで今遭遇しているものもあれば、よそで後に遭遇するものもある——に応じて変わるであろう。

政治的な反逆は、まさに政治のプロセスの支配的なレベルを奪取することをめざすという点で、何の成果も上げられないものであり、また、そうあり続けるにちがいない。現代文明のよどんだ沼の中では、それはアナクロニズムである。同時にまた、世界は破滅の危機に瀕しているのだから、われわれは追従者たちを待っているわけにはいかない。彼らと喧嘩するわけにもいかない。

世界転覆は、最も広い意味で、文化的でなければならない。多数の技術者を使って、トロッキーは、陸橋、橋、電話通信、エネルギー源を掌握した。因襲の犠牲者である警察官たちは、クレムリン宮殿の老人たちの周囲で歩哨に立つことによって、トロッキーの輝かしい企てに貢献した。クレムリン宮殿の老人たちは、想像力が足りなかったのも、自分たちが昔ながらの政府本部にいること自体が、どれほど非常識で、問題外であるかに気づかなかった。歴史は彼らを側面から衝いたのである。トロッキーは駅や発電機を握っており、一方、「政府」は、結局、自らの警察によって歴史からロックアウトされた。

したがって、文化的反逆は、表現のネットワークと精神の発電機を掌握しなければならない。知性は、自らを自覚し、自らの力を悟り、そして、古くさい機能の域を超えて、思い切ってその力を全体規模で行使する必要がある。歴史は諸国の政府を、びっくり返すのではなく、側面から衝くだろう。文化的反逆は、新しい次元の事物の必要不可欠な支柱であり、情熱的な下部構造である。

衝くべきものは、物理的な次元を持たず、季節の色彩とも関係がない。それは、港でも首都でも島でもなく、ダリエン山脈〔コロンビア・パナマ国境地帯にある山脈〕の頂上から見える地峡でもない。結局、それは、これらすべてのものである。もちろん、存在するすべてのものであるが、しかし、それらはただ道すがらに、避けがたいこととして出くわすのである。衝くべきも

の——私は、私の話していることを正確に自覚する可能性のある、あちこちの（言ってみれば）百万人の人々、百万人の潜在的な「技術者」に、語りかけているのだ——、衡くべきもの、それはわれわれ自身である。今、今日、明日、ばらばらに配置されてはいるがきわめて重要な実験センターにおいて起こるべきことは、欺瞞の打破である。しばしば大衆の時代と見なされている今の時代において、われわれはえてして、歴史と進化を、われわれのコントロールの全く外で不可避免的に働く力であると見なすことに慣れっこになっている。個人は、関与する力の巨大さを知ると、心底、自らの無力さを感じる。われわれ、あらゆる分野で創造的な人間は、そのような麻痺をきたした態度を捨てなければならないし、また、われわれ自身をコントロールする責を負うことで、人類の進化をコントロールしなければならない。われわれは、「万古不易の人間性」という因襲的な虚構を拒否しなければならない。実際、その種の恒常性は、まったくどこにも存在しない。生成だけがあるのである。前衛が現在可能なものをコントロールするということは、もちろん、より普遍的な発展に向けた前哨戦でしかない。そして、本誌の巻頭に表明されているように、知性の党は、「自らを抹殺することによってしか、自らの計画を実現できないだろうし、（……）自らを乗り越える党としてしか、実際に存在しえない」ということをわれわれは知っている。

組織化、コントロール、革命。このような概念を前にすれば、私が話しかけている百万人の人々の誰しものが怖気づいてしまい、平常心を持って1グループ——その名が何であれ——と一体化することなどほとんど不可能だと思うだろう。それが普通である。しかしまた、それは同時に、誰にも責任があるとは言えない事件に直面した時の、知性の恒常的な無力さの理由でもある。事件、すなわち、進むように汨濫する血染めの災難、つまり、大部分は意識もされずコントロールもされないままに人類の歴史を形成してきた数々の動きが複合して起きた自然な結果のことである。入念に打ち合わせた組織化がなければ、行動は不可能であり、限られた個人やグループらのエネルギーは、数多くのまとまりのない要求の些細なジェスチャーになって散ってしまふ……。こっちでは宣言、あっちではハンガー・ストライキ。おまけに、そのような抗議は、どれも共通して、社会行動は合理的であるという前提に依拠している。そんな前提は、その抗議のくだらなさを示すブランド・マークだ。断固として変化を成し遂げなければならないならば、人々は、何らかの方法で、自分たちの行動を社会的な枠組みに合わせる必要がある。そして、われわれの見解では、自らその任務に段階的かつ実験的に取りかかるならば、実り多い新思想を世に知らしめることのできる人々の核はすでに存在する。彼らがそれを引き受けるのを、世界が待っている。

われわれはすでに、援護なしの攻撃という考えをいっさい捨てている。精神は、乱暴な力に対して、丸腰の戦いでは立ち向かえない。問題はむしろ、世界において現に働いている力——その相互作用から未来が生まれる——とは何かを、明確に先入観なく、理解することである。そしてまた同時に、冷静かつ沈着に、一種の精神的な柔術——それがわれわれのものであるのはわれわれの知性のおかげだ——によって、変更し、訂正し、巻き添えにし、逸らし、悪化させ、浸食し、向きを変えることである。つまり、見えない蜂起と呼びうるものの推進者になることである。そのような蜂起が起きるとすれば、それは、人民大衆にとっては、彼ら自身がそれに賛成票を投

じたとか、公然とそのためを闘ったとか、そのようなものとして起きるのではなく、季節の移り変わりのように起きるであろう。彼らは、その中にいることに気づき、そして、状況そのものによって、こう駆り立てられていることに気づくだろう。すなわち、そのような状況から出発して、つまりついに彼ら自身のものとなった内的かつ外的な歴史から出発して、自覚的にすべてを創造し直そう、と。

明らかに、原則としては、現代世界において生産に難があるわけではない。難があるのは分配であり、分配は現在、しかじかの圏内で支配的な経済体制が持つ基準に応じて、きちんと（つまり、めちゃくちゃに）行われている。この問題は、世界的規模での行政問題であり、現存する政治的、経済的な対立関係が消滅しない限り、最終的な解決には至らないであろう。とはいえ、分配の問題は、国際機関によって世界的規模で、もっと合理的に把握されうるということは、すでに自明のことになっている。そのような組織、現在のところでは国際連合やユネスコのようなタイプの組織は、すでに、その任務のいくつか（食糧、医療など）を、さまざまな国の政府になりかわって担当している。もしもそれらの機関が諸国家の代理人そのものとは別の人間で構成されているとしたら、この種の権限移転のうちに、国家にとっての終焉の始まりを見出すのに、大した想像力もいらぬであろう。また、そうだとしたら、われわれはその進行を速めるために全力を尽くさねばなるまい。

さしあたっては、くだんの氏名不明の百万人は、「余暇」の問題に関心を集中すればよい。大げさに「青少年の非行」と呼ばれているものの大部分は、自分の余暇に適合できない若者の、言葉にならない反応である。それに結びついた暴力は、人間の自己疎外——産業革命が作り出したような自己疎外——の直接の結果である。人間は、遊び方を忘れてしまった。そして、それは驚くほどのことでもない。産業社会において1人1人に割り当てられた、気の入らない仕事のことを考えるならば、そのことからしても、また、教育が次第にテクノロジー的になっていき、普通の人間にとっては就職の準備の手段以外の何ものでもなくなっているという事実からしても、当然のことである。そういう人間は途方に暮れている。彼は、余暇がより長くなるのを怖がるほどである。むしろ残業をする方を好むだろう。そこから——このことも、資本主義世界においてなんら驚くにあたらないことであるが——オートメーションに対する彼の敵意が生まれる。創造性が萎縮してしまって、彼は完全に外を向く。彼は安心していなければならない。彼の労働生活を支配している諸形式が、彼の余暇の中に持ち込まれ、彼の余暇はますます機械化される。そういうわけで、彼は、機械のおかげでもたらされた余暇と闘うために、機械で武装するのである。

けれども、そのすべてを埋め合わせるために、つまり、このテクノロジー時代の心理的な磨滅と傷を軽減するために、われわれに何があるだろうか。一言でいえば、気晴らしである。くだんの「人間」が、1日の仕事を終えた後、顔をひきつらせ、疲れはてて、流れ作業の組立ラインから、いささかの皮肉もなく「自由時間」と呼ばれているものの方へ帰る時、彼は何と向かい合っているのだろうか。家に帰る途中、バスの中で、彼は新聞を読むが、その新聞は、同じ要素の混ぜ直し（ルミクサージュ）という意味で、前日の新聞と同様である。すなわち、殺人4件、災害13件、革命2件、および誘拐かそれに類した何かの事件。前日の新聞もこれまた前々日の新聞と同様である。すなわち、殺人3件、災害19件、反革命1件、および、ひどく忌まわしいこ

とも思える何かの事件。そして、彼が真に例外的な人間、つまりくだんの百万人の「潜在的な技術者」のうちの1人でない限り、彼がこの暴力全体とこの無秩序の中で難渋することから引き出した代理的な楽しみのせいで、彼には、その「ニュース」全部の中に新しいものは何もないという事実が、分かりにくくなっている。そしてまた、彼がその楽しみを日常的に濫用しているせいで、彼は、現実に対する自分の意識を拡大するのではなく、その意識を危険なまでに収縮する方へ向かっているという事実にしても、そうだ。そのような意識の収縮は、人間の知性の繊細さよりも、パヴロフの犬の唾液分泌との方に多くの共通点のある心的過程の一種なのである。

現代人は、安心して必要がある。彼の能動的な参加は、ほとんど存在しない。芸術は、どんな芸術であれ、大半の人がめったに思い浮かべることのない話題、ほとんど取るに足らない話題であって、彼らは時には芸術という話題に対して度し難い無知をひけらかすことを誇りにさえしている。この嘆かわしい事態は、現代の文化制度の自信に満ちた頑迷な愚かさによって、無意識のうちに、支えられている。美術館は、開館時間が教会とほぼ同じであり、同じ抹香臭さと同じ静寂がある。そして、そこにしまい込まれた作品を作った生身の人間とは精神の上で正反対に、尊大にスノビズムをひけらかしている。そのような静寂に満ちた廊下がレンブラントと、また「禁煙」の掲示がヴァン・ゴッホと、何の関わりを持つというのだろうか。美術館の外では、市井の人は、エレガントな商業システムによって、芸術本来の刺激的な影響から、完全に切り離されている。その商業システムは、付随的に、しかし経済的要請に応じて、いわゆる「芸術形式」の出現と定着に関して、一般に認められているよりも大きく関与している。生活と芸術の間に障壁を立て、芸術作品を敬うべき先祖の亡骸のように収集している文明にとっては、芸術は重要な意味を持ちえない。芸術は生きた体験を形成しなければならない。われわれが思い描いているのは、生活が芸術によって絶えず刷新されるような状況、1人1人がそれに創造的に反応できるように想像力と情熱によって構築された状況である。どんな活動であれあらゆる活動に、創造的行動をもたらすことが重要なのである。われわれはそのような状況を思い描いている。しかし、われわれこそが、今、そのような状況を創造しなければならない。なぜなら、そのような状況は存在しないのだから。

現在の情勢ほど、このような展望に強烈なコントラストを与えうるものはないだろう。芸術が生者を麻痺させているのだ。われわれはある種の心理操作のただなかにおり、そこでは、生が芸術によってどんどん生気を奪われ、また、すべてが、偽りの光のもとに、センセーショナルなものや購買物として表される。それも、各個人の内に、受動的で慣例通りのやり方で反応したいという欲求、たえず、何でもいいからありきたりで自動的な同意を与えたいという欲求を吹き込もうという意図のもとに、そうされるのである。気力がなく不安げで、集中力のない普通の人間にとって、芸術作品は、スペクタクルのレベルで競わない限り、注目されえない。それは、一般に馴染みのないものや思いもよらないものをいっさい含んではならない。観客は、やすやすと何のためらいもなく主人公に同一化し、感情のジェットコースターの揺れる椅子にしっかり深く座り、どんなわずかなコントロールもあきらめることができなければならない。そこに腰を据えているのは憑依であり、それも、理性を盲目にし批判センスを排除するという下劣の極みにある憑依である。私の知る限りでは、観客の内に判断力を失わせて憑依状態を引き起こすためには

何でもするこのような上演様式の危険性に初めて注意を促したのは、ブレヒト*1である。現代の観客のそのような漠とした同一化傾向に反対するためにこそ、彼は、演出と上演のための異化の理論をまとめ上げたのであり、それは、より能動的で批判的なある種の参加を促すために計算された方法であった。残念ながら、ブレヒトの理論は大衆の気晴らしにいかなる種類のインパクトも与えなかった。操り人形（ゾンビ）は今もいる。スペクタクルはますます派手（スペクタキュラー）になっていく。私の友人の警句を自由に脚色して、私はこう言おう。「われわれが力を尽くすことを望むのは、世界の終焉のスペクタクルのためではなく、スペクタクルの世界の終焉のためなのである」（「芸術の消滅の意味」参照）。

芸術において良質と呼ぶに値するものは、今日では、流行や産業や広告の手段を通じてしか、大衆文化に接触できないし、それゆえ、何年も前から、そのような企てに付きものの陳腐さに毒されてきた。それ以外のものについては、文学や芸術は、機械化された大衆文化と共存しているものの、あちこちで時たま見られる映画を別にすれば、大衆文化にほとんど影響がない。ただジャズだけは、出現してまもないゆえの自由奔放さと活気を持っているだけに、われわれは、ジャズにのみ、創造的な雰囲気から自然にわき起こる、おおよそ大衆的な、芸術を認めることができる。とは言っても、残念なことに、ジャズは、純粹になればなるほど、大衆的でなくなっていく。他の退化した形式が本物と見なされる。例えばイギリスでは、われわれは、馬鹿げた「トラッド*2」ブームを目の当たりにしている。それは、1920年代初めにニューオーリンズで、単純で、明瞭で、反復の多いものとして生まれたものの単なる混ぜ直し（ルミクスージュ）であり、現在ではその影で、チャーリー・パーカー*3が開いた新時代の生き生きとした伝統をほとんど完全に覆い隠してしまっているのである。

今や何年も前から、最良の芸術家たちや優れた精神の持ち主たちは、芸術と生活の間にできた深い溝を嘆いている。その人々もたいがい、若いうちは反逆的であったが、壮年の頃になると、「成功」によって牙を抜かれてしまうのである。個人には力がない。それは必然である。そして芸術家は、自分の無力を心底から感じる。彼は挫折させられる。彼は呪われているのだ。カフカの著作にあるように、その恐ろしい疎外感が作品のなかに染み込む。確かにダダは、第一次世界大戦末期に、因襲的な文化に対して最も妥協のない攻撃を開始した。しかし、まもなく通例の防衛機制が働き、「反芸術」の製作物は、格式張って額に入れられ、『アテネの学堂』（ラファエロ作のフレスコ画）の隣に掛けられた。ダダは、資料室で去勢を受け、やがて、他の芸術流派とまったく同様に、歴史の教科書の中に安らかに埋葬された。トリスタン・ツァラほかは、正当に、政体の陰部に巣くう悪性潰瘍を告発し、風刺のプロジェクターを、一掃すべき偽善の方へ向けることができたにもかかわらず、彼らは、現存する社会秩序に対する創造的な代案を提出しなかった。モナリサに口髭を描いた*4後で、われわれは何をするつもりだったのか。チンギス・ハンがルーヴルを自分の馬の厩舎として使うことを、われわれは本当に望むつもりだったのか。そしてその後は？

*1：ベルトルト・ブレヒト（1896-1956） ドイツの劇作家。1928年、クルト・ヴァイルとの合作『三文

オペラ』で大成功を博す。29年から36年にかけて共産主義運動に参加。その後、ナチスの台頭によって故国を離れ、スウェーデンから合衆国に亡命。その間、『ガリレオの生涯』（37年）、『肝っ玉おっ母とその子どもたち』（39年）を書く、戦後、49年以降、東ベルリンに住み、劇団「ベルリナー・アンサンブル」を結成し、字幕スライドや歌を用いた「異化」効果の理論に基づく政治演劇活動を展開。

*2: トラッド 第二次大戦後のジャズの1スタイル。モダン・ジャズとは反対に、最初期のジャズ（ディキシーランド・ジャズ）への回帰である。

*3: チャリー・パーカー（1920-55年） アメリカの黒人ジャズ・アルトサクソフーン奏者。モダンジャズの出発点となったビ・バップの創始者の1人。

*4: モナリザに口髭を描いた マルセル・デュシャンが1919年に発表した『LHO OQ』のこと。レオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』の複製に口髭を描き込み、デュシャンの署名を添えたもので、制度化された芸術家と作品の関係を転覆したとして、美術史上画期的な「作品」である。

最近のエッセイ（「秘密の指揮」、1962年3月の『エンカウンター』誌⁵第102号に掲載）の中で、アーノルド・ウェスカーク⁶は、まさに芸術と大衆文化の間のギャップと、新たな接触の可能性とに関心を持ちつつ、1919年に脅威をもたらしたストライキとロイド・ジョージ⁷の演説に言及している。ストライキは政府を打倒しかねなかった。首相は言った。「あなた方は私たちを打ち負かそうとしています。でも、もしそうしたとして、あなた方はその結果を検討してみたことがありますか。ストライキは、国の政府に対する挑戦となるでしょうし、また、もしストライキが現実に成功を収めれば、私たちは最大級の政体の危機に陥ることになるでしょう。といいますのも、国家の中に国家そのものよりも強い権力が立てられたら、その権力は国家の機能を引き受ける覚悟がなければならないからです。さもなければ、その権力は国家の権威に降伏して退却する義務があります。紳士の皆さん、あなた方はそのことを考えてみたことがありますか。そして、考えてみたのなら、覚悟はできていますか」。

ストライキ決行者たちは、周知のように、覚悟ができていなかった。ウェスカーク氏はコメントを付けている。「風向きは完全に変わった。大勢の人々が、抗議以外のところに運を賭けた。そしてどこかでたくさんのロイド・ジョージが、自分の政権の成り行きを見て満足げにほくそ笑んでいる最中である。（……）どんな抗議も許されるし、親切に耳を傾けてもらえる。なぜならば、力——経済と文化の——は、しっかり守られた暗所変わらず安置されているということ、だれもが知っているからである。そして同時に、この秘密の知識によって、芸術家と知識人の真の絶望が生まれる。われわれは、この知識によって麻痺させられている。われわれ1人1人がじつに頻繁に抗議するので、文化シーン——特に左翼の——の全体が『畏怖と無効力とからなっている』ほどである。1930年代における文化活動の衰退の理由の十分な理由付けとなるのは、この秘密の知識であったと、私は確信している。俗物だちと一緒に何をすべきかを、誰も本当に知らなかった。彼らは、全能で、友好的で、魅力的だった。病原菌が、思いもよらない方法で持ち込まれ、侵入した。この病原菌が、われわれの新たな文化的高まりを衰退させる原因になるであろうし、そうなり始めている。そうならないためには……。そうならないためには、当事者であるわれわれが、秘密の指揮を次から次へと執ることができるような新しいシステムを考案しなければならない」。

ウェスカーク氏のエッセイは、結局のところまったく期待はずれであるように私には思えるが、しかしそれは、イギリスでも他のどこでも、この問題にかかわっている人々のグループがあることを、私に確証してくれた。すでに見たように、西洋社会の政治経済構造は、創造的知性の運動が権力の歯車にからめ取られているという構造である。この知性の運動は、革新として実現することが禁じられているだけでなく、しばしば主義として相容れない（個別的利害に関わる）力に頼らなくては、試合に加わることもできないのである。ウェスカーク氏の「センター42」⁸は、そのような力関係を変えるための実践的な試みである。

ここではっきり言っておきたいのだが、私はウェスカーク氏との間に根本的な対立があるわけではない。彼の計画（実を言うとそれについての私の知識は非常に曖昧であると、私も認めるが）

に対する私の唯一の批判は、その限られた国内的な性格に関するものであり、そのことは、歴史的背景の分析に反映されている。ウェスカー氏は、オズボーン*9の1956年の作品、例えば『怒りをこめて振り返れ』を、「われわれの新たな文化的高まり」の第1歩と見なしている。歴史的展望の重大な欠落、物の見方の島国性、こういった特徴は、計画全体の根底にあると思われる一種の宗数的慈善バザーの哲学を、より強めているのではないだろうか。芸術が肉体労働のように金になるとは期待できない。ウェスカー氏は、「続行するために金銭的成功に従わなくてもすむような」伝統を、懇望している。そしてその結果、彼は、組合の資金援助を求めるに至り、組合の後援のもとに一連の文化フェスティバルを企画し始めた。私はそのようなフェスティバルに何も反対しないとはいうものの、ウェスカー氏の当初の診断の切迫さから見て、私は、もっと根本的なレベルでの行動提起を期待していたのであった。きっと、そのような方針は、彼があれほど幸せそうに抛り所としているもの、つまり「秘密の指揮」を執ることに関しては、われわれを大した所には導かないであろう。しかじかのグループの公けの精神性に訴ええかけることよりもはるかに陳腐でない何か、われわれの考えている大がかりな転覆にとっての至上命題であるだろうと主張しても、私は用心深すぎるとは思わない。

しかしながら、依然として面白いこのエッセイのある箇所で、ウェスカー氏はレイモンド・ウィリアムズ*10氏を引用している。残念ながら私は、ウィリアムズ氏が誰か、また引用が何の著作から引かれているのかは知らない。ただ私は、どうしてウェスカー氏が次の文章を引用しておきながら、次にそれを無視して庇護者を探し求めることができるのかと、首をかしげるばかりである。「問題は、誰が芸術を庇護してくれるかを知ることではなく、芸術家が自ら自分の表現手段をコントロールして、市場や後援者（パトロン）よりもむしろ共同体と関係を持てるようになる形式として、どのような形式が考えられるか、である」。

もちろん、こんなに短い断言に基づいてウィリアムズ氏が分かると言い張ったりするのは無謀であろう。私はただ、私自身にとってもヨーロッパとアメリカ大陸の私の仲間にとっても、右の文のキー・ワードは、「芸術家が自ら自分の表現手段をコントロール」する、であるとだけ言おう。芸術家がそのようなコントロールを実現した時には、芸術家と「共同体との関係」は、意義深い問題、すなわち、創造的かつ知的なレベルで定式化され解決される問題になるだろう。そういうわけで、われわれはこれ以上ぐずぐずせずに、われわれ自身で、そのようなコントロールを現在実行している社会機構をどうしたら内部から掌握できるのかという問題に取り組まなければならない。われわれの最初の行為は、商人を排除することでなければならない。

この論考の冒頭で、われわれの方法は、遭遇する経験的事実——ここで今遭遇しているものもあれば、よそで後に遭遇するものもある——に応じて変わるであろう、と私は述べた。私は、特定の局面との関係におけるわれわれの活動のそれぞれの、主に戦術的な性格の試みについて、また、新しい文化基盤と呼べるものの国際的な構成についても、示唆した。もちろん、われわれの作戦行動のすべては、それが行われる社会に適合したものでなければならない。ロンドンで有効に利用できる方法が、モスクワや北京では、自殺行為であったり、単にあまり実際的でなかったりすることもある。戦術というものは常に、特定の時と場所のためにあるのである。しかし戦術は決して、狭い意味での政治的なものではない。そのうえ、この論考そのものが、新しい基盤

の一局面、計画に関する参考資料の1つであると、見なされなければならない、それは、ほとんどの場合まだこれから起きることを扱っている限りにおいて、砲火の洗礼を待ち受けているのである。

どのように始めたらよいか。われわれは、時を選んで、ロンドンの市街からあまり遠くない田舎の空き別荘（水車小屋、修道院、教会または城館）で、一種の文化のジャム・セッションを醸成するであろう。そこから、われわれの自主大学のモデルが展開されるであろう。

基本となる建物は、その地所——どちらかといえば川辺が良い——の奥深くに守られることになる。それは、（内的宇宙（インナー・スペース）の宇宙飛行士の）を先進的（パイロット）グループが、その建物——オルガスムと天才、それらの道具と夢見る機械、そして錯乱のための装置とその付属品——の中に自らを場所を定めることができるほど十分に巨大であり、軽工業を導入するのに十分な大きさの「工房」用の付属棟が付いている。敷地全体は、自由な建築と、場合によっては都市開発に適したものである。私がこの語に傍点を付したのは、「これまでしばしば語られてきた総合芸術なるものは、都市計画のレベルでしか実現できなかった」（ドゥボール『状況の構築に関する報告』）という事実をいくら強調してもしすぎることはないからである。1920年頃、ディアギレフ*11、ピカソ、ストラヴィンスキー、ニジンスキーは、1つのバレエを製作するために共同で行動した。このことは、われわれが、1つの都市を作るために一緒に行動する、より広範な同時代人のグループを想像しているのなら、きっと信じられる限界を超えているということにはならないだろう。われわれは、すべてが、意識的な状況の創造（と活用）のための、生きた体験の実験室であると考え。言うまでもないことだが、問題になっているのは、変形可能で変化を披る環境だけではない。人間もまたそうなのである。

すぐさま言う必要があるが、われわれの「アクション・ユニヴァーシティ」（実践（プラクシス）の大学）のこうした簡単な素描は、漠然とした瞑想の産物ではない。何よりもまず、過去の状況に数多くの歴史的な類例があり、それらの状況は、偶然生じた場合もあればコントロールされた場合もあるが、それらの特徴のいくつかは、明らかに、まさしくわれわれの計画に適用できる。そのうえ、この10年間にわたって、われわれはすでに、準備という意味で十分な実験を推し進めてきた。われわれは行動する準備ができているのである。

大英帝国はイートン校の運動場で勝ち取られた、という話はよく聞く。18、19世紀の間、支配階級はもっぱらそのような私立学校で養成されていた。そして、それらの私立学校が人間に授けた行状は、当時のイギリスの発展にきわめて密接に結びついていた。残念ながら、イートン校*12やそれと同種の学校における状況は、その固有の発展を生み出し続けはしなかった。無気力がそこに蔓延したのである。当初は実り多いものであった形式が、硬直化して、その時代との関係をなくすまでに至ったのである。相対性の時代にあって、われわれは、自主大学が、現代におけるきわめて重要な教育的役割を担うものであると考えている。

イスラエルのユダヤ人入植地は、砂漠を菜園に変え、世界中を驚かせた。すでに花を咲かせ、全部オートメーションによって維持されている菜園の中で、同様の決意が少しでも人間の文化〔＝栽培〕に応用されるならば、何の結果ももたらさないとと言えるだろうか。

他方、ノースカロライナには、実験的なブラック・マウンテン・カレッジ*13があった。その事

例は、われわれにとって、2つの理由で直接的な重要性を持っている。第1に、考え方全体が、教育の見地において、われわれの考え方とほとんど同じである。第2に、ブラック・マウンテンのグループにいた人々のうち、何人かのとても経験豊かな中心メンバーが、今、われわれと連携して現在の冒険に取り組んでいる。彼らの協力は非常に貴重である。

ブラック・マウンテン・カレッジは、合州国の隅々まで広く知られていた。いかなる免状も授与されなかったにもかかわらず、アメリカ全土の大学卒業者もそうでない者も、そこに滞在してみる価値があると思っていた。アメリカのきわめて優秀な人々のうちから、驚くべき数の芸術家や作家が、さまざまな機会にそこに来て、教えたり学んだりしたのである。そして、この15年間にアメリカ芸術に及ぼした彼らの影響の総和は、かなりのものであった。絵画の分野でフランツ・クライン^{*14}、詩の分野でロバート・クリーリー^{*15}の名を挙げるだけで、ブラック・マウンテンの重要性をざっと理解してもらうのに十分である。彼らはアメリカの前衛の基本となる人物であり、彼らの影響はいたるところにある。

ブラック・マウンテンは、クラインらの絵画に適用される時、語のその意味における「アクション・ユニヴァーシティ」であると述べることができるかもしれない。試験はなかった。将来の目的から必要とされる勉強はなかった。学生と教授は気楽に、創造的芸術に参加していた。どの教授も自ら、非常に高度な——詩、音楽、絵画、彫刻、舞踏、純粋数学、純粋物理学などにおける——実践家だった。要するに、それは、個人とグループにおける創造性の自由な働きを生み出すために「構築された状況」であった（ここでは、それらの文化的区分を超える創造性のどのような転移がわれわれにとって望ましく思われるかは、検討しない）。

残念ながら、そのカレッジはもう存在しない。1950年代に初めに財政上の理由で閉校しなければならなかったのである。それは実際にそのスタッフによって所有される非営利団体であり、受講登録料と寄付金に全面的に依存していた。合州国の高度に競争原理の働く背景においては、そのような、無料で明らかに非実利的な機関は、スタッフの不断の努力でできる範囲でしか、生き続けられなかった。結局、その組織は、あまりにも周囲に適応できず、生き延びられないことが明らかになった。

われわれの先進的計画を確立する方法と手段を考える際、われわれは決して、次の事実を見失ったことはなかった。すなわち、資本主義社会において成功する組織は、資本主義的な面で自らを維持することができなければならない、という事実である。冒険は採算がとれなければならない。そういうわけで、われわれは、大学に参加する人々の作品をできる限り管理するための総合代理店を設立するというアイデアを思いついた。芸術も、社会の全表現手段の産物も、工業生産と商業へのそれらの応用も、すべてみごとに採算がとれる（〈ミュージカル・コーポレーション・オブ・アメリカ〉^{*16}を参照のこと）。しかし、科学の世界と同様に、利益の大部分を手にするのは、創作者自身ではない。創作者たち自身によって設立され、給料の高いプロフェッショナルの働いている代理店が、難攻不落の障地になるだろう。芸術家たちの批判的な明敏さによってじかに指導される、そのような代理店は、文化的な才能のある新人を有効に収穫できるであろう。それも、純粋に職業的な代理店が、そんな人がいると気付くよりもずっと前に。この15年間同時代の才能を見抜いてきたわれわれ自身の経験が、この決定的要因をわれわれに教えてく

れたのである。

初めの何年かはきわめて厳しいであろう。時とともに、その代理店によって代理される芸術家個人の観点から見て、その代理店が有効に機能することが認められれば、その代理店は、才能あるどんな新人に対しても、第1の選択権を得ることになるだろう。なぜそうなるかといえば、その代理店が競争相手よりも前にその才能を見抜くことができるからだけでなく、まさに大学の存在とその評判のおかげでもある。それはまるで、代理店が利益の100パーセントを自らの宣伝に費やせるようなものである。他のことがすべて同等なら、例えば若い作家は、どうして、自分の（もっと有名な）仲間がコントロールしている代理店に従う方を選ばないということがありえようか。その代理店は、自らが——会員としての彼から——上げる利益の全部を、自らの影響力と支持層の拡大のために使うのであり、また、彼に何よりもまず、（代理店を経営する）実験大学におけるメンバーの資格と、それに含まれているすべてのものを与えてくれるのだから。そこで、われわれの計画の経済のこれ以上詳しい構想を練る前に、まさにそのメンバー資格に含まれている意味を手短に述べておくべき時であろう。

われわれは、世界中のそれぞれの国の首都の近くに支部大学を持つ、1つの国際組織を思い描いている。その組織は、自律的で、経済的に独立し、あらゆる政党からも独立している。1つの支部に所属していれば（教授としてであれ、学生としてであれ、同じことである）、すべての支部のメンバー資格が与えられ、外国の支部に滞在するために旅行することは、大いに奨励される。大学の各支部の目的は、近くにある首都の文化生活と、その文化生活の加筆に寄与することであるが、また同時に、国際的な文化交流を促進することができるし、またそれ自体で、専門化されない実験的学校および創作アトリエとして機能する。常駐の教授自身が創作者である。各大学のスタッフは、意図的に国際色豊かにし、できる範囲内で、学生もそうする。自主大学の各キャンパスは、実験都市の中核になる。実験都市には、あらゆる種類の人々が、短期間であれ長期間であれ、引き寄せられ、そして、うまくいけば、彼らはそこから、生活の斬新な——しかも人々の間にどんどん浸透していく——意義を汲み取るであろう。われわれが思い描いている組織の構造と機能は、きわめて柔軟である。われわれは、その組織が、たえず刷新していく文化的な力が徐々に結晶化したもの、つまり、いたるところで自らの波及効果を認識し発揮する創造的知性の永続的運動であると、考えている。

現状では、大学の日々の機能を正確な詳細にわたって記述することは不可能である。まず第1に、それは、短い序説を書いているたった1人の個人にとっては不可能である。先進的（パイロット）計画は、物質的な意味では存在しない。そしてそれは、一番最初から、イスラエルのキブツのように、共同で推進される企てでなければならない。また、機動的行動は、その場で（イン・シチュ）決定されなければならない、まさにその時に可能なものに左右される。この10年間、私の仲間と私は、（非常に部分的であれ）構築された状況における1グループ内部のさまざまな考えの相互作用から生まれるさまざまな可能性に驚かされてきた。そのような経験に基づいて、われわれは国際的な実験を思いついたのである。第2に、結果的に、私自身が前もって構想したいくつかの詳細が、集団の状況の自然発生にとって邪魔になりかねない。

しかしながら、経済構造の素描を試みることは可能である。

われわれは、利益が普及と研究に投資される、有限責任会社（〈インターナショナル・カルチュラル・エンタープライゼズLtd〉）を念頭においている。その収入の出所は、次のようなものになるだろう。

- 1、会員のオリジナル作品の販売から代理店が得る手数料。
- 2、「純粹研究」からひきだされる（工業的、商業的な）二次的応用の利用権から得られる金銭。芸術アトリエでしばらく過ごしたことがある人なら誰でも私の言いたいことが分かるだろう。その領域は無限で、広告から室内装飾にまで広がっている。
- 3、小売り収入。大学には、「生きている美術館」と、たぶん、良いレストランが入るだろう。小売りのために、また宣伝として、市街地で展示会場を借りることになるだろう。
- 4、映画や演劇の、あるいはシチュアシオニスト的な製作がもたらすような収入。
- 5、受講登録料。
- 6、寄付、贈物など。それらは計画の自律性を全く損なわないものに限られよう。

この行動の文化的可能性は無限であり、そして、行動のための時は熟している。世界は破滅の危機に恐ろしいまでに近づいており、心ある学者、芸術家、創造的な人々、教授たちは、どこでも、心もとない状態にいる。彼らは待っているのだ。表現のネットワークを作る——たとえそれをコントロールできなくても——のは、社会のこの階層であることを思い出せば、われわれは、何の困難もなく、自主大学が見えない蜂起の引き金であると認めることができるだろう。

アレキサンダー・トロッチ*17

*5：『エンカウンター』誌 1953年、〈文化の自由のための会議〉が創刊した英国の国際的文化総合雑誌。

*6：アーノルド・ウェスカー（1932-）イギリスの劇作家。仕立屋の子として生まれ、さまざまな職業に就いた経験に基づいて、労働者階級の生活を写實的に描く作品を次々に発表し、オズボーンに続く「怒れる若者とも」の1人とされた。労働組合の支援を得て芸術の大衆化をめざす組織〈センター42〉を1962年に結成、70年まで活動。代表作に『大麦入りのチキンスープ』（58年）『根っこ』（60年）、『ぼくはエルサレムのことを話しているのだ』（60年）から成る「ウェスカー3部作」。

*7：デイヴィッド・ロイド・ジョージ（1863-1945年）英国の政治家。90年に下院議員に当選、チェンバリンの帝国主義的政策を攻撃。1909年蔵相として、富者負担を増大する「人民の予算」を提出、10年には「国民保険法」成立によって社会保険制度の基礎を作る。16年に首相就任、連合内閣を組織し、戦争完遂に努力。19年には

全権大使として講和会議を組織、ヴェルサイユ条約を調。社会改革を唱えたが、労働党進出によって挫折する。

*8: 「センター42」 アーノルド・ウェスカーの訳註を参照

*9: ジョン・オズボーン（1929-） イギリスの劇作家 貧しい家庭に生まれ、演劇を志し、1956年初演の『怒りをこめて振り返り』で一躍有名となった。この作品の名から「怒れる若者たち」の呼称が生まれ、自らもその代表的作家とされた。他の作品に『芸人』（57年）、『認められぬ証言』（64年）。

*10: レイモンド・ウィリアムズ（1921-88年） イギリスのマルクス主義批評家。 ウェールズの労働者階級出身で、ケンブリッジ大学で学んだ後、1974年から82年まで同大学演劇学教授。その間、50年から74年まで労働党のシンパ、61年から66年までは党員として活動すると同時に、『ニュー・レフト・レビュー』誌の編集に携わる。文学批評以外にも、大衆文化・映画・エコロジー・政治など多様な批評を行い、小説や戯曲も書いている。著書に『文化と社会』（58年）、『田舎と都会』（73年）、『文化とは』（81年）など。

*11: セルジュ・ド・ティアギレフ（1872-1929年） ロシアの美術批評家・興行師。ペテルスブルクでモダニズム・グループを結成、1898年に『芸術世界』誌を発刊。1908年、パリでロシア音楽会を開催、09年、ロシア・バレエ団を結成、舞踏家ニジンスキー、作曲家ストラヴィンスキーを起用して成功を収め、革新的な近代バレエの道を開く。舞台装置にピカソ、マティスらの協力を得て、「天才を発見する天才」と称された。

*12: イートン校 英国の有名私立中等学校であるパブリック・スクールの1つ。国王ヘンリー6世が教会と国家に奉仕する青年の教育機関として、1440年に創設。オックスフォード大学とケンブリッジ大学に多くの卒業生を送り込み、英国の王族や指導層の教育機関として今日にいたる。

*13: ブラック・マウンテン・カレッジ 50年代初頭に米国ノースカロライナ州の山中に多くの芸術家が集まって運営した実験大学。全米から芸術家志願の学生を集め、教授陣も実際の芸術家を迎え（ロバート・ダンカン、ロバート・クリリーらのほか、サマー・セッションには、マース・カニングム、ジョン・ケイジ、バーナード・リーチなども教えた）、自主運営の理想的な芸術教育をめざした。また、前衛的雑誌『ブラック・マウンテン・レビュー』（54-57年）を刊行、小説家ケルアック、詩人W・C・ウィリアムズらが寄稿した。同校の学長で詩人のチャールズ・オルソンの提唱した「投影詩」（西洋詩の主知主義を批判し、身体や息を通して発現される詩人のエネルギーを重視し、詩はそうしたエネルギーの「投影」であるとするもの）に共鳴した詩人たちを「ブラック・マウンテン派」と呼ぶ。

*14: フランツ・クライン（1910-62年） 米国の画家。抽象表現主義に属する。50年代、白と黒の線を画面に走らせる絵画により自己の作風を確立、50年代後半には白・黒に赤・緑などを加えた作品を描いた。

*15: ロバート・クリリー（1926-） 米国の詩人。ブラック・マウンテン・カレッジなどで学び、W・C・ウィリアムズやC・オルソンの影響を受けた。平易なアメリカ語法を用いながら、心の揺れ動きを微妙なニュアンスで歌う独特の詩的境地を開いた。

*16: 〈ミュージカル・コーポレーション・オヴ・アメリカ〉 米国の音楽家の処遇改善や利益擁護を行った「全米音楽家組合」のことだと思われるが、不詳。

*17: アレキサンダー・トロッチ（1925-84年） イギリス国籍のシチュアシオニスト。1952年以降イギリスの雑誌『マーリン』の編集委員として活動していたが、55年にドゥボールのレトリスト・インターナショナルに参加するため、同誌を去る。SIのなかではセクション無所属で、1961年以降SI中央評議会のメンバーとして活動。1960年に米国で麻薬所持の疑いで逮捕された時にSIはその第4回大会でトロッチの逮捕を糾弾する決議を行い、ドゥボールとヨルンの名で『アレキサンダー・トロッチに手を出すな』というピラを配布した。トロッチはその後、196

4年秋に自らが推進していた文化運動「プロジェクト・シグマ」の最初の刊行物発行に際して、S Iを関わり合いにならせないために脱退。

『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』誌の紹介

幽霊が世界中に出没している、シチュアシオニスト・インターナショナルという幽霊が。古い文化のあらゆる権力は、聖十字軍に団結して、この幽霊を殲滅しようとしたり、あるいは、その名を騙って、身分詐称することでこの混乱が以前の安楽の状態に戻るようしようとしている。つまり、マルローとボムホルト、パリのシュルレアリスムとブタペストの社会主義リアリズム、スウェーデンのナッシュ主義者とミュンヘンの裁判官たちのことだ！

これらの事実から、二重の結論が引き出される。S Iは今や、あらゆる警察とあらゆる自由思想の偽造者たちから、1つの力として認められているのだ。

今こそS Iが、すでに登場したすべての文化ゾーンにおいて、自らの考え、目的、創造方法を、公表すべき時である。今こそS Iは、過去の精神の中で「シチュアシオニズム」について作られた伝説のすべてに反対して、シチュアシオニスト・インターナショナルそのものの根本的な新しさを訴えるべき時である。*1

コペンハーゲン、1962年10月

*1：『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』誌 S Iスカンディナヴィアア・セクションの雑誌。J・V・マルティンを編集長とし、ドゥボール、ベルンシュタイン、コターニィ、ラウゼン、ヴァネーゲームらから成る編集員体制で、第1号は62年10月にデンマークのコペンハーゲンで、第2号は68年11月に同じくデンマークのラナーズで、第3号は70年10月にコペンハーゲンでだされた。

構築された状況における反復と新しさ

何によって、前衛をその追従者から区別できるのか。また、どんな方法によって、どこであれ変化を手に入れることができるのか。それは実験によってである。実験は、管理されず、無意識的なもので、意味がなく、自発的なように見える。実験は、最初に反復されて、記述し分析できるものになる時に、意識的なものになる。その時、この反復が「有効」か否かを決定しなければならない。答がイエスなら、実験の記述は遊びの規則に昇格し、実験は遊びに昇格するだろう。

反復のない遊びはない。文化の頽廃期には、文化には実験するわずかな力も残っていないことが確認されてきた。しかしその頽廃は、遊びを再発見することによって終結する。人間の遊びは、1つの状況の反復によって作られている。状況は偶発することもある（その状況を構築する諸要因がわれわれの手中にない特に）。これは、1つ所与のものの反復の遊びである。また、状況は、実験的に創造されることもある（その状況を構築する諸要因がわれわれの自由になっている時に）。これは、1つの実験の反復の遊びである。

われわれは実験を望む。なぜなら、われわれは新しい遊びを望んでいるからである。遊ぶ人はまた、剽窃者でもある（われわれは剽窃者に反対ではない）。日常生活のなかで実験を行う者は、革命的な前衛である（われわれはその前衛である）。専門的剽窃者は、何の実験の仕方も知らない。専門的革命家は、遊び方を知らない。新しい遊びだけを専門にしたがる者は、遊び方を知らない。

革命は今日、（他から分解された専門としての）革命に対する批判以外の何ものでもありえない。その革命批判は、遊びを擁護するセンスを持たなければならない。遊ぶ革命家は、弁証法的矛盾を体現している。専門的革命家は、他から分離された新権力になって、その矛盾を阻害する。生に応えるには、さまざまな可能な手段がある。例えば、自殺、無知蒙昧化、実験、遊び。自殺と無知蒙昧化は、現在の社会から提供されている可能性である。実験と遊びを選択する道が開かれる時代に到達できるのだろうか。そのことは結局、どうすれば遊びとしての革命を行うことができるか、という問題に帰する。

われわれは、心理操作に反対しているのではない。ある種の操作が行われることは避けられない。しかしながら、われわれは、人間の卑小化にいそしむ体制側から、体制側が自由に使っている操作の道具を奪取したい。実際、幽閉されたわれわれの夢の解放のためには、われわれに対する操作の諸要因をわれわれ自身の手で奪い取る以外に、選択の余地はない、その時こそ、われわれは、これまでただ予感していただけだった領域を探究できるだろう。しかしまた、その探究を推し進めれば、われわれは、最も古くから知られていたものと出会うことになるだろう。すなわち、新しい内容の詰まった古い形式に、そしてまた、新しい枠組の中の昔の内容に。

私の友人の1人は、自分が招待した客を何も無い部屋に通す。加えて、彼は「役に立つ」家具の十分な一揃え——ベッド、たんす、テーブル、いす——と、何の役にも立たない、形容しがたい物体（オブジェ）を、客の自由になるようにしておく。客は、好きなように部屋に家具を入れられる。もしそうしたいなら、部屋の構造を変えることもできる。この友人は、こうして、プロクルステス*1の伝承の外部に立つ何人かの主人（ホスト）の1人になっている。（それに、現在の

社会全体を、プロクルステスが自分自身を客として迎える主人であるという逆説的なジンテーゼとして理解することも難しくはない)。その友人は、われわれが、われわれの部外者または敵たる人物にふさわしい雰囲気の場合によっては持ちかねない空間に、順応するように強いたりはない。彼はわれわれを、ひどいホテル・ルームと呼べるような、個性のない居住環境に追い込んだりしないし、かといって、ある等級の人々(その等級は彼らの平均能力に応じて考え出されたのだ)のための、設備の整った居住環境——つまり、快適なホテル・ルームだという評判のもののような——に追い込んだりもしない。

アパートの部屋は、街並みと同様に、そこに住む人々を心理的に操作する。とはいえ、アパートの部屋は、その人々によって規定されることもありえよう。それは、彼らの試金石、彼らの鏡ともなりうるのである。彼らの共鳴箱にも。もちろん、今日のアパートの部屋を、その住人を反映するものと見なすならば、住人たちの個性には何か全然うまくいっていないことがあると言わなければならない。また、アパートの部屋を、その個性のある部分が発揮されるべき場所と見なすならば、身体や心のどこかに障害を受けずに窮地を脱しえた人を讃えなければならない。

個人がその意味で受けた障害の程度を測るためには、彼がそれまで自由に使えた空間よりも広い空間を彼に与えて、それを彼のイメージで改造させてみるというテストを行うのがよいかもしれない。

われわれは、われわれ自身を自然に反対する存在として規定しているのではない。いずれにせよ、われわれは、人間の卑小化のさまざまな技術の総和としての現代都市に反対なのである。そこで何か見つかるというのか。既製品のアパートは、プライベートを装った規格化にすぎず、テレビは、人間的接触を装った孤立化にほかならない。デパートは、富裕化を装った画一化だし、気晴らしの場所は、自己実現を装った白痴化だ。そして街路は、交通を装ってはいるものの、孤立の鎖である。自然はかつて生命の空間であった。それと同じように、今や都市が、われわれの現在の力によって、生命空間にならなければならない。かつて自然は基本的な欲求を満たすものであると考えられてきたが、既製品アパートは、より高級な欲求、すなわち微妙で多様な欲求を満たすためのものであると主張されている。しかしながら、生きる上で最低限(ミニモム・ヴィタル)の平均的能力だけを認められた人間の公式モデルを満足させるために作られたアパートが、あらゆる現実の個人を切り刻む以外に何の役にも立ちえないことは明白である。

かつて人々は、「都会のジャングル」と言った。今日では、組織的な規格化と多彩な退屈の中に、ジャングルの残滓を見つけることは難しい。最近私が聞いた話では、ある建築家が、言われるところによれば狂気の発作で、自分のアパートの部屋のすべてのものを破壊した。電話もカメラも、そして躊躇せずに冷蔵庫も。彼の行動は、反感をそそるものではないが、しかし何の効果も得られない。われわれは、断片的な行動にとどまることはできない。いつの日か、彼とわれわれはしかるべき出会いをするだろう。そして一緒になって、新しい種類のジャングルと草原(ステップ)と迷路でできた新しい都市の中に冒険を見出すであろう。

歴史の本の中には、祖国という観念が見い出せる。その種の言葉には、地理的關係や周囲の環境のうちに1人1人の個性に対応するものがあるはずだという約束が込められてきた。その種の言葉は、思考と夢を駆り立ててきた。祖国は、思想と行動にとって1つの集合的な空間であり、

人々と共同体の領土との接点であると、言われていた。今日では、われわれの祖国がいたところにあることは明白である。あるいは、より正確に言えば、われわれの祖国はどこにもない。しかしながら、シチュアシオニストたちが統一的都市計画の基礎を実験しようと努める時、共同体の実現の可能性は彼らによって提示される。疎外が克服されうるのは、人が自己を再発見し、自己形成することができる場合だけである。

シチュアシオニストは国際人（コスモポリタン）ではなく、宇宙飛行士（コスモノート）である。シチュアシオニストは未知の空間に飛び出し、そこに、卑小化されず卑小化されえない人間の住むことのできる小島を築く勇気がある。われわれの祖国は時間の中に（この時代の可能性のうちに）ある。それは絶えず勤めている。

もちろん、われわれには、どのような祖国も失う必要がなかったのと同様に、また、昔の歓待や素朴な遊びを復活させたいとも思わないのと同様に、どのような自然への回帰も必要ではない。むしろ、生の不可欠な状況を認識し、それをより上位のレベルで再現することが重要なのである。

ウーヴェ・ラウゼン*2

*1：プロクルステス ギリシア神話中の強盗。捕らえた旅人を自分の寝台に寝かせ、寝台の長さに合わせて旅人の身長を切ったり引き伸ばしたりした。それで、杓子定規、容赦ない強制、の比喩として「プロクルステスの寝台」という表現がある。

*2：ウーヴェ・ラウゼン S I ドイツ・セクションのメンバー。1959年に最初のS I ドイツ・セクションを構成した〈チュプール〉のメンバーではなく、〈チュプール〉派とは距離を置いて、61年夏頃からS I の活動に参加、同年8月のイエーテボリでのS I 第5回大会以降、S I 中央評議会のメンバーとなる。62年1月に〈シュプール〉派がS I を除名された後、1963年4月から新しいドイツ・セクションの機関誌『デア・ドイチェ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』（1号のみ）を発行するが、63年10月に自らもS I を除名される。

あなたはS I〔シチュアシオニスト・インターナショナル〕と同意見なのですね！

あなたはS Iに加入したいのですね！

私たちはあなたに、事前のちょっとした課題だけをお願いします。それは、あなたが私たちの諸問題にどれだけ近づいているか、また、あなたが私たちの企てに十分に協力できる能力を持っているかを、客観的に確かめる（あなたのためにも、私たちのためにも）ためです（S Iは弟子は欲しくありません）。

1、S Iによって公表されたテーゼの中から、あなたが重要だと思う点を1つ、あなた自身で選び、いくつかの議論と、そこから考えられる帰結を展開しなさい（最低限、タイプ打ちで1ページ。枚数の上限は設けません）。

2、S Iによって公表された同じテキストの中から、批判の余地のある点を1つ、あなた自身で選び、その見解を打ち砕きなさい（枚数条件は右に同じ）。

注意——これは無意味な遊びではありません。S Iは、自らの基本理念を再検討し乗り越えるために、日常的にこのようなことを行っているのです。あなだけ、たまたま、すでに批判されている点に行き当たるかもしれませんが、また同様に、これまで私たちによる検討が不十分であった見解に対する正当な批判を始めるかもしれません。それゆえ、あなたの批判は、うまくなされているなら、いずれにせよ正当なのです。そしてたぶん、新しいことを提起するものとして、役立つこともあるでしょう（1）。

*1：シチュアシオニスト・インターナショナル反一情宜局 原書ではこのテキストは英語版とフランス語版の併記になっている。両版の内容はほとんど同じ（若干ニュアンスの相違はあるが）なので、ここでは両版を典拠として1つの邦訳にまとめた。「情宜局」はパブリック・リレーションズ・サービスの訳で、「公報活動（PR）局」とも訳せる。

「シチュアシオニスムとは何かをここで説明するにはスペースが足りない。さしあたり、シュルレアリスム、ダダイスム、実存主義などと同様に、現代思想の1スタイルだということを知っておけば十分である。」

ピエール・ピュトマン (1)、
『ラ・ゴーシュ [左翼]』誌、1962年10月12日号

「現代を大変革する予定のこの運動は、1959年にシュヴァービング [ミュンヘン市内の1区域] の地下酒場で生まれた。(.....) 彼らの「思想」(?) は国境の外で信奉者を生み、まもなくシチュアシオニスト・グループが、パリ、チューリッヒ、ブリュッセル、テルアヴィヴで創設されることになった。」

M・Sch、
『ジェルミナル』誌、1962年6月3日号

「彼らの主な活動は、急激に高まる精神錯乱である。(.....) 可能な限り多くの言語で、シチュアシオニスト・インターナショナルは、卑猥きわまりない表現のぎっしり詰まった文書を外国からまき散らしている。われわれの意見では、ミュンヘンの法廷は、彼らに禁固と罰金の刑を宣告することで、彼らに面目を施しすぎた。」

『ヴェルニサージュ』誌、第9-10号、1962年5-6月

「外国で、(ドゥポールは) ベルナル・ビュッフエ (2) と同様に、ガマの油売りみたいな口上を述べ続けている。(.....)」

『カイエ・デュ・レトリスム』誌、第1号、1962年12月

「まさにその妥協のなさによって、トロッチは自分の才能を見殺しにしている。(.....) カインの末裔全員がしがみついているこのメデューズ号の筏 (3) の上では、おそらく、数多くの幻覚と妄想があるだろう。しかし、ヒューマニズムが、操られた野蛮を超えて生き延びるとすれば、それはおそらく彼らのおかげである。(.....) シュルレアリスムの警戒心をなんとしても守り抜

こうという若いアメリカ人作家たちの不器用だがまじめな努力のうちには、何か悲憤で、頭が下がる思いのするものがある。」

ジャック・カポー（４）、『レクスプレス』誌（５） １９６２年６月７日号

これらの引用は、オスカー賞の怪奇幻想的支離滅裂部門賞——いつかS Iが授与されるだろう——をめざして選ばれたものであるが、どんな自発的なユーモアからも全くかけ離れた文脈から出ている。

*1：ピエール・ピュトマン フランスの建築批評家。著書に『カツオブシムシと毛皮』（６７年）、『水をかけられた撒水器』（８７年）、『ベルギーと他の国の工業建築』（９２年）など。

*2：ベルナール・ビュッフェ（１９２８－） フランスの画家。 １９４７年に２０歳で批評家賞を獲得し、一躍、大衆的な画家となった。ロンドンやパリ、ニューヨークなどの現代都市の風景や人物を描いたその絵は、垂直線のリズムを強調した単純な描線と黒白の色彩という常に変わらぬスタイルで描かれ、現代のスノッブたちに受け入れられた。

*3：メテューズ号の筏 もともとは１８１６年の年のフランス船メテューズ号の遭難事件に取材したフランス人画家ジェリコーの代表作で、１４９名中１５名の生存者が１２日間の漂流のすえ救助される場所を描いたものであるが、比喩的に、「極限状況」も意味する。

*4：ジャック・カポー フランスの文学批評家。著書に『失われた草原——アメリカ小説の歴史』（６６年）、『トーマス・カーライルと鎖に縛られたプロメテウス』（６７年）、『エドガー・ポー』（７７年）など。

*5：『レクスプレス』誌 １９５３年創刊の週刊誌。最初はマンデス＝フランスの政治的立場を支持して、ブルジョワ左派の機関誌的刊行物の役目を果たした。５５年、マンデス＝フランス、ギー・モレ、ミッテランなどの共和主義戦線の日刊紙になろうとするが失敗。６０年代初頭のアルジェリア戦争中には、モーリヤックらが紙上で戦争批判を行ったりしたが、６４年以降、米国の『タイム』誌に類似した総合週刊誌の体裁に変更し、現在に至る。

『1945年以降のパリの文化的前衛』*1（ギー・ル・プラ出版社、1962年）の最終章で、ロベール・エスティヴァル*2はシチュアシオニスト理論の一解釈を提示しているが、われわれの誰一人として、決してそれに賛同できない。なぜなら、この著者はここで、S Iが実際に観察される分野に専門化された社会学を適用しているが、そのような理解はそれ自体、われわれの諸テーマ全体との関わりにおいて判断されるべきものであり、また、外部の独立した測定装置と見なすことのできないものだからである。概念の扱い方や社会全体の歴史的評価について、エスティヴァルとわれわれの間には明らかに、いくつかの基本的な対立がある。しかしここでは、全く別のレベルで、次のことを指摘するにとどめておこう。シチュアシオニスト理論を説明するものとして挙げられている45の引用のうち、S Iの結成後のテキストから引かれているものはたった5つしかなく、しかも、そのうちのどれ1つとして、1960年中頃より最近のものではない。かくして、いまだ雲の中に隠れている1つの総体の歴史的起源の探究をこのようにやみくもに重要視しているせいで、エスティヴァルは、自分の研究している当のものを理解できないはめに陥っている。そのことの真の意味をより確実に探求するには、そこから生まれたいっそう高度でいっそう複雑な展開に照らしてみるべきなのに。情報のこんなとんでもない選別という点から見て——また、われわれと彼との方法論的違いは度外視して——、われわれは次のように言わなくてはならない。見かけとは裏腹に、S Iはエスティヴァルの本の最終章の主題ではない。



『現代への序説』（ミニユイ出版社、1962年）の結論部で、アンリ・ルフェーヴル*3はS Iに早まった賛辞をいくつかくれているが、われわれはそれに合点がいかない。まず第1に、われわれは、青年と同一視されるのはお断りである。そうした同一視は、その後の展開を見守る必要のある、季節の抗しがたい力や気まぐれな社会的変動の何がしかを、諸問題に付与することによって、その問題を無効にしてしまうための優雅な方法だからである。われわれとしては、われわれは将来を代表するつもりはない（計算可能な将来を代表できるのは、ある1つの現在のその次を管理する目的のもとに養成された若い人材、例えばサン・シール〔フランス陸軍士官学校〕やロシア共産党幹部養成学校の学生、だけである）。そしてまた、われわれは、未来についてのそんな抽象的な権利だけで満足するつもりもない。問題は次のことである。いったいどんな無知や、だらしなさや、慎重さや、たわいない友情を理由にして、現在の研究や主義主張が、他の研究や主義主張によって無視されたり、隠されたり、取って代わられたりするのでしょうか。同じく次のことも問題だ。誰が現在の几庸さの共犯者で、誰がそれに反対し、誰が妥協をもくろんでいるのか。——しかも、そのような妥協がうまくいったとしても、それが意味することは、現実の異議申し立ての「青年」がよそからやってくるのを待たなければならないということにすぎないだけになおさら、そのような妥協は空しいものである。実際、どうしたら、そのような青年

、つい先頃までの長期にわたる不誠実な愚行の策動者たち——彼らは今なお、近代化という釉薬を塗ることで名誉を挽回しようと試みている——のなかに混じることができるというのか。「ある時代に可能な対立と和解の度合いは、偶然的なものである」とヘーゲルは言う。1960年代に顕著に変化しつつあるのはそのような度合いではない。偽りの和解を受け入れずに、対立の現実をありのままに認めるために必要なのは、主観的な知性と勇気の度合いである。この点に関して、客観的条件の成熟というものはないし、極左というものもない。自分の敵、すなわち自分の真実はすぐに見つけられる。

納得できない第2の点は、既に述べたことを見事に説明するものである。それは、S Iと共産党内の反対派青年グループとの比較である。そのグループは、あまりにも地下深く潜行してしまったので、全然何もしていないし、何も発表していないようである。ここでわれわれは彼らの痛い所を突いている。かくも美しき青年は、先輩だちとそっくり同じように、疑い、自らを探し求め、どっちつかずの態度をとる。まさにそんな具合に、人々は何も見つけず、また人々は、若さゆえの性急さ——実際、それは時が癒してくれよう——から、現在という汚泥を全部受け入れるのである。そのうえ、ルフェーヴルは、彼らとわれわれの対立点として、彼らはソ連に絶望していないと言っている。われわれだって絶望していない。ソ連における（そしてもちろん、イギリスにおいても）なんらかの革命的社会の将来は、たぶんファノン主義者*4がどう考えようとも、モーリタニアにおけるよりも早く実現可能と思われる。この青年グループは、「自分の時代が来るのを待って沈黙している」（それではいったい、歴史にわれわれの時代を刻印するのは誰の役目なのか）が、しかし、彼らがもう少しロシア（そしてもちろん、イギリスも）における現在の権力の「絶望的な」現実を研究していたとしたら、PCF〔フランス共産党〕の中にこんなに巧みに隠されてしまうこともないであろうに。



何人もの人たちが最近われわれに知らせてくれたところによれば、どこかで何かちょっとした文化的な役割を担う人々が、しかじかのシチュアシオニストを個人的に知っているとか知り合いになったとか言い立てて、しかも、彼らはわれわれについての「思い出」の中で称賛と非難をない交ぜにしている、とのことである。ほとんどの場合それは嘘であると、われわれは本誌の読者に警告しなければならない。われわれはまた、詐称者を見破るのになかなかよいテストを提案することさえできる。それはすなわち、本当にわれわれと関わったことのある人々は悪口しか言わない——われわれに似た少数の者たちは別だが——し、極端な誹謗中傷に及ぶことさえ厭わない、ということである。S Iとの接触についてのこれら偽りの思い出の意味とは、いったい何だろうか。それは単純なことだ。われわれに出会うのは簡単ではないのである。われわれは対話について、その初歩的な基礎から始めるのに十分なだけ好意的な考えを持っている。その基礎とはつまり、対話が不可能なことが確実な相手には、ただちにうわべだけの対話を拒否するということである。かりにわれわれが近年の芸術界や文化界（その中でも特に、惨めなモダニスト一派、す

なわち、今なおそこに自分の墓穴を確保しようとしている一派) のささやかな社交辞令や論争や交流に加わっていたとしたら、われわれは誰からもまじめに理解されるに値しないものになっていることであろう。そのような芸術界や文化界は、通常、われわれの側からのボイコットに対して、われわれの存在を表向きは無視することで応じてきた。今や全然知らないふりをするにはもうS Iがけっこう知られすぎてしまったために、そして、その連中は、われわれに近づく機会が依然としてほとんどなく、しかもその次第を事細かに白状するつもりも毛頭ないのだから、彼らにとって有益なのは、すでにもうS Iに接触したと言い立てることなのである。それゆえ、贋物に用心すること。なんといっても、皆が皆S Iから除名されるチャンスがあったわけではないのだから!



ドイツ語でのS I誌の発行は、幾多の困難のせいで遅れており、1963年の最初の四半期になってようやく開始されるであろう。その宛先は、ドイツ、ミュンヘン1、私書箱866号、『デア・ドイチュ・ゲダンケ〔ドイツ思想〕』誌。『シチュアシオニスト概念小辞典』は、1962年2月にCC〔中央評議会〕によって刊行が決定されたものであるが、これまたかなりの遅れをきたすであろう。しかしこれはおそらく、内容をより充実する方向に変更されるだろう。『シチュアシオニスト革命(シチュアシオニスティスク・レヴォリューション)』誌の宛先は、デンマーク、ヘルステッド＝ラナス、クリスティネリュスト。『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』誌の新しい宛先は、パリ、私書箱75-06。S Iのオランダ語での出版物については、アントワープ、パールデンマルクト二番地、ティエンポント喫茶店のヤン・ストリィボッシュ*5と接触するのがよい。それからイギリスについては、ロンドンNW3、ヒース街32番地、アレキサンダー・トロッチ。



いくつかのシチュアシオニストのテキストが、「革命的な研究と方針の紀要」の副題のついた『ノート・クリティーク』誌(ボルドー、パストゥール通り25番地)の第3号に再録された。この号は全体として、以前の号で議論された路線選択(オプション)のいくつかについて、明らかに前進している(ルフォールの組織論など)。決定的な前進が示されるとすればそれは、このグループ自身の見解を、より自律的で首尾一貫した形で発表することによってであろう。このグループは、今のところなお、外部勢力——そのうちのいくつかは相容れがたいものである——を優遇しすぎている。



ナッシュ主義者の弱小ギャング団——彼らの唯一の公の拠点はずウェーデンにあったが、しかし彼らは、そこで何人かの移民を教育して母国に送り返し、その国の混迷を助長しようと試みていた——は、もっぱら嘘を弄することにより、1つにまとまり、しばらくの間存続した。それらの嘘のうちには、ただ滑稽なだけのものもあるが、ひどく醜悪なものもある。醜悪な嘘のうち、8月のストックホルム宣言の中にある、S Iに対する非難に応酬しておこう。それは、S Iがミュンヘンで裁判にかけられたドイツ人だちとの連帯を打ち出したのは、「評決が下された後のことでしかなく（……）意味のない行為で、その日のかなり遅い時刻に」であると非難している。しかし、法廷へのわれわれの介入はスキャンディナヴィアの報道機関によって報じられさえしていたのだ。しかも、これらナッシュ主義者たちは、何人かの除名されたドイツ人の裁判では、ナッシュ本人が共同被告人であるところら中に信じ込ませるほどまでに「連帯して」いたにもかかわらず、その後、同じ新聞法違反でいっそう重大な嫌疑をかけられたラウゼンの裁判——これは本当の裁判である——を人々が口にすることすら阻止するために、スキャンディナヴィアで、最大の圧力をかけたのだ。なぜなら、ラウゼンがまだS Iにいたからである。これらの嘘があまりにひどいことが明らかになったので、新聞と大衆をあれほど愛するナッシュ主義者たちも孤立するはめになった。ナッシュ主義者たちは、自分たちの行動にその名前を紛れ込ますことで、できるだけ多くの人々を巻き添えにしようとして全力を尽くし、公衆からの冷酷な否認をわが身に招いた。彼らは四分五裂し、彼ら内部の合意は、商売のチャンス次第の純粋に確立論的な組合せに従って、疲れるほどのリズムで、崩壊と成立を繰り返した。そして、彼らのたった1つのオリジナルな原則（彼らは、除名されたので、自分たちが除名の敵であることを発見した）に従って、彼らが誰でも入れるように開いておいた扉は、次の瞬間には、彼らが走って逃げ出すのにも役立った。これらの脱走兵のうちの何人かはS Iに志願しに来たが、S Iは、いかなる審議も例外もなく、彼らナッシュ主義を経た者たちを追い返した。

結局、壊走のなかで、ナッシュ主義者たちは、彼ら自身の思想を出すことで一騒動起こさざるをえなかったのである。というのも、S Iの思想は、危険なほど知られすぎたからであり、オルフス〔デンマークの都市〕大学で11月末にJ・V・マルティン*6によって始められた新しいスタイルの講演会の後では、特にそうだからである。彼らは、1962年12月のコペンハーゲンでの最後のナッシュ主義陣営のデモンストレーションにおいては、「シチュアシオニスト第2インターナショナル」などというはったりを言うことさえやめてしまった。そして、ポスターを通して知れ渡ったこの純粋なナッシュ主義思想は——彼らが既に8月に賛同していた改良主義とある種の伝統とを大きく越えてしまい——文化儀式に賛成して遊びの状況に反対する攻撃になってしまった。それに加えて、神と化した唯一の個人についてのメシア信仰的テーマの復活と、このよく知られた歌の続きのすべてになってしまったのである。

そんなわけで、この最初のナッシュ主義——別のナッシュ主義だってあるだろう！——は、S Iに対して派手に（スペクタキュラー）反対する企てから、埃のようにして生じた。スウェーデンでもオランダでも、また特にドイツ——ドイツでは観念論的ナッシュ主義の雑誌『ウンフェ

ルビントリッヒ・リヒトリニエン〔拘束力のない方針〕』が、終末論的戯言と「リーダー狂信」への回帰の中に、シチュアシオニストの思い出をこっそりと混ぜ合わせているのであるが——でも、ナッシュ主義の悪影響は、もはやごくわずかしは見られない。結論として次のことを指摘しておこう。われわれの知る限りでは、ナッシュ主義者の平均寿命は11週間であった。



ミュンヘンでシチュアシオニストに対して開始された裁判については、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第7号51頁〔本書第3巻231—232ページ〕に報じたが、その裁判の結果、この件以外の別の点に開する穏健さのせいでその間にS1から除名された4名が、5月4日、執行猶予付き禁固5ヵ月半の刑を宣告された。年末頃の控訴審では原判決は維持されたが、禁固期間については減刑され、やはり執行猶予付きであった。この第2審は、おまけに、彼らのうち隠れナッシュ主義者になった2名に対して、11月4日に間の悪い声明を発表する機会を与えた。その声明は、それまでの、彼ら——および彼らと連帯した人々——の集団弁護の立場をひっくり返して、彼らがポルノ作家だとする馬鹿げた起訴条項の1つを認めている。そしてその声明を出した人々は、意地になって、アレティーノ*7、サド、ミラー*8、ジュネ*9や古典作家たちを引き合いに出して、ポルノ作家であることはまさしく自分たちの権利であると主張している。そんなに大それた比較をしなくても、彼らが当該のジャンルで全く無価値であることは明白であるだけになおさら、あきれかえってしまう言いぐさである。

ウーヴェ・ラウゼンは7月5日に判決を言い渡されたが、彼だけが実際に3週間投獄された。S1は、5月4日の公判に抗議したのち、2回ビラを撒いた。6月25日*10にはこの事件全体について、7月16日にはラウゼンの有罪判決について（『文化における不快』*11）である。



レトリズムは今なお存在する。最近の出来事としては、お馴染みのルメートル*12が二重人格化した。チェスタトン*13の小説の主人公「日曜と呼ばれる男」*14にだんだん似てきた彼は、自分自身に対する反対派を組織し、タイプ印刷された2つの小冊子で自分自身と激しく論争している。その小冊子に堂々と示されているのは、些細な額の収支計算なのだが（両者の作品を封筒に入れる労苦の代金として、一方が他方に400旧フランを支払う義務があるのに、なかなか承諾しない、など）。それでもなおS1を攻撃する余地があって、彼の推算では、S1は、転用という方法を放棄することで、忌まわしい綱領のちょうど3分の1を失ったそうである。彼はとどこで情報を手に入れたのだろうか。謎である。ルメートルがその同じ文書で、われわれが相変わらず漂流をととても好んでいることを、忌々しげに認めているだけに、ますます不可解な謎である。しかし、G・ケラー*15の言葉を惜りて言えば、こうなる、「ガルトンの装置のイラスト*16によって

明示されたわれわれの方法のおかげで、われわれは、転用〔＝方向転換〕が漂流の一般的プロセスの適切な細部であるということ、一望のもとに見ることができるようになった。この場合、問題なのは還元ではなく乗り越えである。というのも、数々の転用〔＝方向転換〕を伴わない漂流などというものはありえないのだから。転用はそれ自体、漂流のさなかに区別すべき2つの立場に応じて、区分できる。すなわち、運動に対して受動的な反対に出会うか、それとも能動的な反対に出会うか、つまり、抵抗かそれとも反作用か、に応じてである。転用は、障害によって強いられた必然的結果である。この障害は、心理的なものであることも、物理的なものであることもある。しかし、それを克服する転用の瞬間は、必然的に、不思議な、意外な出会いの瞬間であり、そのような出会いはすでにランボーが明確に示したところのものである。心理の動ききにおいては、転用は、明らかに通常の連想の連鎖とは逆のものであり、それは、強いられた対象に付与された概念を完全に転位する（正確な同定が不可能になる）ことによって、そうなる。そういうわけで、転用のおかげで、ありふれた習慣の中では基本的に理解できないでいたテキストが読めるようになる。漂流の場は、——詩に関してであれ、『フィネガンズ・ウェイク』*17に関してであれ、あるいは都市、風景、家、迷路、等々に関してであれ——作用している多種多様な転用〔＝方向転換〕の複合体ないしはネットワークである。慣性——すなわち直線運動——の転用が少しでもなければ、漂流はできない。このことはきわめて自明だから、転用なき漂流の可能性などというものは、明らかに議論に値しない、全くのナンセンスと見なされるべきである。」



マリリン・モンローの死*18に関して、ゴールドマンは、1962年9月6日付の『フランス＝オペルヴァトゥール』誌で、しばらく前から彼が常に論じてきた文化の崩壊についてのどの論考よりもけるかに優れた記事を書いた。かつて彼が1961年に単なる仮説として提出した諸観念（詳しくはこちらを参照のこと）は、今や、彼の論証の基礎となる確かな確認事項として提出されている。芸術における対象の不在と破壊というテーマ系を、彼は、今や明白に、分業化された労働と受動的な余暇の消費とに結びつけている。彼は、別の文化が出現するかどうかは、人間が自分の労働の用途を自由に決めることができるようなる——それは、実行者と快適な心理操作によって物象化された社会に対する唯一の代案である——かどうかにかかっている、とまで言いきる。このことが、彼が研究のテンポを速めたゆえの成果であるか、あるいは彼の読書経験における空白がうまく埋められた結果であるかはさておいて、結局のところわれわれは、彼を以前よりずっとよく理解しているのである。



ベン・ベラ*19は、彼にとっては必然的に見えた何件もの解任と逮捕を行った後、1月初めにイ

タリア通信社の特派員に語ったところでは、アルジェリア憲法制定議会——そのメンバーは全員、彼自身が任命した——の全会一致の投票を論拠にして、次のように結論した。「アルジェリアに反対派はいない。少なくとも、今はもういない」。それにしても、独立アルジェリアが、政令と法律によって、階級の廃絶、豊かさ、大衆の自立、人間関係の透明さといったものを実現したと信じるほどのおめでたい空論家（イデオログ）などいるわけがないのだから、次のように結論付けざるをえないだろう。アルジェリア革命は凍結された。それもたそれもたぶん長期にわたって。

アルジェリアの革命的大衆は、とことん戦い抜き、自分たちの知っている恐るべき敵にはすべて勝利した。しかし彼らは、予想だにしていなかったよく知らない敵対勢力に、あっけなく負けてしまった。そんな勢力と対決する準備など全くできていなかったからである。FLN〔アルジェリア民族解放戦線〕の指導部は、確かに、一枚岩の団結という不寛容な（テロリスト）イデオロギーを長年にわたって組織してきたが、そのイデオロギーの背後では、とらえがたい動機を持つグループどうしが、指導者レヴェルで、激しく衝突し合っていたのである。アルジェリア人の置かれた過酷な諸条件と孤独な闘争の長さのせいで、革命の明確な計画は未発達だった。明確な計画がなければ、差し迫った闘争の士気——それはそれ自体のうちに希望の全体を含んでいる——があっても、その勝利は大いに失望させるものになってしまう。アルジェリア人を支援したフランス人はほとんど皆無だった。支援という語を、ただ解放戦線のスーツケースを運ぶ²⁰だけではなく、主要な問題の理解のために現実主義的な批判と理論の部分も支えるという意味で用いるならばである。その問題とは、フランス軍と人種差別主義的少数派の敗北に際して必然的に生じた問題のことである。逆に、一機関をそっくり丸ごと承認したがる傾向——それは左翼急進主義キリスト教徒や失望して「アルジェリア党」に移ったスターリン主義者に見られる特徴である——は超人民戦線主義的な幻想を助長した。しかしおそらく今日では、その幻想は破れ去り、反対側の極端へと転じていることだろう。すなわち、あまりに意外な結果を目の当たりにしての、茫然自失と落胆へと。

もっとも、1962年夏の危機において唯一の意外な点とは、まず、非常に簡単なものではあるがどれも同じような方針を掲げて権力を掌握するために闘った武装集団の形成の極端な速さと極端な混乱であり、次に、武力衝突に反対（ゼネストの脅しなどで）しながら、同時に、対立党派をはねのけようとした自発的な運動グループの脆弱さであった。

すべては、〈政治局〉が権力を奪取したやり方でもって、9月に決着がついた。もっとも、第4管区の引っかき回し屋たちの無実は証明されなかったが。彼らは、アルジェの「自治ゾーン」の清算の際に奇妙な行動をとり、また——アルジェへの道を封鎖して——武力による決着を繰り延べるための手をなんら打たなかった。その武力による決着は、彼らのたちまちの失墜となって現れたのみならず、また、アルジェリア解放運動全体にとって後戻りできない変更でもあったのである。オルレアンヴィル²¹周辺とボガリ周辺の戦闘が意味するところは、それ以後、アルジェリア革命の陣営において、討論が重武装によって打ち切られるだろうということだったのである。

労働者としてフランスに働きに戻ってきたり、アンゴラの反植民地主義闘争を続行するために

出発しようとしているアルジェリアの闘士たちの失望以上に、また、法律や規則におけるイスラム化の表れ以上に、あるいはまた、慎重な農地改革や、政府の手先による組合大会の露骨な横取りまで約束された農民たちが行った最初の一揆以上に、われわれから見ると、ある1つの特別な事実こそが、アルジェリアの革命運動が社会の掌握にどれほど失敗したかを明らかにしてくれる。その事実とはすなわち、1月2日、アルジェリア・プレス・サーヴィス通信社が、その第1報で、9月の戦闘が「1000人以上の死者」を出したことを明らかにしたことである。2、3日後、同通信社は、その件で犯した誤りを訂正し、死者10人ぐらいと見積もった。この2つの数字が相次いで発表されたことだけで、今やアルジェリアに近代国家が確立していることを証明するのに十分である。



1962年10月、カトリック教会の最後の公会議*22がローマで始まった。



キューバをめぐる危機*23は、1962年4月の本誌の「冬眠の地政学」における2つの主張の例証となった。まず第1に、決して熱核戦争をしないが、「起こりうる戦争のスペクタクルのなかで常により高いところ」へ昇るといふ、ロシアとアメリカの共同決定。しかるに、米国では、そんな時でも、「防御率」のかなり低い無用の核シェルターを作ってきた。もう1つは、大きく前進したキューバ革命を、新レーニン主義イデオロギーの選択によって、清算しようとして企てたこと。初期段階のキューバの指導者たちが、自分たちはよそから派遣された官僚によって、やすやすと単一政党の主導権を奪われたりしないだろうと明言した（3月26日のカストロ演説*24）にしても、彼らはまた、自国の防衛をロシアの兵隊と核ミサイルに盲目的に任せきっていることも明らかにしたのである。ロシアは、芝居がかった世界戦略に関する自らの誤算のせいで、その点における全面的な潰走——それは世界分割のバランスにおける新時代を開くものである——を余儀なくされたがゆえに、キューバの指導者たちを見捨てた。また、ケネディ政権は、何が何でもカストロ体制を政治的に転覆すること以外にいかなる「戦略上の」関心もない。この2つのことから、非常に危うくなっているキューバ革命の命運は、ひとえにラテンアメリカの大衆の手中にあると言える。この潜在的な蜂起の脅威だけが、今なおキューバをアメリカ軍の上陸作戦から守ってくれているのであって、フルシチョフなり他の誰かなりによる保証によって守られているのではない。すべては、結局、キューバが今後どんな新しい社会の範例を示してくれるか、にかかっている。その点については、権威主義的な新レーニン主義（労働手帳）と、アメリカの封じ込め作戦による経済的、軍事的な圧迫とが相俟って、こうした範例を墮落させる方向に向かっていると云わなければならない。



シチュアシオニスト・インターナショナルの第6回大会が、1962年11月12日から16日にかけて、アントワープで、すばらしい建築条件と遊戯条件のもとに、開催された。今大会では、イエーテボリ〔の第5回大会〕以来の、S Iの急進化の諸問題全般が討議された。すなわち、シチュアシオニストとしての首尾一貫性、外部の好意的な諸潮流や敵対的な諸潮流とわれわれとの関係を正確に規定すること（反ナッシュ主義闘争）、当面の非合法活動と実験である。

今大会は、S Iの組織再編を決定した。すなわち、S Iを唯一の統一中心機関（センター）と見なし、国別のセクション分けを廃止することにしたのである。このセンターは、地方のグループから派遣された代表で構成されるものではなく（そのようなグループが、結成された時からすでに、S Iの外で自律性を保つことを、われわれは奨励するだろう）、自らを、新しい異議申し立ての理論の利害を全体的に代表する機関と見なすものであるが、しかしそこから、下位勢力に対するいかなる指導的な役割も導き出さないであろう（「われわれの権限……われわれはそれをわれわれ自身からしか委任されていない」）。アントワープで任命された最新のCC〔中央評議会〕は、翌年に候補者の中からS I——その頃には、そっくり例のセンターに変わっている——の参加者（全員の理論的、実践的参加の平等なレベルで）として認められる者を選ぶ任務も持つことになるわけであるが、このCCはミシェル・ベルンシュタイン*25、ドウポール*26、コターニイ*27、U・ラウゼン、J・V・マルティン、ヤン・ストリィボッシュ、A・トロッチおよびヴァネーゲームから成っている。

S Iの実践的作業は、文化的、言語的な条件のまとまりに即して、地域別に分けられた。シチュアシオニストは、自分の出身や地理的な位置に応じて、反NATO〔北大西洋条約機構〕の次のようなゾーンに向けた、われわれのセンターの特派員の任務を分かち持つことになる。第1の地域（北欧）は、スカンディナヴィア諸国とアイスランドから成る。第2の地域（中欧）は、東西両ドイツ、オーストリア、スイスを含み、加えて東欧に向けたわれわれの接触を展開しなければならない。大西洋地域は、ブリテン諸島〔英国、アイルランドなど〕と米国から成る。第4の地域（西欧）は、フランス、ベネルクス三国、イタリアを受け持ち、加えて、密かに、イベリア半島も引き受けることになるだろう。最後に、まだ潜在的なものでしかないが、第5の地域（アフリカ・アジア）は、世界の半分を占めるこの地域における、現在はまばらなわれわれの連絡網をまとめるのに役立つであろう。第4の地域が、さしあたってそれらの連絡網を統括する任に当たることになるだろう。S Iの実質上の4つの地域は、できるだけすみやかに、それぞれの雑誌を持つ必要があるだろう。なお、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌は、第9号から、西欧地域のシチュアシオニストの表現に専用のもので充てられるだろう。

S Iの第7回大会はウィーンで開かれることが、アントワープで決定された。

*1: 『1945年以降のバリの文化的前衛』 ロベール・エスティヴァル自身が監修するバリのギー・ル・プラ出版社の叢書「美の前衛」シリーズの第1巻として出版された本で、「歴史の哲学」という副題が付いている。

*2: ロベール・エスティヴァル フランスのレトリスト・批評家。イズーのレトリズムから分かれた自称ウルトラレトリストとして、1957年から59年まで雑誌『グラム』を刊行、レトリストのデュフレヌ、エスティヴァル、ヴォルマン、ジャン＝ルイ・ブローの詩・批評・パンフレット類を掲載した。後には、CNRSの研究者となり、古書物学（ビブリオロジー）なる学問を始めた。著書に『1945年以降のバリの文化的前衛』（63年）、『総合的表意文字的ハイパーグラフィック』（64年）、『前衛』（68年）『構造主義から図式主義へ』（83年）、『世界の書物——国際的書物学（ビブリオロジー）序論』（83年）、『書物学』（87年）。

*3: アンリ・ルフェーヴル（1901－91年） フランスの社会学者。1930年代にマルクス主義に接近し、58年にスターリン批判と共産党のアルジェリア政策批判を軸とした雑誌『レタンセル（火花）』を発行してフランス共産党を除名されるまで、党の理論家の1人として活動、高度資本主義社会の日常生活を社会的に研究し、正統派マルクス主義の変更を迫る大著『日常生活批判』（第1部、1958、第2部、61年。その『序説』は1947年に発表）や、スターリン主義を告発した『マルクス主義の当面の諸問題』（58年）により、左翼・知識人から芸術家までに大きな影響を与え、50年代末から60年代にかけては、都市論や大衆社会論に関心を向け、シチュアシオニストにも接近した。ここで触れられている『現代への序説』では、その第12章「第12のプレリュード 新ロマン主義は可能か」のなかで、彼の唱える「新ロマン主義」を体現する者たちとして、シチュアシオニストを挙げ、それを手放しで賛美している（邦訳、宗左近・古川幸男監訳、法政大学出版局、（下巻、435－439ページ）

*4: ファノン主義者 フランツ・ファノン（1925－61年）は、仏領マルチニック島生まれの医師・革命家で、53年から56年アルジェリアの病院で医師として働く中から、56年以降FLNに参加、反植民地主義の思想を作り上げる。著書『黒い皮膚・白い仮面』（52年）、『地に呪われた者』（61年）、『アフリカ革命に向けて』（64年、死後編集）などで展開された革論・暴力論によって、第三世界の革命運動と西欧の第三世界主義者に大きな影響を与えた。

*5: ヤン・ストリィボッシュ オランダ国籍のシチュアシオニスト。STベルギー・セクションに所属し、中央評議会のメンバーとして活動し、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第8号と第9号の編集委員を務める。1966年7月のSI第7回大会で、すでに脱退し何の活動もしていなかったルディ・レンソンのSI復帰を求めたために除名。

*6: イェッペセン・ヴィクトール・マルティン デンマーク国籍のシチュアシオニスト。SIスカンディナヴィア・セクションに所属し、1962年以降、中央評議会委員として活動、『アンテルナショナル・シチュアシオニスト』誌第8号から第11号までの編集委員、『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティック・レヴォリューション）』誌の編集長を務める。1972年のSI解散まで、除名も脱退もしなかった数少ないメンバーの1人。

*7: ピエトロ・アレティーノ（1492－1556年） イタリアの劇作家、艶本作家。ルネサンス人の持つ自由で闊達な気風を鮮やかに体現した文学者の1人。銀行家や教皇など権力者の庇護を受けながらも、王侯貴族の生活を暴く痛烈な風刺作品を書きまくった。

*8: ヘンリー・ミラー（1891－1980年） 米国の作家。パリで発表した小説『北回帰線』（34年）、『南回帰線』（38年）で性的問題を大胆に描写し、フランスで起訴され、米国でも61年まで出版されなかった。他の作品に『冷房の悪夢』（45年）、『セックス』（49年）など。

*9: ジャン・ジュネ（1910－86年） フランスの小説家。パリで私生児として生まれ、7歳で里子、15歳で感化

院に送られ、その後、乞食・泥棒・男娼などをして諸国を放浪して投獄され、獄中で詩・小説を書く。『花のノートルダム』（49年）がサルトルに認められ、多くの知識人の活動によって釈放。以来、『泥棒日記』（49年）など多くの小説や戯曲を書く。

*10：6月25日 この日にまかれたS Iのピラとは『ドイツ連邦でのシチュアシオニスト・インターナショナルに対する裁判に関する宣言』のこと。フランス語で書かれ、ミシェル・ベルンシュタイン、J・V・マルティン、アレキサンダー・トロッチ、ラウル・ヴァネーゲムの署名がある。

*11：『文化における不快』 「シチュアシオニスト、ウーヴェ・ラウゼンの有罪判決について」という副題の付いたこのピラは1962年7月12日にドイツで配布され、62年10月にデンマークで発行された『シチュアシオニスト革命（シチュアシオニスティスク・レヴォリューション）』誌第1号に採録されたもので、「S Iのために／ドゥボール ヴァネーゲム」という署名がある。フロイトの同名の論文のタイトルを用いたこのピラの内容は、62年7月にミュンヘンで下されたウーヴェ・ラウゼンへの有罪判決（3週間の懲役刑）に抗議し、西ドイツの裁判官がナチスの協力者だったことを糾弾するものである。

*12：モーリス・ルメートル（本名モイーズ・ビスミュト 1926-） フランスのレトリスト。1949年、イジドル・イズーと出会い、レトリズム運動に参加。以後、ドゥボールらがレトリスト・インターナショナルを結成した時には、イズーの側に立ち、以後、終始イズーとともに行動した。50年に発表した著作『イヌとネコ』において、レトリズムに音楽的次元を加え、また、より純粋なレトリズム（文字主義）を提唱し、レトリズムの詩論を完成させるとともに、自ら「パイパーグラフィック」と名付けた絵文字・象形文字などで構成されたレトリズム絵画や造形詩、「失語詩」と呼ぶ音響詩、『映画はもう始まった』（51年）などの映画まで幅広い作品によってレトリストの最も積極的で革新的な芸術家に数えられる。詳しくはこちらを参照。

*13：ギルバート・キース・チェスタトン（1847-1936年） 英国の小説家・批評家・詩人、英国の新聞の寄稿者として警句や逆説を駆使した文芸・社会批評を行い、カトリックの立場から、バーナード・ショー、H・G・ウェルズらと論戦。詩、随筆、小説でも活躍し、特にブラウン神父を主人公にした推理小説シリーズで有名。作品に『木曜の男』（1908年）、詩集『白鳥の歌』（01年）、評伝『ディケンズ』（06年）など。

*14：「日曜と呼ばれる男」 チェスタトンの小説『木曜の男』（1908年）の登場人物。『水曜の男』は、アナキストたちの不思議な集まりを描き、そこでは1人1人が互いを探るスパイとされているが、最後にみな仲間であることが判明する「カフカの」な小説。「日曜」はヨーロッパ無政府主義中央会議の議長であるが、同時に（これは物語の最後で明かされる）警察の局長として、無政府主義と闘うスパイを組織する。

*15：ケオルグ・ケラー ドイツのシチュアシオニストだが詳細は不明。

*16：ガルトンの装置のイラスト 本書第1巻63ページに収録された「ガウス曲線の自動作図装置」のイラストのこと。

*17：『フィネガンズ・ウェイク』 ジェイムス・ジョイス（1881-1941年）の1939年刊の作品で、ダブリン郊外の居酒屋の主人イアウィッカーとその妻アナ、彼らの双生児の子供シエムとショーン、その妹イシーの現実の相の物語と主人公HCEの語る夢の物語が混じり合い、多層構造のなかに展開する。ジョイスの文学の集大成にして20世紀最大の実験文学として、さまざまな言語実験が行われている。

*18：マリリン・モンローの死 1962年8月5日、マリリン・モンロー（1926-62年）がロサンゼルス郊外の自宅で死亡しているのが家政婦によって発見された。モンロー急死の知らせは世界中でトップニュースとなり、『ロサンゼルス・タイムズ』は1面から3面までをその写真と記事で厘めた。直接の死因は睡眠薬の飲み過ぎで、17日にロサン

ゼルス警察は自殺と発表したが、遺書もなく、直前に誰かから電話がかかってきて、受話器を持ったまま死んでいたことなどがら、後に、ケネディ大統領とのスキャンダルを葬るための他殺説も流れた。

*19：アハメッド・ベン・ベラ（1916－） アルジェリアの政治家。1954年の独立革命戦争勃発時の指導者の1人であり、56年に逮捕されフランスに監禁された。62年3月に釈放されると、暫定政府メンバー（アルジェリアの独立は同年7月）との間で激しい権力闘争を展開したが、軍隊の支持を得て政敵を追放し、同年9月アルジェリア共和国首相に就任、翌年憲法を制定して初代大統領に選ばれた。

*20：解放戦線のスーツケースを運ぶ フランス国内でアルジェリア民族解放戦線を資金的に援助するネットワークを作り上げたフランシス・ジャンソンの機関の活動を指している。ジャンソン機関の活動家や支援者たちはFLNの軍資金をスーツケースに入れてフランスからスイスに運んだことから、当時のマスコミは彼らを「スーツケースの運び手」と呼んだ。

*21：オルレアンヴィル アルジェリアのオラン地方の都市。1954年10月19日激しい地震に会い、1400名の死者を出した。独立後エル・アスナムと改名されたが、その後再び地震で壊滅し、再建されシュレフと3度改名された。

*22：カトリック教会の最後の公会議 1962年10月11日から5年間にわたって開催されたヴァチカン第2回公会議で、現代世界における教会の役割の刷新を試みた。

*23：キューバをめぐる危機 1962年10月14日から28日にかけてのミサイル危機と呼ばれる事態で、キューバに設置されたソ連のミサイル基地をめぐる、米ソの緊張が高まり、核戦争勃発の瀬戸際まで行ったが、最終的にはソ連がミサイル基地を撤去し、米国は海上封鎖を解いた。

*24：3月26日のカストロ演説 1962年3月26日、フィデル・カストロがラジオ・テレビを通じて行った演説で、その中で、彼は、旧人民社会党（共産党）の幹部で統一革命組織の指導部員であるアニバル・エスカランテのセクト主義的行動を突然非難した。

*25：ミシェル・ベルンシュタイン（1932－） 1957年SI結成以来のシチュアシオニスト。SIフランス・セクションで活動し、1967年脱退。本書321ページの訳注を参照。

*26：ギー・エルネスト・ドゥポール（1931－94年） フランスのシチュアシオニスト。パリに生まれ、50年代初頭にイジドル・イズーのレトリズム運動に参加、52年、イズーの神秘主義化に反対し、ジル・ヴォルマンらとレトリスト左派を結集した「レトリスト・インターナショナル」を創設、自らは映画作品や転用芸術を作りつつ、「転用」、「漂流」、「心理地理学」、「新しい都市計画」などの芸術批判・日常生活批判を軸としたアヴァンギャルド芸術運動を展開。1956年に「シチュアシオニスト・インターナショナル」（SI）を創設し、1972年にSIを解散するまで、一貫してその中心メンバーとして活動。

*27：アッティラ・コターニィ ハンガリー国籍のシチュアシオニスト。SIベルギー・セクションに所属して活動。1963年10月、ヨルゲン・ナッシュを擁護したことを理由にSIを除名。

訳者解題

ここに付録資料として収めたものは、レトリスト・インターナショナル（L I）の機関紙『ポトラッチ』第23号（1955年10月13日）から第28号（57年5月22日）、新しくシチュアシオニスト・インターナショナル（S I）の情報誌となった『ポトラッチ』第29号（57年11月5日）および第30号（59年7月15日）に掲載された文章の一部分である。『ポトラッチ』は、本書第2巻、第3巻の付録資料として、その第22号までを、それぞれ全訳（第9・10・11号まで、第2巻）、抄訳（第22号まで、第3巻）というかたちで紹介してきたが、本書では紙数の関係で大幅にカットせざるをえなくなった。翻訳はすべてできあがっているののでいずれ何らかのかたちで紹介したい。

本書に収めた論文は、第23号の「エクリチュールの役割について」と「パリ市の合理的美化計画」、第28号の「一步後退」、第29号の「シチュアシオニストでいたいなら、さらなる努力を」、第30号の「『ポトラッチ』のかつての役割と今の役割」である。いずれも、L Iの活動やL IからS Iへの変化を知る上で重要なものである。

この時期のL Iの活動について知るために、ここに収録しなかった『ポトラッチ』の内容を簡単に紹介しておく。「エクリチュールの役割について」と「パリ市の合理的美化計画」でも報告されている都市への具体的介入の実例として、この時期、L Iはロンドンのチャイナタウンの取り壊しに対して『タイムズ』編集部抗議文を送り、フランコによるバルセロナのバリオ・チノの破壊に抗議し（第23号の「『タイムズ』編集部に対する抗議文」、「現代中国万歳」）、パリとその周辺の心理地理学地図の作成を行い（第23号の「逃れられない仕事」）と、精力的な活動を行っている。第28号と第29号では、その成果が、何冊かの出版物として刊行されたことも報告されている。すなわち、非一スターリン化に関するマルセル・マリエンの研究『鋼が切れた時』、S I設立に向けたドゥボールの基本綱領『状況の構築に関する報告』、アスガー・ヨルンの『構造と変化』、集団的転用によって作成された音声テープ『レトリスト・インターナショナルの歴史』（以上、第28号の「諸君の文化とけりをつけるために」）、ヨルンとドゥボールによる転用作品『コペンハーゲンの終わり』と『心理地理学的パリ案内』、ヨルンの論文『金の角あるいは運命の輪』と『機能主義に反対して』、ミシェル・ベルンシュタインの序文付きの『G・ピノ＝ガッリツィオの絵画作品』（印刷中）、ラルフ・ラムネイの『心理地理学的ヴェネツィア』（準備中）、『状況の構築に関する報告』のアブデルハフィド・ハティブによるアラビア語訳（準備中）（以上、第29号の「1957年6月以降の出版物」）である。

現代芸術への異議申し立てという点では、破産したシュルレアリスムに対して相変わらず手厳しい攻撃を行う（アンドレ・ブルトンの60歳の誕生日に偽の招待状を発送し、パリの大ホテルに多数の人間を集ませたことを報告した第26号の「最後のシュルレアリスム雑誌の刊行へのささやかな序文」、ギー・モレの雑誌『ドゥマン〔明日〕』に協力していたシュルレアリストのロベール・ベナユーンが参加する『シュルレアリスム・メーム』誌の発刊を糾弾する第27号

の「シュルレアリスムの深く真性の隠蔽」など）とともに、パタフィジシャンへの攻撃（ガリマール書店の百科事典の監修者になったレーモン・クノーの日和見主義を暴露する第26号の「1つの世界観（ヴェルトアンシャオウング）の跡を造るガリマールの百科全書派」）、機能主義への攻撃（ヨルンらの攻撃によって、機能主義の建築家マックス・ビルがウルムの造形高等専門学校を去るはめになったことを伝える第26号の「礎石が去る」）、ヌーヴェル・ヴァーグ映画への攻撃（アニェス・ヴァルダの映画『ラ・ポワント・クルト』の陳腐さを徹底的にこき下ろした第25号の「ひっこめ！」）、レトリスト右派への攻撃（モーリス・ルメートルの著書『レトリズムとは何か』の退嬰的主張を糾弾した第26号の「盲者による迷蒙化」）など、その攻撃の幅を広げている。また、『ポトラッチ』第24号は、「1955年末の前衛の知的概観」のタイトルで、都市計画（パリの中で行くのを薦める地区と、行ってはならない地区の一覧）、詩（デュ・ブーシェ、ギユヴィック、アラゴン批判）、装飾（バリケードと迷路を構築し、レセプション会場を改造すべきだとするフィヨンの提案）、探検（〔サン・〕メリ地区の心理地理学調査の予告）、教育的遊戯（ボクシングの試合の形式で行うイデオロギー論争の提案）、映画（映画館を「漂流」実験の場とし、三文映画の内容を「漂流」の過程の一要素として読み換える提案）、哲学（「馬鹿者だちよ、君たちは馬鹿者であることをやめることができる。マルクスを読み、ダフ〔L Iのメンバー、ムハンマド・ダフのこと〕を読み」）、造形芸術（抽象芸術の破産、レトリストのメタグラフィの不十分性）、雑誌（L Iの協力するブリュッセルのマルセル・マリエンの雑誌『裸の唇』の宣伝）、政治（フランスの映画スターを使ったソ連の政治宣伝、フランスのアルジェリア戦争の拡大、仏独が協力して行うフランコ政権との「物々交換の発展」、アナキストのピエール・モランの反植民地主義的意見へが引き起こしたスキャンダル）、プロパガンダ（「転用」の積極的利用の薦め）、文学（ゴンクール賞を拒否したジュリアン・グラックの欺瞞性）と、広範囲の文化領域における「統一的」批判と、すでにシチュアシオニスト的と言ってもよい提案を行っている。さらに注目すべき記事として、1956年8月にマルセイユで開催された前衛芸術フェスティバルを攻撃する「マルセイユでの一大行事の失敗」（第27号）がある。このフェスティバルは、「さまざまな公的観光機関と復興・都市計画省の後援」のもと、ル・コルビュジエ設計の「輝く都市」という名の建物で行われた芸術祭で、戦後のアヴァンギャルド芸術を体制側から回収するための大々的な催し物であった。画家のアトラン、セザール、菅井汲、彫刻家のティンゲリー、舞踏家のベジャール、音楽家のブーレーズ、メシアン、シュトックハウゼン、映画作家のマクラレン、劇作家のイヨネスコ、レトリストのイズー、ルメートル、ビデオ作家のナム・ジュン・パイク、詩人のプレヴェール、イヴ・タルディウ、芸術批評家のミシェル・ラゴンなど多くの前衛芸術家が参加した（そのリストも「『輝く都市』でのフェスティバル参加者一覧」として『ポトラッチ』同号に収められている）このフェスティバルに対して、L Iはボイコット指令を発表し、この体制側の「スペクタクル」への不参加を呼びかけたのである。フェスティバルそのものは、マスコミにもほとんど無視され、「それぞれの出し物の観客が20名にも満たないことが多く、財政的な面からも完全な失敗に終わった」とL Iは伝えている。もう1つ、世界的石油会社ロイヤル・ダッチ・シェルが「芸術家から見た石油産業」というテーマで何人かの画家に描かせた絵のブリュッセルでの展覧会に対するL Iの糾弾行動も

、L Iの原則的態度を知る上で興味深いものである。L Iはこの展覧会に際してピラ「サロンの御婦人たち」を出し、現代芸術と企業との癒着を糾弾したが、それに対してベルギーの美術批評家たちが中傷文を發表し、さらにベルギーの「独立派の」週刊誌『ル・ファール・ディマンシュ〔灯台・日曜版〕』の美術批評家ステファン・レイが石油企業を讃美する文章を掲載した。L Iはこれらの企業・芸術家・批評家の連携を徹底的に批判している（第27号の「見え透いた罫」）が、この批判は「現代芸術」の多くが企業の資金によって成り立っている今日、なお有効な批判であるだろう。

政治的な面では、ジャーナリズムからも既存左翼からも無視された第4インターナショナルの書記と活動家の逮捕・投獄の報を伝える「驚くことは何もない」（第26号）、アルジェリアの作家カテブ・ヤシンが過去にアルジェリア人民党の活動家として投獄された経験を持つことからフランスの左翼から「政治的闘志」であるとか「革命家」であると言われ、「善良なアルジェリア人革命家」扱いされるのに対して、その同じフランス左翼が現在のアルジェリアの学生たちのストや地下運動については無視することを批判したアブデルハフィド・ハティブの文章「アルジェリア革命の表現とペテン師カテブ・ヤシン」（第27号）、現代資本主義下でのプロレタリアートの意味の変質とマルクス主義の現代的読み換えによる新たな社会主義社会の建設の展望（「技術そのものによって技術社会を消滅させること」）を説くアンドレ・フランカンの文章「昨今の議論」（第28号）などがある。

最後に、『ポトラッチ』第29号と第30号には、アスガー・ヨルンらの〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動〉の呼びかけで、L Iも含めて8ヶ国の前衛グループが参加してイタリアのアルバで行われ、S I結成の契機になったアルバ会議の報告（第29号「アルバ綱領」）、コシオ・ダローシャでのS I結成会議で、参加3グループ、すなわちL I、〈イマジニスト・バウハウスのための国際運動〉、ロンドン心理地理学委員会の「完全なる統合」が「賛成5、反対1、棄権2」の投票結果によって決定されたこと（第29号冒頭の無題の記事）、ミラノの前衛芸術運動アルテ・ヌクレアーレ〔核芸術〕のエンリコ・バイとダンジェロによる反スタイル宣言の欺瞞性に対する批判（第29号の「いつも同じことをしては、続けてゆく（あるいは新生活（ラ・ヴィタ・ヌーヴァ））」）、アムステルダム市立美術館（ステーデリク）でコンスタントが行った統一的都市計画の模型の展覧会の報告（第30号の「新しい都市計画のための最初の模型」）、コンスタントの統一的都市計画建築論（同号「来るべき偉大な遊び」）など、S I結成前後の様子を伝えるそれぞれ興味深い文章が収められている。

レトリストは、所定の街路にチョークか何かの手段で書き込んで、これらの街路の本質的な意味——それがあられる場合には——を強調する文章を決定するための第1回調査会を開いた。

これらの書き込みの効果は、心理地理学的なのめかしから最も単純な転覆にまで及ぶだろう。以下に挙げる例がまず選ばれた。

ソヴァージュ通り*1（13区）には「ここで死ななければ、もっと遠くまで行けるだろうか」——オーベルヴィリエ通り*2（18区—19区）には「革命・夜」——ブノワ通り*3（6区）には「すばらしいと人の言う、物売りトラックはここまで来ない」——ロモン通り*4（5区）には「懐疑を利用せよ」——セヴラン通り*5（5区）には「カビール人*6に女を与えよ」。

それから、郊外のルノーの工場の近くと、19区と20区のいくつかの地点に、「きみたちはパトロンのために眠る」というL・スキュトゥネール*7の言葉を書き込むことが時宜を得ているということで意見が一致した。

*1：ソヴァージュ通り パリ13区、オーステルリッツ駅の南のセヌ川近くにある通り、ソヴァージュ（sauvage）は、フランス語で「野生の」という意味の形容詞。レトリスト・インターナショナル（LI）にとってこの通りは、「パリで最も美しい風景の1つ」だが、その通りの破壊に対して『ポトラッチ』第7号で非難の文章を発表している。

*2：オーベルヴィリエ通り パリ18区と19区の境界をなす南北の通り、東駅（ガール・デスト）に通じる線路に沿った通りで、貨物基地がある。LIにとっては、この通りは、「反逆者たちの食堂」と呼ばれるスペイン人労働者のバーのある通りとして親しまれた。

*3：ブノワ通り バリ6区、カフェ・ドゥー・マゴの脇を南北に走る狭い街路。サン・ブノワ通りのこと。

*4：ロモン通り パリ5区、フォセ・サン＝ジャック通りとアルバレート通りを結ぶ通り。1867年以降、文法家で聖職者のシャルル・フランソワ・ロモンにちなんでこの名になった。かつて修道院や神学校が多くあった。女子感化院もある。

*5：セヴラン通り パリ5区、サン・セヴラン教会の脇を東西に走る狭い街路。サン・セヴラン通りのこと。さまざまな国のレストランのある歓楽街。

*6：カビール人 アルジェリアの山岳地帯に住む、ベルベル人を起源に持つ民族。イスラム教徒が多い。

*7：ルイ・スキュトゥネール（1905—87年） ベルギーのシュルレアリスト詩人・作家。自動書記やアフォルスム的な作品で知られる。作品にアフォルスムや「形而上学的」ギャグなどでできた『私の落書』（45年）、小説『ある子供のヴァカンス』（47年）など。

9月26日に集まったレトリストは、討議の間に言及された都市計画上のさまざまな問題への、以下に挙げるような解決策を一般に提起した。整地作業が最も急を要する問題であると思われるため、建設的な面は考慮に入れなかったことを念頭に置いてもらいたい。

最終電車の通過の後、夜間、地下鉄を開放すること。通路や線路は、間欠的な弱い照明で薄暗くしておくこと。

非常階段の改修工事と必要な所に連絡橋を建設することによって、パリの屋根を散歩に開放すること。

小公園を夜間も開けておくこと。照明は消したままにすること（場合によっては、心理地理学的配慮から、弱い照明が正当化されることがある）。

すべての通りの街灯にスイッチをつけること。照明は公衆が自由にできるものでなければならない。

教会に対しては、4つの異なる解決策が提案され、実験による審判のときまではどの説も弁護できるものと認められた。実験によって、迅速に最良のものが決定されるだろう。

G・E・ドウポールは、あらゆる宗派の宗教建築の完全な破壊に賛成すると宣言した（跡形もなく取り壊し、空間を利用する）。

ジル・J・ヴォルマンは、教会からあらゆる宗教的観念を取り除いたうえで、建物を残すことを提案した。普通の建物として取り扱い、子供たちを遊ばせておくのである。

ミシェル・ベルンシュタインは、残骸から教会の当初の目的が判別できなくなるように、教会の一部を破壊することを求めた（セバストポル大通りの〔サン・〕ジャック塔*1は、偶然によってできたこの一例である）。完璧な解決策は完全に教会を破壊し、そこに廃墟を建設することであろうが。最初に述べた解決策は、もっぱら経済上の理由から選ばれたものである。

最後に、ジャック・フィヨンは教会をお化け屋敷に改装することを訴えた（いまある雰囲気を利用しながら、その恐怖をあおる効果を強調する）。

美学的見地からの反論を退け、シャルトルの大聖堂*2の正面入口を賛美する者たちを黙らせることで全員の意見は一致した。美は、幸福を約束するものでなければ、破壊されねばならない。世界で今だに制圧されていない場所や、生の非人間的な広大な余白に建てられた、この種の建造物ほど不幸をよく表しているものがあるだろうか。

駅は今のまま残すこと。心を動かすに十分なその醜悪さは、これらの建物のちょっとした魅力である行きずりの雰囲気の大いに強めてくれる。ジル・J・ヴォルマンは出発に関するあらゆる表示（行き先、時刻表など）をなくすか、それを恣意的に狂わせることを求めた。これは漂流を促進するためである。激しい議論の後、提出されていた反対意見は撤回され、計画は全面的に承認された。たくさんの他の駅や、いくつかの港で録音してきた音を放送することによって、駅の聴覚的雰囲気を高めること。

墓地の廃止。死体やその種の遺品——遺骨や痕跡も——の完全な破壊。（疎外の過去の、このひどい遺物が、最も機械的な観念連合によって表している反動的な宣伝（プロパガンダ）に気を

つけねばならない。墓地を見て、モーリヤック*3、ジッド*4、エドガール・フォール*5のことを思わずにいられるだろうか？)

美術館の廃止、および芸術作品のバーへの分配（フィリップ・ド・シャンパーニュ*6の作品は、グザヴィエ＝プリヴァス通り*7のアラブ人カフェに、ダヴィッド*8の「神聖」はモンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ通り*9のバー「樽」に）。

刑務所への無制限の自由通行。そこで観光ツアーをすることも可能にする。訪問者と受刑者を差別しないこと。（人生のユーモアを増やすため、1年に12回籤引きをして、訪問者が逮捕され、実刑を言い渡されることもあるようにする。これは、興味深い危険を冒すことをどうしても必要とする馬鹿どもに、活躍の場を与えるためである。たとえば、昨今の洞穴学者とか、遊びの欲求をかくもみすぼらしい真似事で満たす奴らとか。）

その醜悪さから、何の利益も得ることができないような建造物（プチ・パレ*10とかグラン・パレ*11の類い）は別の建造物に場所を譲らねばならない。

意味がなくなった彫像や、それが設置される前の歴史的な理由から、どんな美的刷新も禁じられている彫像の撤去。撤去までに残された期間、彫像の存在を有効に使うために台座に刻まれた題名と文章を、政治的な方向に変えたり（シャンゼリゼに面したもの*12に、クレマンソー*13と呼ばれる虎）、当惑させる方向に変えたり（ミシェル大通りとコント通りの交差点のもの*14に、熱病とキニーネへの弁証法的賛辞、シテ島のノートルダム前広場のもの*15に、大いなる深み＝海溝）することができよう。

通りの現行の名による民衆の無知蒙昧化をやめさせる。市議会議員の名、対独抵抗運動（レジスタンス）の闘士の名、エミールとかエドゥアール（パリに55もある）、ビュジョー*16とかガリフェ*17といった将軍の名、もっと一般的に言えば、汚い名（例えば、レヴァンジル〔福音〕通り*18）はすべて抹消する。

これに関して言えば、『ポトラッチ』誌第9号で呼びかけられた、場所の呼称におけるサン〔＝聖〕と言う語の否認のためのアピール*19はかつてないほど有効である。

*1：〔サン・〕ジャック塔 16世紀に建立され、1802年に消失したサ・ジャック・ラ・ブシュリー教会の鐘楼。現在は廃墟のようになり、地上52メートルの尖頂には気候観測器が設置されているだけである。1648年パスカルがここで空気の重量を調べる実験を行ったことで有名。

*2：シャルトルの大聖堂 パリの南西にあるウーレ＝エ＝ロワール県の県都シャルトルのノートルダム大聖堂のこと。ゴシック様式の大建造物で、十三世紀始めに建立。そのファサードの彫刻は多くの作家に称賛されている。

*3：フランソワ・モーリヤック（1885－1970年） フランスの代表的なカトリック作家、ド・ゴール派としてレジスタンスに参加したが、政治的には反共主義者で、サルトルらの実存主義に対抗した。作品に『愛の砂漠』（25年）、『テレーズ・デスケルー』（30年）など。52年ノーベル文学賞。

*4：アンドレ・ジッド（1869－1951年） フランスの小説家。『地の糧』（1897年）、『狭き門』（1909年）などの作品は信仰と肉欲の狭間で苦悩を主題にした作品である。47年ノーベル文学賞。

*5: エドガール・フォール（1908－88年） フランスの政治家・作家。48年から58年まで急進社会党に属し、第4共和政の内閣で何度も閣僚を経験。59年以降はド・ゴール派に属し、中国との関係改善に努めたり、68年5月革命直後の教育相となり大学改革を行ったことで知られる。

*6: フィリップ・ド・シャンパーニュ（1602－74年） フランドル生まれのフランスの画家。ルイ13世、その妃アンヌ、宰相リシュリューらの肖像画で知られる宮廷画家。フランドル派絵画をフランスに伝えた。

*7: グサヴィエ＝プリヴァス通り パリ5区、サン・セヴラン通りのほぼ中央からセーヌ川に向かって北に延びる百メートルほどの通り。1953年12月25日の夜、ジル・イヴァンとドゥボールともう1人のL1メンバーが、このグサヴィエ＝プリヴァス通りのアルジェリア人のバーに入り、そこにいた40歳ぐらいのアンティール人と奇妙な会話を交わし、それをきっかけに翌年の1月1日までパリの街の「漂流」が開始されたことが、『裸の唇』誌第9号（56年11月）に「漂流の2つの報告」として報告されている。

*8: ジャック・ルイ・ダヴィッド（1784－1825年） フランスの画家。フランス革命中はジャコバン党员としてマラーの死など革命闘士の肖像を描き、ナポレオンの登場によって熱烈なボナパルティストとなり、帝政時代はその宮廷首席画家として美術界に君臨した。

*9: モンターニュ＝ジュヌヴィエーヴ通り パリ5区、モベール＝ミュチュアリテからパンテオンの裏まで続く南北の通り。正式にはモンターニュ＝サント・ジュヌヴィエーヴ通り。この32番地には、レトリスト・インターナショナルの本拠があり、そこに後に『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト』の編集部が置かれた。

*10: プチ・パレ パリ8区、シャン・ゼリゼ大通りとセーヌ川に挟まれた場所に立つガラスと鉄骨製の大建造物、1890年のパリ万国博覧会のために建てられ、現在は18、9世紀の家具・装飾品・絵画の美術館や特別展に使われている。

*11: グラン・パレ プチ・パレの向かいにある大建造物。同じく1890年のパリ万博のために建てられ、現在はその巨大なギャラリーを見本市や文化センターとして使うほか、西側の建物を「発見の殿堂」と称した科学博物館として用いている。

*12: シャンゼリゼに面したもの プチ・パレとグラン・パレの間を通るウィンストン・チャーチル大通りとシャン・ゼリゼ大通りの交差点にあるクレマンソー広場の端に立つジョルジュ・クレマンソーのブロンズ彫像。フランスの彫刻家フランソワ・コニユが1932年に制作した。

*13: ジョルジュ・バンジャマン・クレマンソー（1841－1929年） フランスの政治家。最初は医者だったが、1870年以降、パリ18区の区長となり、翌年、急進派の代議員に選出、さらに急進派のリーダーとして鋭い舌鋒で次々と内閣を倒していった。そこから「倒閣屋」とか「虎」の異名を持つ。1906年から13年まで首相としてモロッコ侵略を行い、社会主義者の反発で退陣、17年、ボワンカレ大統領の下で再度首相、19年のヴェルサイユ条約でフランスの有利な講和条約を演出し、第一次大戦の「勝利の父」と呼ばれた。

*14: ミシェル大通りとコント通りの交差点のもの ミシェル大通りはパリ5区と6区の境界線をなす南北の長い通りであるサン・ミシェル大通り、コント通りはサン・ミシェル大通りと交わる6区の通りでリュクサンブール公園の下辺となる東西の通りオーギュスト・コント通りのこと。前者は「サン（聖）」を取り、後者は「オーギュスト（高貴な）」を取って呼ぶことがレトリストの習慣だった。この交差点にはルイ・マラン広場という小さな広場があり、その端に、1820年にキニーネを発見した2人の薬学者（カヴァントゥとペルティエ）を讃える裸の男性の横たわる彫像（ピエール・ボワソン作）が建っている。

*15：ノートルダム前広場のもの この広場にはシャルルマーニュの彫像がある。

*16：トマ・ロベール・ビュジョー（1784－1849年） フランスの軍人。アルジェリアを占領して総督となった。

*17：ガストン・オーギュスト・ガリフェ（1830－1909年） フランスの軍人。ナポレオン3世に仕え、セダンで捕らえられたが、フランスに戻り、ヴェルサイユ軍の将軍としてパリ・コミューンを弾圧した。

*18：レヴァンジェル〔福音〕通り パリ18区、オーベルヴィリエ通りの途中から南西に延びる通り。

*19：サン〔＝聖〕という言葉の否認のためのアピール 『ポトラッチ』誌 第9－10－11合併号（1954年8月17－31日）に掲載された「教会の閉鎖を待ちながら」を参照。

現代文化のあらゆる形態がその腐敗によって臨界点に達していること、戦後君臨してきた反復システムが大衆的に崩壊したこと、さまざまな芸術家や知識人が新しい創造の展望——その理解はまだ一様ではないが——に基づいて結集していること、以上のことは今日、前衛諸潮流の結集によって、アンドレ・スティール*1とサガン＝ドルーエ*2によって定義されるような公式の文化生産に代わる一般的な革命的対案（オルタナティブ）を確立するという課題を提起している。

われわれの勢力の拡大、すなわち真の国際的行動の可能性と必要性は、われわれの戦術を根底から変更するよう導くはずである。なすべきことは、われわれの目的に供するために現代文化を占拠することであって、もはや、われわれの問題の将来的発展に基づくだけの外在的な反対活動を行うことではない。ただちに行動しなければならない。それは、相互に袖完しあうさまざまなテーゼを批判的に検討し、共同の理論的定式化を行うためであり、また、それらテーゼを共同して実験的に適用するためである。われわれ『ポトラッチ』の潮流は、新しい国際的組織の統一をはかるため、必要とあらば、そのなかで少数派の立場を受け入れねばならない。しかし、この運動があらゆる点で具体的に実現されるならば、『ポトラッチ』は当然にも、最も先進的なプログラムに歩調を合わせることになる。

レトリズムの危機について語るのは、正確なところ、不可能である。というのも、われわれはいつも永続的な危機の環境を欲し、それを作り出すことに成功してきたからである。また、もしかりにレトリズムという観念がまったく無内容ではないとしても、それに関わる諸価値は、レトリズム運動の中で、だがそれに抗して、形成されたのである。しかし、客観的にいえば、1953年に除名されるまでL I「レトリスト・インターナショナル」の中で多数派を占めていたある種の自己満足的ニヒリズムは、1956年までしばしばわれわれの選択を誤らせる要素となった過剰なセクト主義へと継承されたことが指摘できる。こうした態度には不誠実さが付き物である。ある人物は書くこと（エクリチュール）の放棄の先端にいることを自称していた。われわれの孤立と非活動的な純粹さを何よりも重んじ、あらゆる雑誌のなかで一番われわれの全体的な立場に近い雑誌への協力についても、それを拒否すべきだとの態度を明らかにしていた。だが、除名されて5日もたたないうちに、彼はこの雑誌の指導部に、「個人的な資格で」文学的な協力を続けたいと頼み込んだのである——もちろんそれは徒労に終わったが。してみると、この同志は、以前は挑発者として行動していたのだろうか。いや、1つの無責任な行動から、また別の無責任な行動、ちょうど反対の行動にただ移行したにすぎない。「レトリズム」というまったく名ばかりのアリバイが欠落し、空虚だけが残ったのである。

われわれが闘っているこの世界の使い古された欺瞞は、いつでも、ふと何か新しいもののように見えて、われわれを引き止めることがある。どのようなレッテルもそれから身を守ってはくれない。どのような誘惑も十分ではない。われわれは、日常生活の環境＝雰囲気を覆すための具体的な技術を見つけなければならない。

解決すべき第一の実践的問題は、われわれの経済的基礎を著しく拡大することである。現状では、新しい職業を発明するよりも、新しい感情を発明する方が容易だろう。芸術家の社会的役

割といったものと区別される、いくつかの新たな職務を定義すること——そして実践によって正当化すること——が緊急の課題となっているが、これはわれわれに、ピエロ・シモンド*3とイタリア人同志たちから要請されている集団的経済プランの考え方を支持することを促している。

たしかに、経済的な観点から見ても構築的な観点から見ても、現代の美学の時代遅れの断片を利用するという決定は、解体への大きな危険をはらんでいる。仲間たちが心配しているひとつの具体的なケースをあげれば、突如として画家が数の上で優位に立つということである。彼らの判断によれば、そうした画家たちは、作品は当然にも無意味であるし、美術商との癒着も断ち難い。しかしながら、われわれは、さまざまな技術の専門家を結集させる必要がある。それらの技術の最新の自律的發展を知る必要がある。——ただし、他の分野における問題の現実を知らないで、それを外部から操ろうとする、イデオロギーの帝国主義に陥ってはならない。そして、現在ばらばらになっているさまざまな手段の統一的使用を実験する必要がある。したがって、われわれは後退の危険を冒さなければならないのだ。ただし、集合的理論を深化させ、確実な成果をもたらす実験へと到達することによって、できるだけ達やかに前段階の矛盾を乗り越えることを目指さなければならない。

芸衛のなかでもある種の活動分野は、他のものより一層明らかな死相を帯びているが、画廊に掛けられた絵画などというものは、本になった詩集と同様、まったく意味のない過去の残骸であるとわれわれは考える。知的商品流通に関わる現在の枠組みを利用するのは、イデオロギー的混乱を助長し、その混乱はわれわれの内部にまで及ぶだろう。しかし、一方、最初にこの束の間の枠組みを考慮せずしては何事も為しえない。

結局のところ、われわれがいま採用している政治方針を判断するのは、さらに進んだ国際集団の設立を促進することがそれに可能か否か、である。もし可能でないとすれば、この政治方針は、この運動における全面的反動の開始を告げるものにとどまるであろう。その場合、文化における革命的前衛の形成は、他の勢力の出現に依存することになるだろう。

G・E・ドゥボール

*1：アンドレ・スティル（1921-） フランスの作家。フランス共産党の新聞『ユマニテ』紙の編集長。小説に『最初の衝撃』（52年）、『ロマンソンジュ』（76年）など。

*2：サガン＝ドルーエ フランスの女性作家フランソワーズ・サガン（1935-）と当時の天才少女ミヌー・ドルーエを合わせた合成語。サガンは1954年、19歳の時に『悲しみよこんにちは』でデビュー、マスコミで大いに騒がれた（参考）。ドルーエは文学少女で、当時多くの詩集を出版して天才少女と騒がれたが、1955年11月、母親がゴーストライターなのではないかとの疑いを持ったジャーナリストの前で、実際に詩を作りへ天才少女であることを証明した。ともにメディアが作り出した「作家」である。

*3：ピエロ・シモンド 設立時からのS Iイタリア・セクションのメンバーで、それまでは、ヨルンとともにイタリアに本拠を置いた「イマジニスト・バウハウスのための国際運動」（M I B I）に参加していた。同運動の雑誌『エリスティカ』の編集長を務め、同誌 第2号（1956年）には、シモンドの論文「具象芸術の一般理論のために」がある。

ムハンマド・ダフ*1へ

われわれがめざしている集団的作業は文化の新しい作戦区域を創出することであり、われわれの仮説では、この作戦区域は、舞台装置と行動様式との弁証法的関係の諸契機をいくつかの状況のなかで準備することによって、さまざまな環境を場合によっては全面的に構築するという位相のなかに位置づけられる。われわれは、芸術や文芸の現代的諸形態が衰退したことについての明確な確認のうえに立脚している。そして、この衰退の切れ目ない動きの分析から、われわれは次のような結論に到った。すなわち、われわれの目には歴史的最終段階に達した解体の状態（この言葉の定義については『状況の構築に関する報告』を参照）と映る文化事象の重要な総体の乗り越えは、文化における現代の行動手段をより優れたやり方で組織することによって追求されなければならないということである。つまり、われわれは使い古された伝統芸術の雲散霧消という現状の彼方を予見し、実験を試みなければならないが、それは、いま形成されつつある社会の都市計画と日常生活に最も肯定的に貫徹されているような新しい世界情勢に応える、何らかの首尾一貫した全体に回帰するためではない。われわれに明瞭に見えているのは、この任務を広く実行するには、いまだ実現されていない革命が前提となること、そして、あらゆる探求の試みは現在の諸矛盾によって煮つまるということである。シチュアシオニスト・インターナショナルは、〔状況（シチュアシオン）という〕その名によって結成されたが、それが意味するのは、誰もと同じく、われわれ自身も完全にそこに含まれている解体を乗り越えて構築するための試みを開始することにほかならない。われわれの現実的可能性を意識化するためには、われわれが企てうる一切の、厳密な意味での前(プレ)ーシチュアシオニスト的性格を認めるとともに、後戻りすることなど考えることなく芸術的分業と断絶する必要がある。この2つの必要のどちらかを誤るならば、新段階と自称する宣言を伴うだけの断片的作品を追求するという、主要な危険にさらされることになる。

現在のところ、解体が示すものはもはや、8年か10年前、排斥された過激派がいた位置に向かって、穏健な革新者たちをゆっくりと過激化することだけである。しかし、〔過激派の〕袋小路に陥ったその経験から教訓を得るところか、これら革新者たちは、「良き同伴者として」、さらにその射程を弱めている。フランスの例を挙げてみよう。フランスは、明らかに、さまざまな理由によって西ヨーロッパにおいて最も純粋な状態で現れている、一般的な文化の解体の最も進んだ諸現象を経験したのである。

『フランス＝オブセルヴァトゥール』誌（10月10日号および17日号）でのアラン・ロブ＝グリエの最初の2つの時評を読むと、ロブ＝グリエとは臆病なイズーである（その議論の立て方においても、また現実離れした「乗り越え」の主張においても）ことに驚かされる。曰く、「(……) 諸形式の〈歴史〉に属することこそが、結局のところ、芸術作品を認めるための最善の（そしておそらく唯一の）基準である」。つまりところ個人的なものに終わる通俗的な思考と

表現（「繰り返そう。確かな間違いを選ぶよりは、危険を冒すほうがよいのだ」）によって、そして発明性や大胆さなどほとんどなしに、グリエは、芸術の運動についての同じ直線的な見方、人に安堵をもたらす役割をもった機械論的な考え方に依拠する。「芸術は続く。あるいは芸術は死滅する。われわれは、芸術を続けることを選択した者たちなのである。」真っ直ぐに続けるがいい。1957年に、直接の類推によって、ボードレール*2のことを彼に思い出させる者はいるだろうか。クロード・シモン*3がいる。彼が言うには、「一切の過去の価値（.....）は、いずれにしてもこれを証明するものと思われる」（直線的継続を主張しておいて、このように証明するように見せかけるのは、まさしく、あらゆる弁証法を拒否し、あらゆる現実の変化を拒否したことに起因する）。事実、戦後になされてきた提案で多少とも興味を引くものは、すべて、当然ながら、徹底的な解体のなかに位置するものであったが、それらは多かれ少なかれ、その彼方を追求しようとする意志を持っていた。こうした意志は、文化的—経済的な排斥（オストラキスマスによって、また考え方や提起の不十分さによって——この2つの側面は相互に依存しあっている——、窒息させられてしまった。われわれの時代に現れた最も有名な芸術は、「どこまで行けば行きすぎることになるのか」を知っている者たちに支配されている（ポスト—ダダイスム絵画の、儲けになるので終わりが無い臨終の苦悶のことを考えてみよ。この絵画は、一般にダダイスムの反転として示され、2つは互いに称賛しあうのである）。彼らの野心も彼らの敵も、どちらも彼らの寸法に合ったものなのだ。ロブ＝グリエは、謙遜して、前衛主義者という肩書きを拒んでいる（なお、解体局面における真の「前衛」についての展望を欠いている時に、そのさまざまな不都合、とりわけ非商業的な側面を拒否するのは、正当なことである）。彼は「今日の小説家」であることに満足だろうが、しかし、彼の同類の狭いグループの外に出れば、他の者はすべて端的に「後衛」なのだということには同意せねばならないだろう。それゆえ、彼は果敢にも、ミシェル・ド・サン＝ピエール*4を非難する。そこから考えられることは、映画について言うと、彼はグルゲを罵倒する栄光を手に入れ、アストリュック*5のような今の映画を賞賛するだろうということである。実際のところ、ロブ＝グリエはある種の社会的集団にとって今日的意味を持っているが、それは、ミシェル・ド・サン＝ピエールが別の階級の構成された大衆にとって今日の意味を持つものと同じである。両者はともに、それぞれ異なる感受性に応じて、1つの伝統的な文化的行動様式に近いさまざまな度合いのやり方を用いる限りにおいて、それぞれの大衆にとって「今日的」なのであり、それ以上ではない。今日的であるということは大したことではない。多かれ少なかれ解体されているということにすぎない。今や、新しさは、より上の段階に飛躍することに完全に依存しているのである。

解体の彼方への展望を持たぬ者たちを特徴づけているのは、その臆病さである。今日の構造の後にあるものは何も見なくせに、今日の構造の命脈が尽きていることを感じるほどにはそれを知りつくしている彼らは、その構造をじんわりと破壊し、後から来る者たちに残しておくことを望んでいるのである。彼らは、彼ら同様に無力で有害な政治的改良主義者に比すことができる。どちらも、偽の薬を売って生きているのだ。ラディカルな変革を構想しえないものは、与えられたもののさまざまな調整——それは優雅に実行される——を主張するだけで、筋金入りの反動派から区別されるとすれば、それは、単にどの時代を好むかの違いからにすぎない。つまり、そう

した反動派は、解体を完成させた文化の（より堅固な）以前の段階に回帰することを願っているだけのことである（政治的に言うと、それは右翼にも左翼にも位置する）。フランソワーズ・シヨエ*6のお目出たい美術批評は、臆病な文化的解体の主要な社会的基礎となっている「自由な左翼の知識人」の好みをたいへんよく示しているが、その彼女が、「フランケン*7が進んでいる道は（……）、いま、絵画の生き延びのための1つのチャンスである」（『フランス＝オプセルヴァートル』誌 10月17日号）と書くにいたった時、ジダーノフ*8の関心（「われわれが絵画を清算する者たちを壊走させたのは正しかっただろうか」）と根本的に近い彼女の関心の所在を思わず漏らしてしまっているのである。

われわれは、生産力の必然的な発展とは矛盾した生産関係のなかに閉じこめられている。それは、文化の領域においても同様である。この伝統的な関係に——それによって維持されている議論や様式に——突破口を開かなければならない。既存の諸領域を曇りのない眼で批判することによって、また、そうした領域を、形式と内容とをより高いレベルで一致させることのできる統一的な時空間の構築（状況とは、環境と遊戯的行動様式とのダイナミックなシステムである）のなかに統合することによって、われわれは今日の文化の彼方へと向かって進まなければならない。

しかしながら、ただ展望を持ったからといって、現実の生産物に価値が与えられるわけでは決してない。現実の生産物が意味を待つのは、当然のことながら、われわれの精神の混乱も含めて世の中に支配的な混乱との関係においてである。われわれのあいだでも、いくつもの利用可能な理論的提案が、古い部門の限界内での実際の作品と矛盾することかありうる（最初のうちは、そうした部門で行動しなければならない。というのも、今のところ、ただそれだけが共通の現実性を有するものだからだ）。あるいはまた、個々具体的な点では興味深い実験を行った別の同志たちのなかには、既に命脈の尽きた理論の中で道に迷ってしまった者もいる。例えば、W・オルモ*9は、その音響研究を環境の構築に結びつけようとする良き意図には欠けていないが、最近S Iに提出されたテキスト（「音楽的実験の概念のために」）では、欠陥のある表現を用いたため、修正が必要になったのである（「実験芸術の概念についての注記」）。私の意見では、これは、もはや今日の意味の記憶すら見られない議論である。

教義としての「シチュアシオニスム」が存在しないのと同様に、ある種の古い実験——あるいは、われわれのイデオロギー的、実践的弱さのせいで、今現在、われわれを限界付けているすべてのもの——をシチュアシオニスト的作品として形容させてはならない。だが逆に、神秘化を一時的な価値としてさえ認めるわけにはゆかない。今日の解体された文化のあれこれの表出によって形成された抽象的な経験的事実は、文明の終焉あるいは開始についての全体的展望とそれが結び付いた時にはじめて、具体的意味を持つ。つまり、最終的には、われわれの真剣さによって神秘化を統合しそれを乗り越えることが可能であるということだ。それと同様に、自己の純粋な神秘化を望んでいるものは、解体された思考の現実の歴史的状態の証なのである。昨年6月、私は1952年に作成した映画*10をロンドンで上映し、当然のこととしてスキャンダルを引き起こしたが、その映画は神秘化ではないし、なおのこと、シチュアシオニスト的作品でもなかった。それは、当時のレトリストのさまざまな錯綜した動機（イズー*11、マルコ*12、ヴォルマン*13映

画に関する仕事)に属するものであり、それゆえ、完全に解体の局面——まさにその最も極端な形態において——から生まれたものである。それは——いくつかのプログラムの示唆のほかには、私がつい今しがたほめかした作品の特徴としてあった積極的発展の意図さえもっていない。その後、同じロンドンの観衆(〈現代美術院〉の)にチンパンジーが描いた絵を紹介したが、それらの絵はタシスト*14の真面目な絵画との比較に耐えうるものであった。この類似性には教えられることが大きいと、私には思われる。文化の受動的な消費者(われわれが期待しているのは、「審美家」などといった存在が忘れ去られるような世界への積極的な参加の可能性であることは、よく分かってもらえるだろう)は、解体のどのような表出でも好きになることができる(それらの表出とは、まさに、危機と衰退の時代である彼らの時代を最もよく表現する表出であるという意味で、彼らは正しいかもしれない。だが、彼らが好むのは、明らかに、そうした表出のなかでもこの状態を少しだけ覆い隠すものである)。彼らは、すでにロブ＝グリエを好きなのだから、あと5、6年もすれば、私の映画や猿の絵を好きになるだろうと思う。猿の絵と、その頃には完成している私の映画作品との唯一の現実的な違いは、われわれも含んだ文化にとって、私の作品が場合によっては脅威としての意味を持つ、すなわち、ある種の未来の集団に対する賭けである、ということにある。そして、ある種の断絶の瞬間において質的転回が意識されているか否かということから判断して、そしてまた、否定においてはニュアンスは重要ではないということから判断して、ロブ＝グリエをどちらの側に配すべきなのか、私にはわからない。

しかし、われわれの賭けは常にやり直さなくてはならず、さまざまな回答のチャンスを生み出すのはわれわれ自身である。われわれが願うことは、この時代(われわれの探求態度を始めとして、われわれが愛するすべてのものが、その一部分でもある)を変革することであり、満足に浸った俗物が計画するように「この時代のために書く」ことではない。ロブ＝グリエとその時代とは互いに満足し合っている。それとは逆に、われわれの野心はまったく並外れたものであるが、おそらく、成功という支配的な基準によっては計ることができないだろう。私の友人たちは全員、ついに生を変革することに従事することとなった政府の〈余暇省〉で、熟練労働者の給料で、匿名で働くことで満足するだろうと思う。

G = E · ドゥボール

*1: ムハンマド・ダフ アルジェリア生まれのシチュアシオニスト。パリでドゥボールとともにL Iの中心メンバーとして活動、『ポトラッチ』第9-10-11合併号から第18号、第20号から23号までの編集長を務める。1957年のS I結成以降はそのアルジェリア・セクションで活動するが、59年にS Iを脱退。

*2: シャルル・ボードレー(1821-67年) フランスの詩人。遅れてきたロマン派世代で、1850年代から60年代という現代社会の入口で人間の内面性を極度に据り下げた詩を書

いた。詩集に『悪の華』（57年）、散文詩集に『パリの憂愁』（64年）。産業化と大衆社会の開始の中で、常にそれに先んじ、かりそめのもの、移ろいやすいものの中に「美」を見出すという「現代性（モデルニテ）」の概念を打ち立てたことでも知られる。

*3：クロード・シモン（1913-） フランスの作家。フォークナーの影響を受け、錯綜した時間のなかで展開する記号を稠密な文体で書いた小説によって、ヌーヴォー・ロマンの代表的作家と見なされる。代表的な小説に『草』（58年）、『フランドルへの道』（60年）、『ル・パラス』（62年）など。95年ノーベル文学賞。

*4：ミシェル・ド・サン＝ピエール（1916-87年） フランスの小説家。カトリックの学校で学んだ後、肉体労働者や船乗りをし、1945年からモンテルランの影響を受けて小説を書き始める。その小説は自然描写に富み、宗教的な主題を扱ったものが多い。作品に『この古い世界』（46年）、『貴族階級』（54年、アカデミー・フランセーズ小説大賞）、『作家たち』（57年）など。

*5：アレクサンドル・アストリュック（1923-） フランスの映画監督。30歳で映画を撮り始め、パリの若者の生態を描いた『悪い出会い』（55年）などでヌーヴェル・ヴァーグの先駆けとなり、その「カメラ万年筆」理論は多くの映画作家に影響を与えた。他の作品に『感情教育』（62年）など。

*6：フランソワーズ・ショエ 『アルギュマン』誌に拠った美術批評家・都市計画評論家。同誌第19号（1960年）に「産業社会における作画の本質的曖昧性」と題した論文でコブラとシチュアシオニストについて触れている。著書に『ユネスコ——テキストと20のスライド』（59年）、『都市計画——ユートピアと現実』（65年）など。

*7：ルース・フランケン（1924-） プラハ生まれの米国の女性画家・彫刻家。戦前ヨーロッパで絵を学び、41年以降米国に移民し、戦後、52年からパリに居を定め芸術活動を行った。その画風は、ミシェル・タピエ風の抽象表現主義で、彫刻作品はシュルレアリスムの影響が濃い。

*8：アンドレイ・ジダーノフ（1896-1948年） ソ連の政治理論家。正統派スターリン主義の擁護者として活動。『文学、哲学、音楽について』（1947年）によって芸術領域での社会主義リアリズムに理論的根拠を与えたことで有名である。

*9：ワルター・オルモ イタリアのシチュアシオニスト，SIイタリア・セクションに所属。1958年1月に、ピエロ・シモンド、エレナ・ヴェッローネら他のイタリア人シチュアシオニストとともに除名。

*10：1952年に作成した映画 ドゥボールの映画第1作『サドのための叫び』のこと。全90分。5つの声が『民法典』の条文、ジョイスの小説、新聞の三面記事などを交互に読み上げ、画面にはその間何も映らず空白のまま。言葉が途切れると、画面は真っ暗になり、沈黙と闇がしばらく続いた。

*11：イジドール・イズー（1925－ 本名シャン＝イジドール・ゴールドシュタイン） ルーマニア生まれのフランスの詩人。1964年、言語表象と造形表象の境界を廃した前衛的な芸術表現であるレトリズム運動を開始し、終生レトリズムの理論家・実践家として数多くの作品（詩・小説・映画など）を製作する。1950年代以降、芸術家＝創造者を神に擬する神秘主義的傾向を顕著にし始めたために、ドゥポールら若いレトリスト左派から断罪される。著書に『新しい詩と新しい音楽への序論』（47年）、『スペクタクル作品集』（64年）、『ネオ・ナチのシチュアシオニスト映画に反対』（79年）など、映画についての映画である『涎と永遠についての概論』（51年）はカンヌ映画祭でジャン・コクトーに絶賛され、「アヴァンギャルド観客賞」、「カンヌ映画祭欄外賞」を獲得し評判になった。

*12：マルコ フランスのレトリスト、マルク・O（オー）（本名マルク＝ジルベール・ギヨマン）のこと。

*13：ジル・J・ヴォルマン（1929－95年） 1950年にイジドール・イズーのレトリズム運動に参加、「メガプヌミー」と名付けた音響詩、「シメマトクローヌ」と名付けた実験映画を製作し52年にドゥポールとともにレトリスト・インターナショナルを結成、その中心メンバーとして活動。56年のシチュアシオニスト・インターナショナル創設のためのアルバ会議にはLIの代表として参加するが、57年、SI結成直前に「長年のばかげた生活様式」を理由にLIを除名。

*14：タシスト フランスの1950年代の抽象表現流派。フランス語のTache（しみ）に由来し、非幾何学的な有機的形態の抽象作品を描くアンリ・ミショー、ヴォルスらの画家を指す。

『ポトラッチ』は、レトリスト・インターナショナルの情報誌として、1954年6月から1957年11月までパリから29号が配布された。不十分で失敗した戦後の前衛主義的試みと、シチュアシオニストがいま組織的に開始している文化革命の組織化との間の移行期にあって、プロパガンダの道具としての『ポトラッチ』はおそらく、その時代の最も過激な表現、すなわち新しい文化と新しい生の探求において最も進んだ表現だった。

われわれの企てがいかに多様な富を得ることになろうとも、『ポトラッチ』こそは一時代の文化的理念の空白、50年代の真ん中にぽっかりと空いた穴を埋める唯一のものであった。すでに確かなことだが、それは、歴史的には、現代精神の反動的パロディが支配する時において現代精神への忠実さを証言するものではなく、実験的探求の未来を自らの中心課題とする1つの実験的探求のドキュメントであった。だが、この未来は、われわれ個々の生活においてすでに開始され、動き始めているのである。『ポトラッチ』に帰すことのできる真の成功は、より広くより新しい領域でのシチュアシオニスト運動の統一に役立った点にある。

周知のように、『ポトラッチ』はその名称を北米インディアンのところから取っている。それは、〔より〕贅沢な贈物の交換に基づく、商品形態以前のかたちでの財の流通を名づけたものである。このような無料の機関誌が分配しうる売買不可能な財とは、前代未聞の欲望と前代未聞の問題である。それゆえ、それらを別の機関誌によって深化させることではじめて、返礼の贈物を行うことができる。『ポトラッチ』においては、経験の交換には侮辱——生についてわれわれほど偉大な考えを持たない者たちに向けられるべき侮辱——の交換が伴うことがよくあったが、それもそうしたことから説明できる。

コシオ・ダローシャでのS Iの設立大会以降、『ポトラッチ』はシチュアシオニストのものとなり、彼らはほぼ直ちにその発行を中断した。ミュンヘンでのシチュアシオニスト大会は、ヴィッカール*1の提案で、今回はS Iの各セクション間の内部連絡に役立てるためだけに、『ポトラッチ』の新シリーズを刊行する原則を採択した。新『ポトラッチ』の編集と配布は、われわれのオランダ・セクションの責任下に置かれることになった。

『ポトラッチ』の新たな任務は、今までとは遠う枠組みのなかにあっても、かつての任務と同じくらい重要である。われわれは前進した。そして、そうすることによって、われわれの困難もまた増大させ、われわれの望むものとはまったく異なるものに貢献する機会も増やしてきた。真の改革者たるものは文化の支配的諸条件をすべて転覆するまでそうせざるをえないように、われわれはこの中心的矛盾、すなわち、今のところ現代的と呼ばれている芸術のなかで、それを体現すると同時にそれに対して異議を唱える存在であるという矛盾を生きる。われわれはこの否定性を保存すると同時に乗り越えねばならない。そして、それを止揚してより高度な文化の領土に向かわねばならない。だが、われわれは美的「表現」の定められた手段も、それによって養われた趣味も甘受するわけにはゆかない。この笑うべき揺るぎない世界を止揚するには、S Iはすぐれた道具になるだろう。さもなくば、それは余分な障害物、「新スタイル」の障害物として固まってしまうだけだ。願わくば、S Iがあたうるかぎり遠くまで行くことを。『ポトラッチ』がその

目的に有効に働くよう願おうではないか。

ドゥボール

*1：モーリス・ヴィッカール　S I ベルギー・セクションのシチュアシオニスト。1961年
除名。

シチュアシオニストの運動に関心をもったきっかけは、パンクとのつながりであった。知られるように、セックス・ピストルズの仕掛け人でありマネージャーであったマルコム・マクラレンはロンドンにおけるシチュアシオニストのシンパだった。この事実をふくめて、パンクやニューウェーブの音楽とスタイルを20世紀の前衛の歴史、ダダ、シュルレアリスム、レトリスト、シチュアシオニストの表現と運動との系譜と横断的關係において考察した著作として、グリル・マーカスの『リップスティック・トレイズ』(ハーバード大学出版、1989)は、ある時期までわたしにとってはバイブルのようなテキストだったのである。

というのも、そこでは自分が夢中になってきた音楽と(社会)思想のするどい交差点を見いだすことになったからである。今ではこの本にもいろいろな批判がなされている。

一番大きな批判は、結局この本が、パンクにせよシチュアシオニストの運動にせよ、アカデミズムや既成の芸術の枠組みに還元してしまっているのではないか、というものである(もちろんこれには一理あるが、この本の価値がこれでなくなってしまうわけではない)。

その後シチュアシオニストについて少し調べていくと、どうもマルコムやパンクの運動などは、全く話の外のものとして扱われていることがすぐにわかってきた。ドゥボールらシチュアシオニストの中核は、シチュアシオニストの反体制的な雰囲気だけをスタイルとして表現したり行動したりする輩を強く否定し、「プロ・シチュ」という名の言わばニセものとして弾劾していた。マルコムなどそうしたものの代表例にすぎなかったらしく、パンク(つまりは音楽やサブカルチャー)と社会運動との連帯など、実際には存在しなかったのである。

シチュアシオニストと「プロ・シチュ」の関係については、本書の訳者である木下誠氏が『スペクタクルの社会』の邦訳解説において詳細に論じている。また、同じ解説のなかで木下氏はドゥボールが「除名」という方法を使って、シチュアシオニストの運動の変質、特に文化や芸術への運動の解消に対抗していた経緯をふりかえっている。すでに1959年にはアムステルダムのシチュアシオニストは「統一的都市計画」を体制寄りにすりかえ、芸術表現を社会革命に優先させているという廉で除名、脱退を余儀なくされている。さらに61年のイェーテボリでの大会以降、ドイツの「シュプール」派の芸術志向、スカンディナヴィア支部のヨルゲン・ナッシュのグループの商品化(家具製作)の志向が、こうした指弾と「除名」の対象となった。

別に「芸術派」の肩を持つ気はさらさらないが、この二項対立は案外不毛なのではないかという疑いを長い間もってきた。シチュアシオニストの実践と理論を歴史的にふりかえり、同時にその運動を現代の社会において展開していくにあたって、はたしてドゥボールら「正しい」のシチュアシオニストの原理はいまだに守られるべき教条なのだろうか。むしろ、電子テクノロジーをはじめとする様々なメディアを通して、状況の構築は「商品」や「芸術」のかたちをとっても運動として作り直していけるのではないか。これは日本のバブル経済に躍らされた「プロ・シチュ」の能天気な現代版であり、ますます遍在しつつあるスペクタクルに屈服する身ぶりなのかもしれない。だが、歴史と状況はまだ判定を下していない。

わたしがドゥボールの教条的な身ぶりにうんざりしながらもシチュアシオニストへの興味を捨

てずに、しかも奇妙な居心地の悪さのなかで思考していたころ、欧米では何回目かの「シチュアシオニスト回顧」の機運がたかまっていた。ニューヨークの雑誌「ZONE」では、シチュアシオニスト創成期のメンバーでもあったコンスタントの建築、都市計画「ニューバビロン」が紹介され、ドゥボールや後に彼と対立するヴァネイグムの論文や著作が相次いで英訳されていた。ラディカルな美術誌である「October」に拠る理論家ハル・フォスターあたりも著作のなかで繰り返しシチュアシオニストの実践と理論にたちかえり、単なる美術の文脈への還元をこえた次元での吸収をはじめているように見受けられた(同誌は最近の特集で再びシチュアシオニストを取り上げたが、あまりにも”アカデミック”な内容のために評判はよくない)。もちろん、パリのポンピドー・センターやロンドンのICAで開かれたシチュアシオニストの回顧展が、こうした動きの要因となっていた。

結局、アートや文化資本への運動への回収が起こっただけではないか。ドゥボールに忠実な者なら、そのように断言するだろう。ポストモダニズムは全てを「流用」し、「回収」してしまう。シチュアシオニストも例外ではない。「転用」、「漂流」、「心理地理学」……は体裁よく文化商品に転化されてしまった、と。しかしながら、わたしはそのように言うことで切り捨てられるものにずっと注目してきた。わたしが関心をもつ人は、なぜかみなマルコムもコンスタントもヨルンも、ドゥボールから「除名」され、排除された者たちだった。だからといって、わたしは自分がシチュアシオニストを芸術や資本に、つまりは「スペクタクル」に変えてしまうがわの人間であるとは思っていない。その理由をここでは、理論的というよりは体験的なレヴェルから問題にしてみたい。理論的には、すでに著作のなかでふれておいた(上野俊哉『シチュアシオン』、作品社、1996)。

わたしがひんぱんに日本を出るようになったのは92年以降のことだが、このころすぐに気がついたことがある。それは、ある一定以上の思想的バックグラウンドをもった人間にとって、シチュアシオニストとは一種の「常識」であるという事実である。このことは、その人間がシチュアシオニストの運動に肯定的か否定的かを問わずに言えることであった。むろん、そもそも付き合ってきた相手も相当に片寄ってはいるのだが、活動家や理論家がごく普通にシチュアシオニストのことを知っていることに端的に驚いた。その度合いは、ちょっと日本では想像できるものではない。しかもドゥボールのいたパリよりも、ベルリン、ニューヨーク、ロンドン、そしてアムステルダムでわたしはシチュアシオニストの様々な余波に出会い、それが必ずしもドゥボールの望んだような方向のものとはかぎらないことに気づかされた。「シチュアシオニスト以後」とも呼ぶべき実践と理論のうねりはたしかに多様なかたちで起こっていて、それは今も続いている。

アムステルダムの中心街の1つ、ワートルロー広場の近くにHet Von Sjakooという書店がある。そこは社会科学やフェミニズム、エコロジー、メディア論の書物をあつかっており、世界中の運動の機関誌も置いている(日本の某新左翼党派の新聞もかつては置いてあった)。はじめてここに来てびっくりしたことの1つは、アナキズム、マルクス主義、メディア論などとならんで「シチュアシオニスト」という棚があったことである。

ラディカル本の書店であるという特殊性はあったが、やはり驚きだった。シチュアシオニスト

の実践と理論をボードリヤールやフーコーなどポスト構造主義との関連で問題にした、セディ・プラントの『モウスト・ラディカル・ジェスチュア』もこの新刊の棚から見つけることができたのである(その後、セディとは友だちになった)。ここの本屋以外にも、ロンドンやパリのラディカル本屋を渡り歩いて手にいれた、わたしのシチュアシオニスト関係の本や資料は今ではちょっとした文庫と言えるほどにまでなっていて、Sjakooのコレクションをいつの間にか上回るようになってしまった。

92年に旅行中のさい、カールスルーエにメディア・アーティストのジェフリー・ショウを訪ねた。ジェフリーにシチュアシオニストについて聞くと、ロンドン、ミラノ、アムステルダム……と渡り歩いてきた彼は当然この運動の重要性を認識していた。そのおりにアムステルダムにシチュアシオニスト以降の資料を大量にもっている彼の古くからの友人がいることを教えてくれた。

チュベ・ファン・タイエンというそのアーティストは、その当時アムステルダムの社会史研究所でも働いて、シチュアシオニストの以前と以後にわたる運動や活動の資料を蒐集していた。しかも彼は60年代の学生運動から80年代のスクウォッティングの運動にいたるまでつねに政治的・実践的にも最前線に位置してきた、アムステルダムでは伝説的な左翼の1人でもあったのである。93年の春にはじめて会ったおりに、彼は書店Sjakooの創設メンバーでもあったことがわかった。

アムステルダムでは今日でもスクウォッティング、自由ラジオ、海賊テレビの運動が盛んであり、その雰囲気は今や自由ネットやハッキングなどサイバースペースにまで広がっている。運動と表現、政治と芸術が密接に、しかもしなやかにからみあいながら展開されていくスタイルも、ここではすでに歴史的なものと言えるだろう。その特異性には、「シチュアシオニスト以前／以後」の様々な運動がつながっていることを把握するのに、そんなに時間はかからなかった。そもそもアムステルダムとシチュアシオニストの因縁は第二次世界大戦期にまでさかのぼる。知られるように、芸術社会運動としてのC o B r AのAはアムステルダムの頭文字である。特にアムステルダムではデンマーク人のアーティスト、アスガー・ヨルンが有名である(市立美術館などに収蔵されていた作品は、現在ではC o B r A美術館に移されている)。彼はレジスタンスの時期から構成主義、文学、シュルレアリスム、モダニズム……などと交流しながらヨーロッパ各地を横断し、レトリスト、イマジニスト・バウハウスなどの芸術運動を展開した。彼はその後57年のシチュアシオニスト創設に関わり、61年に「除名」されるまでドウボールらと協働する。シチュアシオニストの運動資金の一部はヨルンの絵画を売却することで作られていたという話もあるし、彼はドウボールの映像作品のスポンサーでもあった。「除名」後も2人の個人的な交流は続いていたと言われている。

C o B r Aの絵画や作品は、一応美術史の文脈にも「抽象プリミティヴィズム」といった無理な括りが入っており、無意識や狂気、未開人や幼児の想像力に対する関心をもつアートの1こまとして理解されている。むろん、この見方は不十分であって、C o B r Aが何よりも運動として組織されていた点、またヨルンらもっていた思想の意義をとりながすことになる。しかし、ヨルンの発想は神秘主義につながるおそれのあるものとしてドウボールに一蹴される結果になって

しまった。

ヨルンとともにC o B r Aからシチュアシオニストの運動に参加した芸術家のコンスタント・ニューヴェンホイスもここで忘れるわけにはいかない。彼は芸術家としてのみならず理論家として前記の運動に関わっており、いくつもの重要な маниフェスト、論考をもたらしている。さらに彼は60年代から70年代にかけては絵画制作を放棄し、「ニュー・バビロン」と題された未来の都市計画の模型と図面の制作に腐心する。都市の全体を空中に浮かせ、道路や各種インフラの流れと別個に居住空間を配置し、自由に移動可能な仕切りでもって地理的空間じたいを「漂流」させる、というこのコンセプトは現在でも建築家はもとより、都市論、メディア論の方向からも強い関心が向けられている。この都市には通り＝街路が存在しない。逆に全てが自由に移動可能な回路、網の目になっており、移動機械は都市の被膜の上をおおい、可動的なテラスが空を移動する乗り物の乗り場になる。「未聞の可変性」、「予期しない遊戯」、「偶然の漂流」に人々はさらされるのだ。59年において、すでにコンスタントたちの構想はメディアのネットワークに結びついている。

ただし不幸なことにコンスタントはヨルンらと同様に、シチュアシオニストの指導的理論家だったギィ・ドウボールとの確執によって、ほとんど除名同然のかたちで運動から脱退（脱落?）したとされている。結局ドウボールのがわから言わせれば、コンスタントやヨルンは結局、芸術家として「芸術作品」を作ったり、環境整備としての「都市計画」にとりくむことを、革命的な「遊び」としての「状況の構築」に優先させた美学至上主義者にすぎないとされてしまっている。

はたしてそうだったのだろうか？ この点に対する見直しは、たとえばグラハム・バートヴィッスルの刺激的な著作『生きているアート』が出た段階で飛躍的に進んだと言えるだろう（これもSjakooで手に入れた）。ヨルンの無意識、自然、魔術、遊戯への関心をバートヴィッスルは慎重に読み解いている。すなわち彼は、自然と社会に共通する目に見えない力やエネルギーのネットワークや流れを表象する地図や図表としてヨルンの芸術はあったのではないか、という大胆な読みを、レジスタンスの時期から戦後にいたるヨルンの理論的著作に見いだしている。さらにヨルンの「生きている装飾」（Living ornament）という概念のなかに、形式と内容の二元論をこえた生きた自然の生成の論理を、社会や身体の編成の論理と重ねて提示する美学＝感性をすかし見てみせる。

現実と別の仕方で出会うための、生きた自然と社会の地図としてのアートというこの発想は、ヨルンのなかで唯物論と宗教、科学と神秘主義の関係性という点にまで煮詰められる。このあたりがドウボールの不興をかったわけだが、こうした問題関心が今日の思想や運動の前線と微妙にふれあうものであるという事実をおそらく無視することはできないのではないか（この点は後でもう一度ふれる）。コンスタントがまだ存命中であり、アムステルダムで暮らしていることをつきとめたわたしは、苦勞して彼の連絡先を探しあて、ついに94年の春に会うことができた。中央駅にほど近い、運河ベリの家並みのなかに彼の家はあった。二間続きの大きな書斎にはもちろんわたしの知っている多くの文献があり、そこには彼が弾くとおぼしきいくつかのギターのケースが並んでいる。愛犬が吠えてじゃれ回る室内で、彼はわたしの質問の1つ1つに丁寧に記憶をまさぐるようにして答えてくれた。彼は自分に対する人々の現在の興味や関心が「ニュー・バビロン

」のプロジェクトに集中していることがいくぶん不満のようだった。けれども、彼の絵画と歴史や社会のカタストロフィックな出来事（戦争や難民）との関係、その絵画表現におけるカルトグラフィ（地図製作的）な部分に質問がおよんだころ、彼は遠く日本からやってきた奇妙なゲストにも少しずつ心を開いてくれるようになった。ドゥボールやそちらのがわに立った議論や紹介を読んでいたわたしは、彼は気難しい人間なのではないかと警戒していたのだが、それが杞憂にすぎないことがすぐにはっきりした。

おそるおそる、彼の「除名」についても話を聞いた。彼ははっきりと「除名」はドゥボールによる一方的な決定であったこと、自分は決して社会変革を軽視し芸術至上主義に走ったつもりはなく、ヨルンもまた自分と同じように考えていたはずだと強い調子で言い切った。むろん、一方の当事者の発言を全面的にとりあげることはできないかもしれないが、少なくともドゥボールのがわからの主張しか読んでいなかったわたしには新鮮な一瞬であったことを告白しなくてはならない。

コンスタントは2, 3日後にもう1度今度は自分のアトリエで会わないかと誘ってくれた。そうすれば、今度は自分の製作中の作品も見せてくれるというのである。もとより断る理由は全くない。ありがたくこの申し出を受け入れ、数日後、わたしは中央駅からバスで10分ほどの彼のアトリエを訪ねた。もう30年近く使っているというアトリエの入り口には、様々な資料のなかの写真で知るのみであった「ニュー・バビロン」の模型の1つが飾られており、家から彼と同伴している愛犬が出迎えてくれた。運河ベリの冷たい風のなかにも、どこかやって来つつある春が足取りを軽くさせるような日だったが、彼はちょうどルクセンブルグ産の白ワインを空けたところで、それをわたしにもすすめてくれた。

軽い切れ味のワインを楽しみながら、わたしはコブラの時期、「ニュー・バビロン」の時期、そして現在の彼の絵画制作にわたる3つの時期に通底する彼の「変革」への夢と空間的な「迷宮」へのこだわりについてもう1度問いを深めていき、前ラファエル派から構成主義にいたるまでの彼の「趣味」について、ずいぶん無遠慮な質問もした。

特にニューヨーク時代のモンドリアンにとってブギウギが特殊な意味をもったように、彼の絵画においては音楽的な構成が重要な役目をはたしており、それが彼の作品の「社会性」にとって決定的なものであることが、彼の口から確認できたことは率直にうれしかった。ホイジンガの「ホモ・ルーデンス」流の「遊び」を革命的な運動に読みかえ、イタリアのジプシーのテントに未来都市のノマド的な生のモデルを見いだす彼の姿勢には、ドゥボール流の実は古典的な「政治と美学」の二項対立とは全く別の視点があるように思えた。アトリエには弦をスティックで叩くジプシーの楽器が置かれており、彼はそれを弾いてくれた。その瞬間、彼のなかでは音楽的律動は”サブカルチャー”として彼の社会理論と視覚作品を横断していることをわたしは自覚していた。

ヨルンやコンスタントの芸術と表現、文化運動のヴィジョンのなかには、アムステルダム現在の運動に通じるような問題関心がひそんでいるのではないかとわたしは思いはじめていた。しかし、そうは言っても運動の現場ではもはや彼らにそれほどの期待はない。逆に彼らはすでに「美術館」に収蔵された大文字のアートの仲間入りを果たしており、制度の内と外をかいぐ

るような運動を目指すスクワッターやメディア・アクティヴィストは彼らへのシンパシーを失っているようにも見える。シチュアシオニスト周辺の運動でアムステルダムで今も語り草になっているのが、「プロヴォ」Provoの運動である。まさに文字どおり挑発（provocation）を旗印にしたこの運動は66年前後にパリの5月にさきがけるような運動を展開した。不良、ビート族、モッズ、フリーガン……などに構成された「プロヴォタリアート」（provotariat）とは、この運動に影響されて街で動いていた連中を指している。

「プロヴォ」は社会運動であり、同時にパフォーマンスやハプニングを組織する表現の運動でもあった。広場の真ん中に集まって詩を朗読したり、パフォーマンスをやったりしながら若者や知識人をこの街頭の闘争に巻き込んでいったのである。ドゥポールのISの視点からすると、この「ダッチ・プロヴォ」の運動はパンクなどと同様に単なる愚連隊の跳ね上がった行動にすぎなかった。それは主意主義的で美学的で、文化に傾きすぎた運動というわけだ。

しかし少なくともアムステルダムの現在の運動に具体的に影響をおよぼしているのは、ドゥポールの弾劾にみちた宣言や思想の断片であるよりも、あくまで周辺の運動にすぎなかった「プロヴォ」の方である。とって、ここには身内の鬮屑やナショナリズムや地域主義は一切ないことをことわっておくべきだろう。アムステルダマーほどそうしたものと遠い存在はないからである。

「プロヴォ」は原爆の禁止、公害闘争、ヴェトナム反戦といった課題を引き受けながら、「ホワイト・バイシクル運動」という変わった運動を展開した。これは街のなかに白い自転車をいくつも配備しておいて、誰もが乗り捨て自由に利用するというものだった。子供のとき自分の自転車を白く塗って運動に参加したという友人をわたしは何人が知っている。運動としては消えてしまったが、トラムのただ乗りや捨てられた自転車の再使用、自転車の盗みあい(?)などは今も日常の身ぶりとして根付いている。こうした身体的無意識が「プロヴォ」の運動と無関係であったとは考えにくい。

「プロヴォ」はサンフランシスコの「ビーイン」やニューヨークの「マザーファッカーズ」などと同時代を生きており、おそらくその後のパンクに連なるような若者文化であった。シチュアシオニストの周辺領域へのわたしのこだわりは、若者運動、社会運動、表現文化のなどのより大きな文脈のなかでシチュアシオニストをとらえていくことに徐々に移っていったのである。

ここで1つだけ事例を共通する事例をあげておけば、ドラッグに対する関心があげられる。60年代にはアシッドによる感覚の解放と拡張がさかんに主張されたが、「プロヴォ」もまたサイケデリック革命を社会と意識のマイクロ／マクロな両次元で展開することを目指した。「プロヴォ」をふくむこのころの運動に使われた図像、落書き、ポスターやパンフ、ビラなどのデザインを見ると今日のクラブやレイヴのフライヤー(ちらし)とほとんど変わらないものがあることに気づく。むろん、それらが過去のサイケデリック文化を受け継いでいるからでもあるが、感覚変容のメディアとしてのドラッグという視点は、20世紀の社会運動や若者運動をおさえる上で落とすことのできないものとなるだろう(世界中から集められたこうした資料はペンギン叢書に入っている『BAMN アウトロー宣言とエフェメラ1965～1970』で確認することができる)。

70年代に、プロヴォの活動家であったロエル・ファン・デューンはオランダ王室をパロディ

にしたコミュニオン、「オレンジ自由国家」の構想を発表する。「オレンジ自由国家」は住宅問題とエコロジーを課題とし、「ラジオ2000」という自由ラジオも計画された。この「オレンジ自由国家」の宣言文に次のようなものがある。

「アルタナティブな社会は現存する秩序のサブカルチャーのなかから生まれてくる。不満をもった若者たちのアンダーグラウンドな社会は、支配的権威とは別に下からわきあがってきて、自らを治めるのである。この革命は今や使い尽くされてしまった。これはアンダーグラウンド、抗議、デモといったものの終りを意味する。今やわれわれは反権威的な社会の構築に力をさかななければならない。……伝説の都市の妖精のリングはワールド・ワイドなネットワークに連結していきましょう、つまり” オレンジ自由国家” (the Orange Free State)に向かつて」

これを読むと、この「オレンジ自由国家」が後のスクウォッティングやメディア・アクティヴィズムと「プロヴォ」をつなぐ役割をしたことが理解できる。80年代にスクウォッティング運動のなかから、無数のスクウォッターやルンペン・プロレタリアートたちが、市内のフォンデル公園と周囲の住宅地に「フォンデル自由国家」を設立した。この解放区は、政府の治安部隊、戦車、ヘリによってわずか3日で鎮圧されたが、一時的にのみ存在する自由で自律的な空間/時間という構えは、ハキム・ベイのTAZに先駆けて運動のなかに息づいていたと見ることもできる。

また前述の宣言文にすでに「ワールド・ワイド・ネットワーク」という言葉が使われているのは面白い。この段階では、まだ誰もワールドワイドなウェブに自分のパソコンをつないで作業をするということは予想もしていなかったはずだ。まさに運動の想像力はときにテクノロジーの時代的文脈をこえるようなふるまいを見せるのである。

「プロヴォ」の関係者の多くはまだ生きている。シモン・フィンケルヌーフ（1928年生まれ）は戦後のオランダの代表的な詩人の1人である。アレン・ギンズバーグを翻訳し、コンスタントやヨルンなどC o B r Aの作家たちとも共闘し、コンスタントの「ニュー・バビロン」の模型には詩とマニフェストを寄せている。「プロヴォ」の導師（グル）として、これもまた伝説的な人物である。

やはり94年に彼にインタビューする機会をもった。ちょうど日本では阪神の震災とオウムによるテロがあったばかりで、彼は原理主義とテクノロジー的合理性による日常生活への復讐だと繰り返していたのを思い出す。ヨガやスーフィズム、風水や易経など、西欧ではエソテリズムや神秘主義の文脈にあたる文化に関心をもっているようだった。

ただし精神世界やニューエイジ文化にいかれた元ヒッピーとは片付けられない側面もあって、「ブレス」という自ら編集委員をつとめる雑誌では運動や闘争の情報のページを担当している。エコロジー政策よりの政治党派である民主66のメンバーとしても活動している（むろん66とはプロヴォの最盛期の年を指している）。彼はわたしに次のように力説した。

「この40年間、世界は1つの革命を生きてきた。スペクタクルの乗り越えは言葉や言語の新しい変換された使い方からはじまった。シュルレアリスムもビートニクスもシチュアショニ

スト、現代のサイバーカルチャーもそれを行ってきた。残念ながらシチュアシオニストは最後にはスターリニズムやドグマ的なマルクス主義のパロディになってしまった。分派、分裂、除名、中傷のしあいだ。古い政治を批判するうち、自分がその古い罫に陥ってしまった。言語を変換させ欲望と世界を変えるテクニックとテクノロジーは、身体の外的拡張や意志の外化や表現ではない。それはかつてマックルーハンが言ったように内破(内部拡張)するものだ。そのかぎりでのこの言語の変革は社会全体の変革と結びつく。LSDもマリファナもそのためのメディアとしてののみ意味があるんだ」

自家製のワイン、自家栽培のマリワナをあおりながら語る彼の話を聞きながら、シチュアシオニスト以後／以前の運動と思想が思いもよらないかたちで変成をはじめていることにわたしは少なからず感動していた。

ここでは彼が69年に書いたテキストである「幸福に向かうハイな道についてのラップ」(『カウンターカルチャー』、ピーター・オウエン社、1969)にふれておきたい。このエッセイではたえず自発的(スポンテニアス)で、名前もなければリーダーもない熱狂的な若者の運動としての「プロヴォ」が強調されている。ここで彼がラップという言葉はかなり自覚的に使っていることに注意する必要がある。挑発や抗議という文字上の意味のほかに、彼はジャズ的な中断のリズムを喚起させるためにこの言葉を使ったという。同じ言葉と身ぶりが後年、黒人の街路文化、若者文化で大きな力をもったことを、彼は楽しい偶然と言って喜んでいた。「プロヴォ」は「街路の次元での世界政治」だったのであり、「プロヴォタリアート」の視線は不良(nozem ちんぴら、愚連隊の意味。ヘブライ語、イーディッシュ語に由来する)のそれである。

「まさに自分の生をもって、この時代にカウンター・カルチャーと呼ばれる、永続革命に属するかどうかを決定しなくてはならない。ホモ・ルーデンス、エクスタシー、体験、神、世界意識、グローバルで惑星的で普遍的な宇宙卵、大いなる眼……といった別ののりものを見つけなければならないのだ」

ドゥルーズ&ガタリとマルクーゼを足して割ったような言葉だが、あくまでもこの選択は「スペクタクルの超克」に関わっており、感覚やテイストの決定であると同時に政治的な決定である。さらにここではサイケデリック文化と電脳文化、精神分析やメディア論の接点、横断的關係がすでにならりの次元で追求されている。シモンの言説におけるこのようなテクノロジー的かつメディア論的な含意は、彼がコンピュータ文化に出会う以前から使われているのは面白い。同じエッセイのなかでシモンはジミヘンのギターが引き起こす陶酔とドラッグによるそれを比較し、将来的にはサイバネティックな方法でトランスが可能になるのではないかと予想している。このテキストの後半にはLSDのキューブを水道によって供給するというフィクションが挿入されているが、シモンはテクノロジーの環境とスペクタクル化が、“サイケデリック”な感覚操作を行う可能性についてふれている。

シモンが立っている場所からハキム・ベイが立っている場所まではもはやあと1歩でしかない

。ハキム・ベイは本名の方の名前を使うときにはスーフイズムをはじめとする神秘主義とアナキストの政治、現代のアクティヴィストの運動の重なりまでを睨んだ論文や著作を発表しているが、このことも「プロヴォ」やC o B r Aにまでさかのぼる長い文脈で見つめる必要があるであろう。

アムステルダムにはこのようにシチュアシオニストの本流とは外れたところに、ある可能性が生まれ、それは今も動き続けている。ことはロンドンでも同じではないのか。わたしは自然にそのように考えた。「プロ・シチュ」のばかげた騒ぎの方に目を向ける愚かな読みかもしれないが、少なくとも今ここでの運動、思想に何をもちたらし、どんな方法、道具、戦略を準備しているかを見ることも大事なことではないだろうか。

そんなことを考えて、相変わらずヨーロッパ各地のメディアの会議やアートの展覧会をうろついていたら、ロンドンで「アンダーグラウンド」というミニコミを発行し、自分たちもメディア・アートの作品を作っているグラハム・ハーウッドとマシュー・フラーの2人組に出会った。彼らはしかし通常の意味でのアーティストではない。身分的には元失業者の現在フリーランサーの活動家といったところである。彼らはパンクやキング・モブ・エコーの流れを汲んでおり、例によってシチュアシオニストの実践と理論は彼らにとっても基礎教養なのであった。彼らを通して前述のセディ・プラントとも知りあいになったし、前々から気になっていたロンドンの作家スチュワート・ホームに出会うこともできた。

『レッド・ロンドン』や『ブラック・マスク』といった暴力やセックスを主題にした小説も発表している作家、アクティヴィストであるスチュワート・ホームは『文化に対する攻撃』でシチュアシオニストの歴史と理論を研究し、これを今日のメディア・アクティヴィズムにつなげる理論と実践を展開している。特に彼はシチュアシオニストとパンク以降の様々な運動や現象の関係を横断的に解釈している。彼自身もパンクのミュージシャンであったり、パンクのバンドの親衛隊であった時期がある。

彼はシチュアシオニストの思想と実践を80年代イギリスにおける「ネオイズム」、「盗用主義」、「アートストライキ」、「クラスウォー」といった運動や思想と積極的に接合している。またさらにパンクとシチュアシオニストそしてダダを単純に線状にとらえる視点をこえて、フルクサスやメールアートの歴史と今日のメディア・アクティヴィズムをつなぐカギとしてシチュアシオニストの運動をつかまえている。彼は80年代後半から「盗用主義フェスティバル」を組織したり、自ら「アート・ストライキ」を実践するなどロンドンのアクティヴィズムにも深くコミットしている。

96年の春にはロンドンのエスニック系移民街であるベスナルグリーンの彼の家をたずね、討論をすることができた。このインタビューのうちに彼の出版直前の最新編著『読本・状況主義とは何か?』を贈られ、読むことができた。「シチュアシオニズム」というまさにドウボールが全否定した言葉が使われているのを見て絶句する読者もいるかもしれないが、このリーダーは英米におけるシチュアシオニストの運動の多面的な広がりや、その理論にわたってよくおさえてある。

特に彼が主張する概念で、グラハムやマシューにも共有されている戦術的な概念に「盗用

主義」plagiarismuがある。それはポストモダンな「流用」appropriationよりも、ドゥボールの定義した「転用」や「剽窃」の方に近い。「盗用」は何でもありのパクリではなくて、「労働の拒否」や「アートストライキ」といった、より直接的な社会運動に開かれている。

ちょうどホームの家に遊びに行っているときに、彼の友人たちも来ていたのだが、彼らは何とシチュアシオニストと同時に運動を開始した「ロンドン心理地理学委員会」London Psychogeographical Associationのメンバーたちであった。彼らからは最近の活動のニュースレターをもらうことができたが、ここにも神秘主義やハキム・ベイへの関心が主題化されていることには強く興味をもった。心理地理学委員会は定期的にロンドンの街のどこかで自由参加のかたちでサイコジオグラフィカルな「漂流」、「遊歩」にとりくみ、これをレポートしている。王室にゆかりのある建築とそこに隠されたコスモロジーを探求したり、ルネサンス以来の錬金術や図像学と現実の都市の構造との連関を問題にするなど活動の内容は実践的かつ創造的である。「心理地理学」や「漂流」を単なる路上観察学にしてしまわない力はこうした持続の営みのなかにしかないのかもしれない。

このように、いったんドゥボールに代表されるシチュアシオニストの主流や、パリという地域性を離れたところからシチュアシオニストの運動と思想の余波を追ってみると、そこには意外に面白い鉱脈がひそんでいることが見えてくる。ドゥボールたちの強い批判の論理のいったん裏側に出てみたり、シチュアシオニストの提起した問いや思考をしなやかに組み直したりする読みや実践こそが、今日シチュアシオニストの運動を受け継ぎ、展開するためには必要なのではないか。読者がより柔軟で目でシチュアシオニストの残した遺産にふれることを望むのはそうした理由による。